

海氣集

Written by Admiral TOGO (KAIKISHU)

海上自衛隊

J.M.S.D.F

目 次

象 徴	参 考
出 港 用 意	歓 艦 式
出 港	検 閲 式
航 海	短 艇 競 技
投錨・入港作業	練 習 艦 隊
拔錨・出港	駆 潜 隊
対潜戦闘訓練	掃 海 隊
対空戦闘訓練	港湾防備・魚雷艇隊
対水上射撃	港湾防備・哨海艇隊
応 急 訓 練	敷設艦・ヘラルド設置作業
溺者救助訓練	潜水艦救難艦
傷 者 処 置	舟 艇 隊
ハイライン展張訓練	高 速 救 命 艇
演習の幕を閉ぢる	遠洋航海・ハワイ
荒 天 航 行	ク シヤトル
大自然の前に	ク ブレマートン
母 港 え 入 港	ク バンクーバー
艦 旗 降 下	ク シ ス コ
舷 門 当 直	ク ポートランド
夜 の 港 風 景	スターもPRに一役

Subj: Message to inform the publication of the "KAIKISHU" by the Japanese Maritime Self Defense Force, and the publication of advertisement to recommend it; request for

We Japanese people did not know the movement of our army in ancient times, therefore we can say easily that we did not take any responsibility for it in general at that time.

But now most of their activities by the Japanese Defense Force are opened to the public, and then it is necessarily for us to understand them well and to recognize the reason and meaning of existence of our army.

This time we could publish a booklet with many pictures as the attached sheet, owing to Chief of the Maritime Staff and other officers concerned. We accepted these officer's help and kindness, and Commander of Self Defense Fleet named this the "KAIKISHU".

It is through their kindness that we have published this booklet.

Turning over the leaves, you will be able to understand in detail how the Maritime Self Defense Force is under present condition.

We our party would like to show or present this graph to all the Japanese, who are not the Navy personnel, but the younger generation and their education facilities which will be the support and driving force of fortune Japan. And we hope this booklet will contribute to a popularization of a defense thought of Japan, which is an important mission of our party; so that we wish you, understanding your own mission to defend our fatherland, try to recommend this booklet as much as possible and to support to insert an advertisement.

Foundation Date: in 1952
Chief of Director of
the "Boei-Tomonokai"
NORIHISA TAKANASHI

お 礼 の 言 葉

今回自衛隊十週年を迎え（海上は八年）記念グラフ編集に際しましては海上幕僚長艦隊司令官を始め関係諸官の御理解を載いた許りでなく望み難い数々の便宜を与えられ積極的な御指導と御援助を賜りましたことを紙面を通じ厚く御礼申し上げます

尚艦隊司令官よりは意義深き「海気集」と御選定賜り此処に発刊の運びを見るに至りました此の一枚一枚が隊員皆様の汗と努心の賜ものであると共に海上自衛隊が今日如何なる現状にあるかを具体的に一般国民の目に訴え一人でも多く海上自衛隊の実情を認識し国防の重要性を感じる結果ともなれば望外の喜びと存じます

防衛友の会本部

海上自衛隊の使命

我が国は周囲海に面し延々16.214浬に及び、強大な軍備を持つ隣国にかこまれている一孤島である。

ミサイルが飛びロケットが月に到達しても海は偉大な資源として又貿易の交通路として我々の生活に欠く事の出来ない存在である。

海上自衛隊は果てしない大海原を舞台とする実力部隊であつて平素は対潜水艦作戦や対機雷戦を主にした海上交通の確保をはかる訓練を行なうほか災害出動等国の安全と独立のために活躍するのがその使命であり、陸海空の自衛隊が緊密な協力によつて其の力を発揮する。

EXPLANATION : Mission of the Maritime Self Defense Force and
Organization chart
Of the Self Defense Fleet

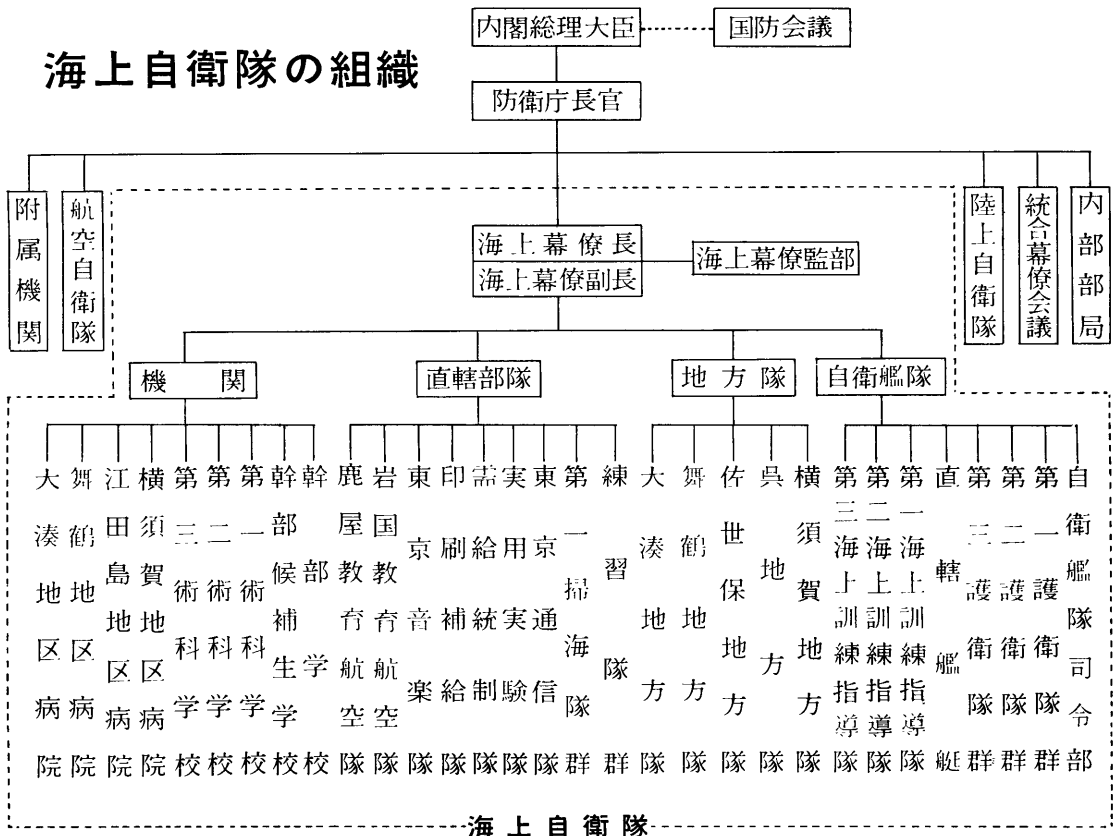
海上自衛隊小史

海上自衛隊は昭和27年4月26日海上保安庁の機構のなかに海上警備隊として生まれ同年8月1日保安庁警備隊となり、更に29年7月1日に現在の防衛庁海上自衛隊と変った。使命は「直接侵略及び間接侵略に対して国の安全を保つため、わが国を防衛する」ことにある。

発足当時の規模は掃海艇45隻、雑船35隻、隊員約1,500名、地方の部隊も航路啓開（機雷の掃海など）業務を主体にした唯一カ所の横須賀地方監部（現在の横須賀地方総監部）が置かれたただけだった。しかし、発足の年の8月に舞鶴、28年9月大湊、佐世保、29年7月に呉と、四地方総監部がそれぞれ発足した。また海上部隊の主力自衛艦隊は29年7月編成され、第一掃海隊群は同年10月、練習隊群は32年5月編成されている。

学校は28年9月術科学校、29年9月幹部学校、32年5月幹部候補生学校が開設、術科学校は33年4月から第一（江田島）第二（横須賀）の二校に分かれた。

航空部門は国産化の決ったP2V-7の増勢などに備えて教育航空隊、術科教育隊を新設、実施部隊と教育部門の強化により海空が一体となって海の護りにつく態勢を固めつつある。





自衛艦隊とは

自衛艦隊とは、護衛艦隊と航空集群をもつて成り海上防衛の機動的部隊である。

艦隊は洋上における商船の護衛のための対潜水艦戦を行うため特別の警備区域をもたないで必要に応じて日本の海域の全般に行動する機動部隊である。

平素は横須賀、呉、佐世保、舞鶴、大湊などを基地として訓練を行い、海上自衛隊の主力とも言うべき部隊である。

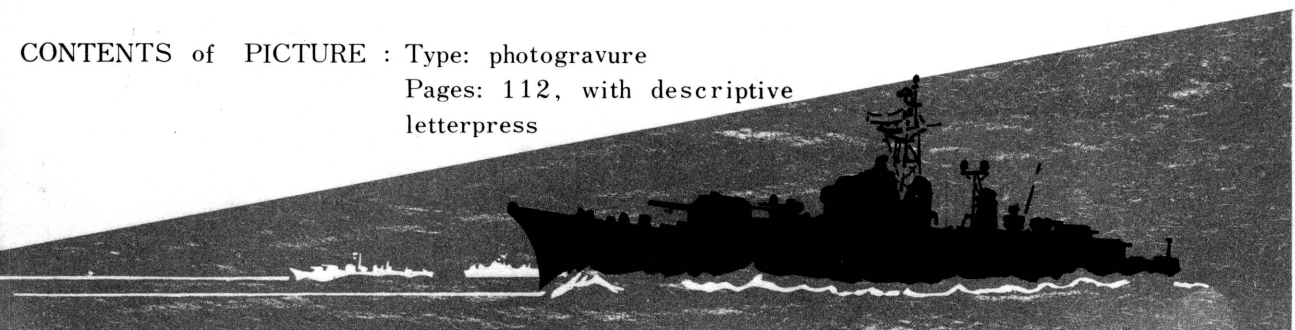
「旧海軍との呼称の差を参考に記す」

新呼称	旧呼称
 自衛艦 自衛艦を何隻かで編成したものが護衛隊や駆潜隊という。 護衛隊が幾つか集って護衛隊群という。 護衛隊群を全部集めたものを護衛艦隊と言う。 自衛艦隊司令官 配置海将級 第〇護衛隊群司令 海将補級 第〇護衛隊司令 一等海佐級 自衛艦の長は（今も昔も）艦長と称し二佐、三佐（海軍少佐、中佐）を云う。	駆逐艦や駆潜艇等をいう。 第〇〇艦隊 聯合艦隊 聯合艦隊司令長官海軍大、中将 第〇艦隊司令長官 海軍中将 第〇駆逐隊司令 海軍大佐



CONTENTS of PICTURE : Type: photogravure

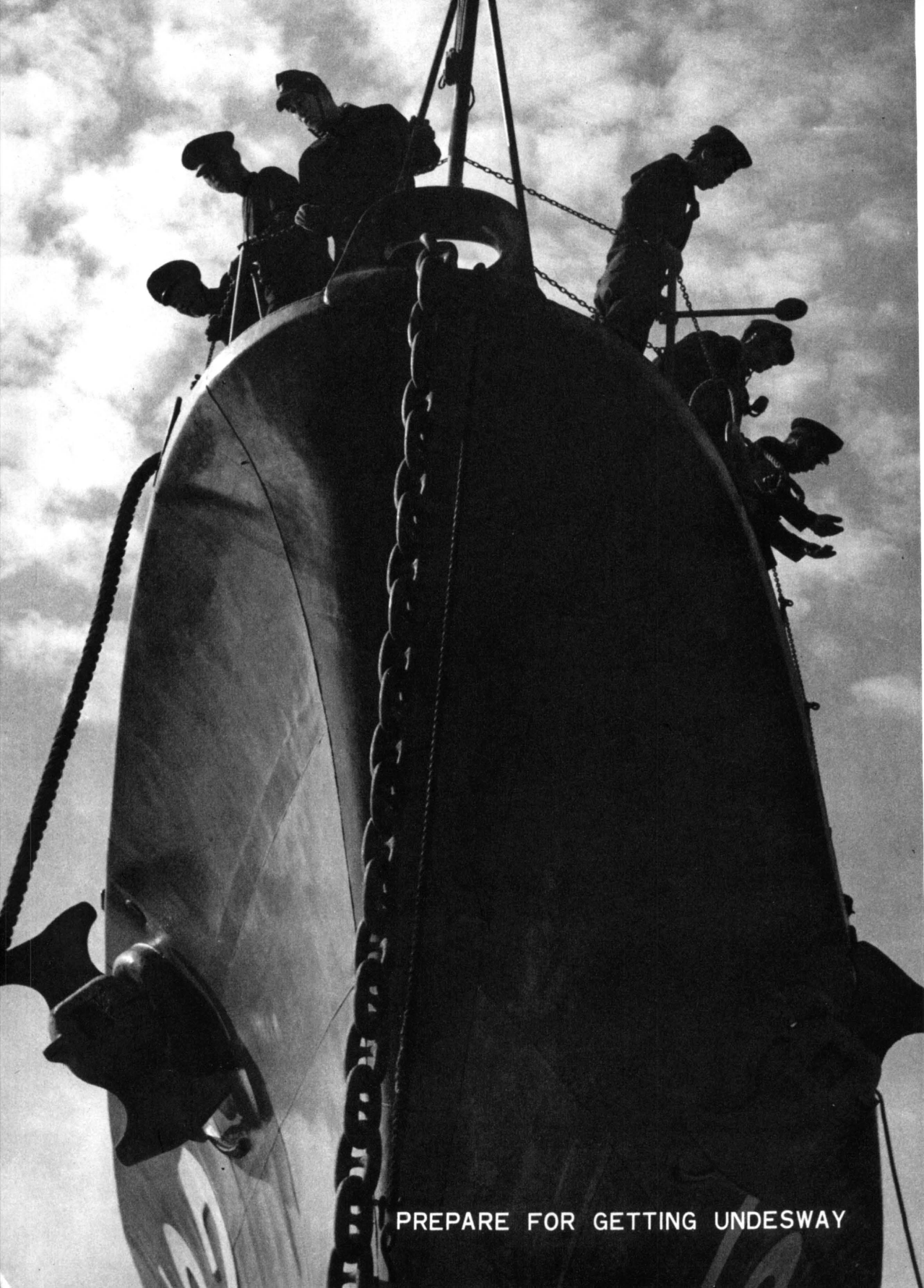
Pages: 112, with descriptive
letterpress





朝日にはためく艦旗

創設の苦しみ建設の苦難も隊員一人一人の自覚と
国民大多数の理解と協力により、ちやうど朝日が昇
るように輝かしい未来がある。
やがては母なる大洋の平和、日本独立の礎の象徴
として艦旗はひるがえる。



PREPARE FOR GETTING UNDESWAY

出 港 用 意 其 の 一

「受持ち分隊出港準備作業か・れ!!」
の号令で艦内は俄かに勇み立ち、敏速
を旨とする乗員は数秒にして配置につ
く甲板員は浮標にとつた錨鎖をもやい
索（太い綱）に替える。

←

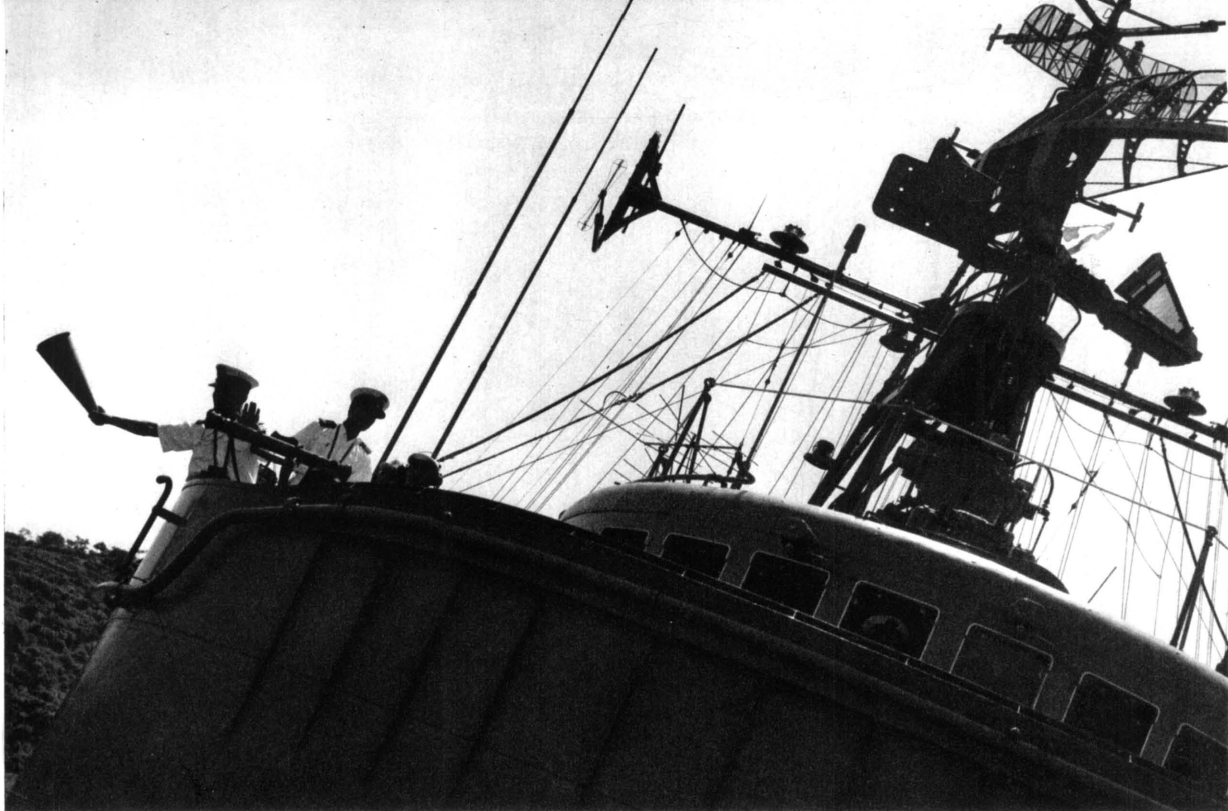


其 の 二

解纜…内火艇揚げ方

浮標（ブイ）からとかれた「もやい」索
は、艦首の甲板作業員によって引き上げ
られ整頓される。
内火艇は（揚艇機）によつてつり揚げら
れる。

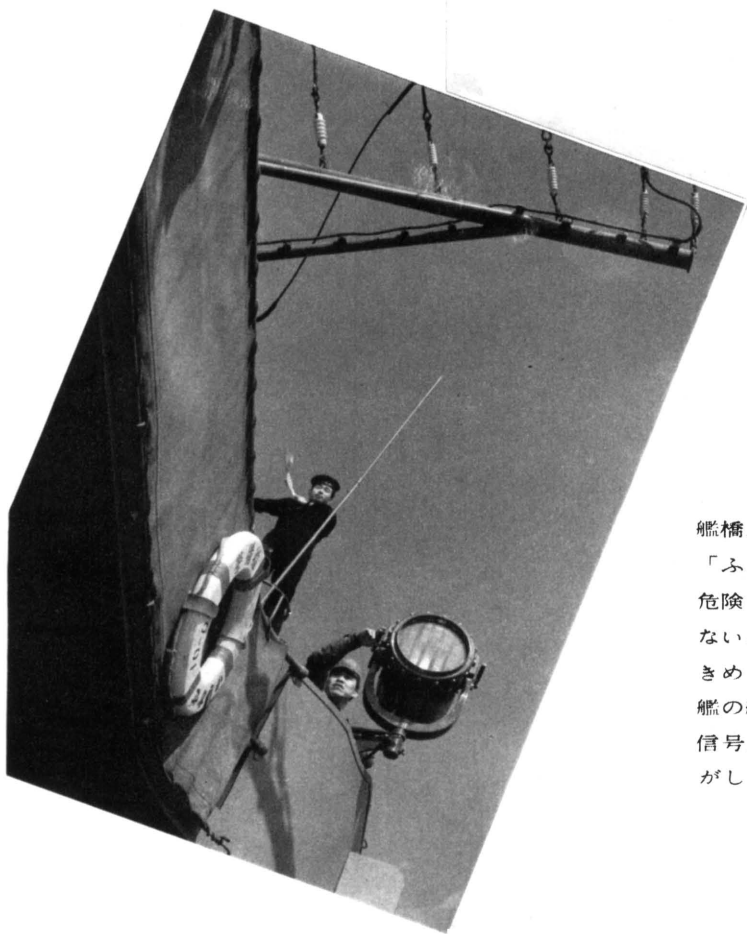




其 の 三

艦橋上部における艦長の操艦指揮、副長、航海長
船務士、航海当番は艦橋にあつてその補助をする
電話員は各部との連絡をとる。



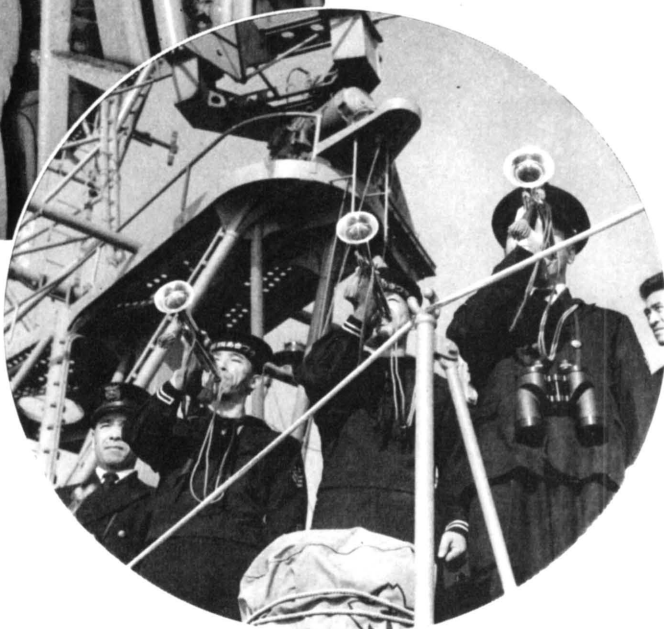
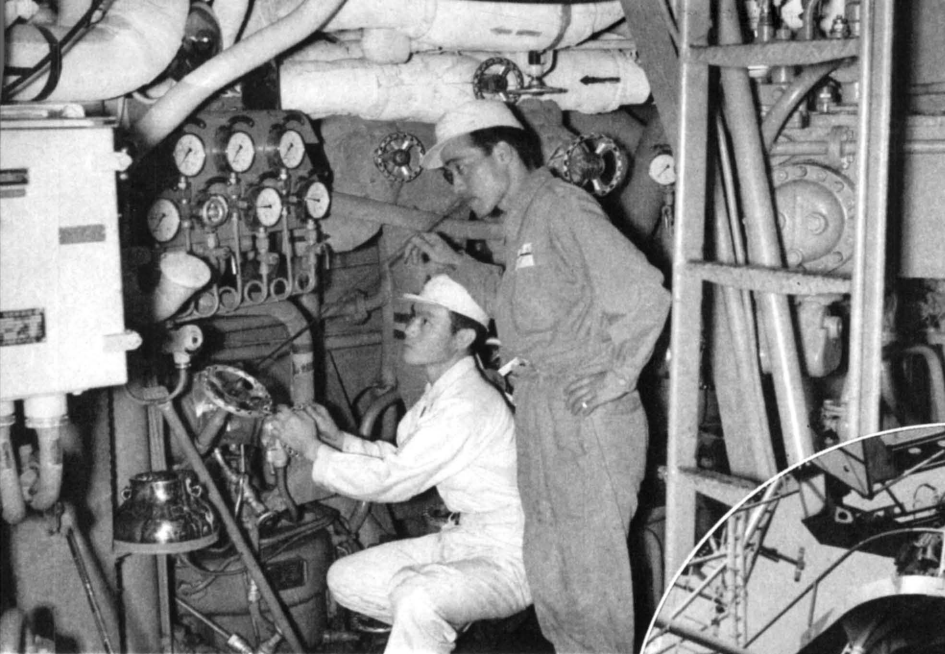


其 の 四

手旗信号と発光信号

艦橋上部は風当りが強いよく足を
「ふん張って」手旗を送らないと
危険でもあるし原画がはっきりし
ない。

きめらく太陽よりなお輝く光が倅
艦の艦橋から送られて来た。
信号員は發送信号の送受信にいそ
がしい。



其 の 五

縁の下の力持機械室はゴージャスと耳を
ろうする轟音の洪水…機関科員は艦底
にあつて艦の航行には盲同様だが艦長
の号令はテレグラフをもつて達せられ、
きびきびと機関操作をする。

室温四十度を超すという酷熱の中に機
関科当直員は勤務する。

出港用意のラッパは艦内にひび

きわたる

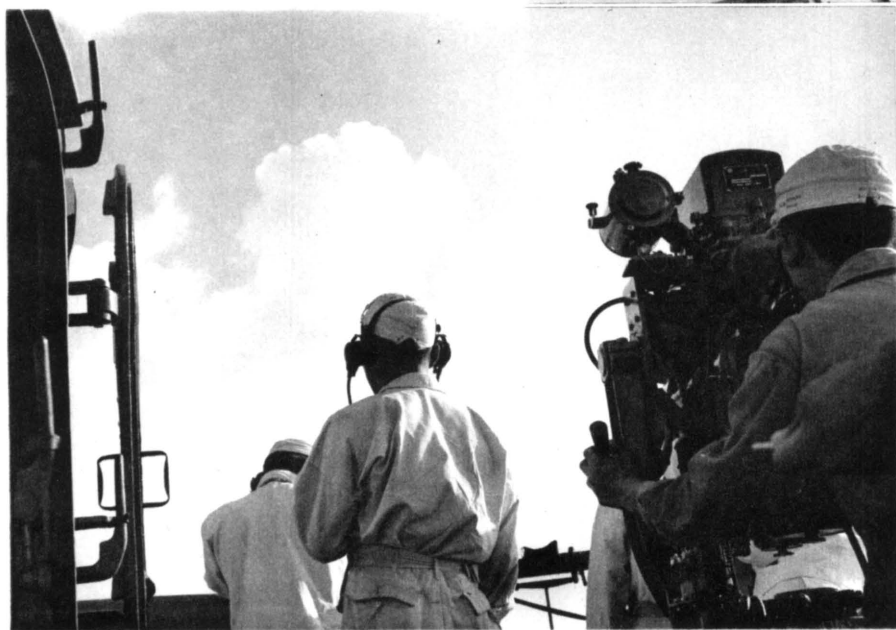
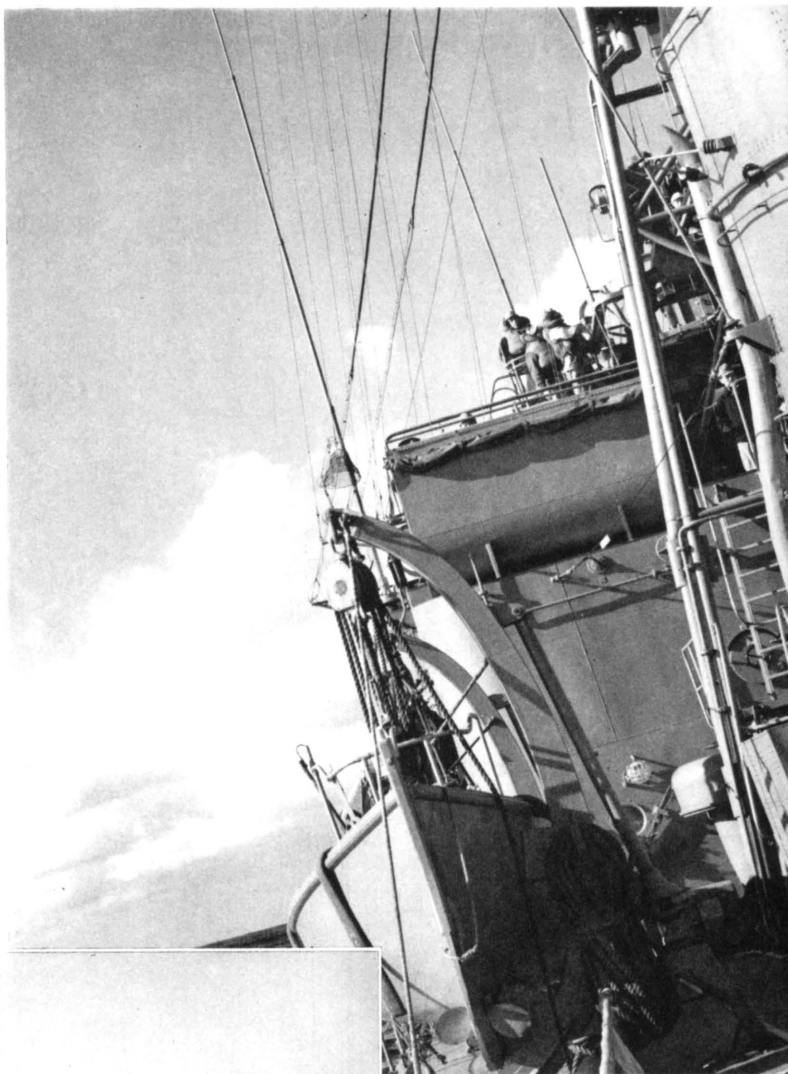


其 の 六

見 張 り

見張りは艦船航海の安全を保つ上に最も必要な要件である。

乗員は出港のときから艦外の見張を厳重に行う。





艦 橋

艦橋は艦の中樞神経であつてすべての命令は此処から発令されるのである。
艦長を始め当直、副直士官、当直海曹、操舵員、見張員、信号員等の艦橋
当直員は此処^(士官)にあつて艦の頭脳の責任を帯びて立直する。

電 信 室

室内一杯の電信器からはモールスやボイスがたえず流れる、艦の耳とも云
うべき電信室勤務は耳と指先の神経を使う仕事。



GETTING UNDERWAY

出 港 そ の 一

近代科学の粋を集めて建造されている艦艇を意の如く自由に動かす事は容易な事ではない。

昔から一人前の船乗りを養成するためには十年の長い年月を要するといわれている、それは陸上と違って如何なる艦艇でも海上に出ると人の力ではどうすることも出来ない天象氣象に遭遇してこれを克服しなければならないからである。

現在海上自衛隊においては幹部自衛官も海曹以下の自衛官も充分なる教育を受けたのち初めて艦艇に乗組んでいるのである。

特に海上自衛隊の艦艇は一般商船と違って単に目的地に航海するだけではなく、集団で行動する事が絶対に必要である。

従ってこれに必要な編隊航行法や各種の陣形運初法とが生まれて来る。このほかに^動各種の戦闘作業があつて各国海軍においても当然必要とされ旧海軍においても実施されて来たことである。

昔の木帆船時代と違って最近の艦艇には次々に新しい航海兵器も搭載されているので一面便利ではあるが、これを活用するためには相当勉強しなければならない。

然しこの新しい航海兵器だけに依存すれば良いという訳には行かない、どうしても経験と云うものが必要になつて来る。

現在海上自衛隊は終戦後七、八年にわたる空白時代を経て創設されたものであるから航海そのものについても、仲々大変であるが術科学校では各種学生の養成に大馬力であり機会のある毎に乗艦実習を行い練度の向上を図つてゐる、このため昭和三十二年七月新たに海上教育部隊として練習艦隊が編成された。

そして昭和三十三年の一月には練習艦隊による第一回の遠洋航海が実施された。

練習艦隊では主として基礎的航海訓練を行い自衛艦隊では応用的航海訓練を実施している。



自衛艦旗をひるがえす艦隊の威容

原速十二ノット陣型を整えつゝ

母港よ去らば!! 在泊中の思出を胸に秘めて港を出れば緑の山も白い家も赤い屋根も一色になつて水平線にとけ込んで行く。



其 の 二

旗 旒 信 号

艦の運動や作業命令及び自艦の意志
行動等の通信法に目視内では旗旒信
号を使用することが多い。

旗旒は揚旗線のメイン、マストに高
く揚げられる。

滴艦飾の色とりどりの旗はこの信号
旗が利用されている。



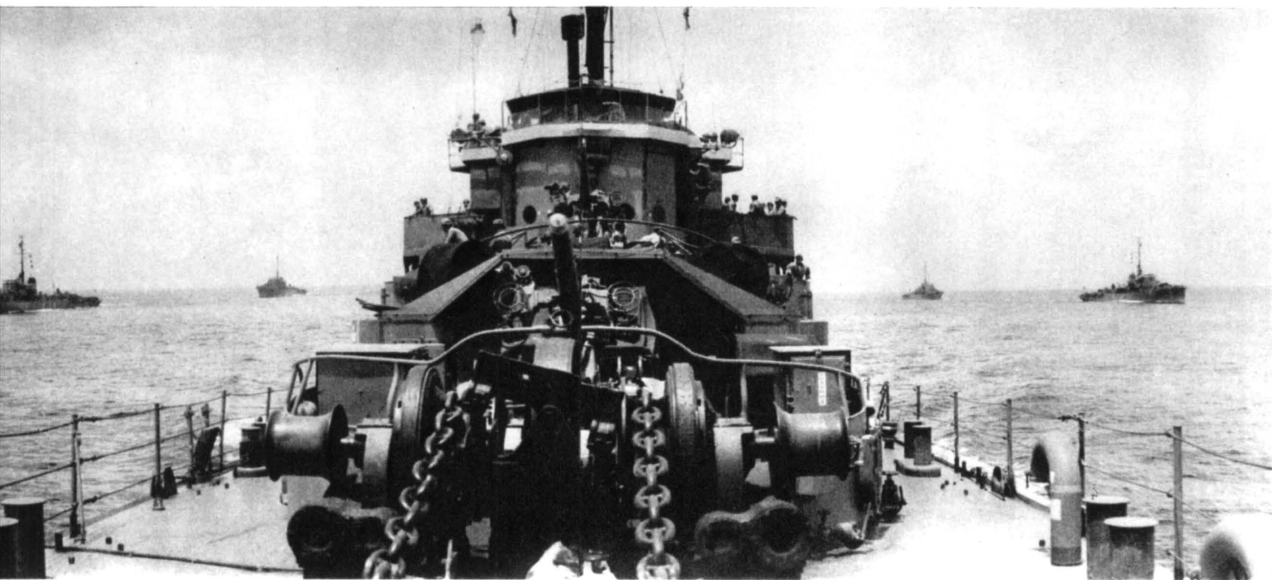
NAVIGATION

航 海 其 の 一

「戦斗速力」

艦は増速し一戦速で航行している、艦尾を振り向けば麗峯富士が雲の波に浮いている。





其 の 二

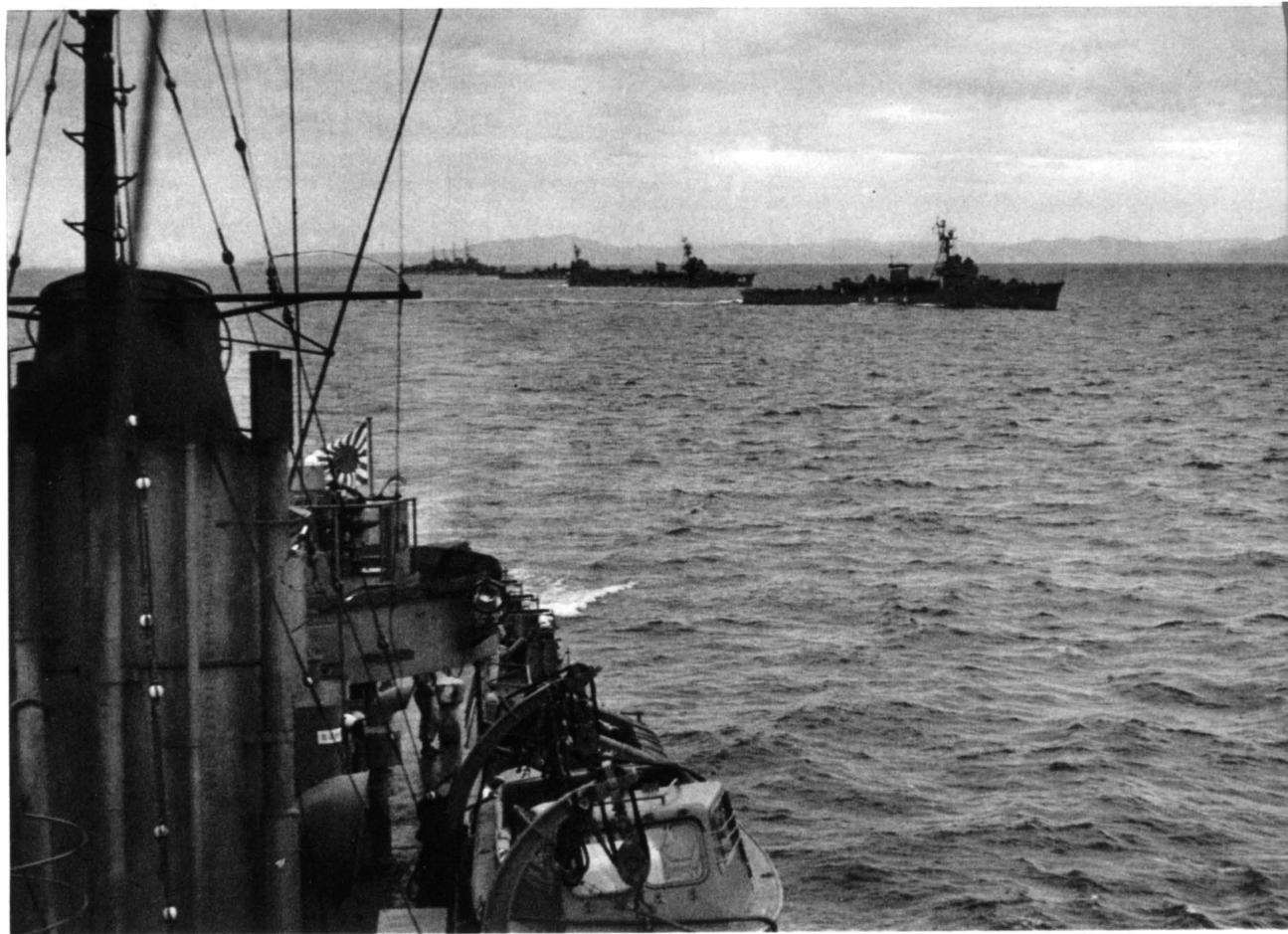
「航行隊形」

一連の旗旋信号がするするとマストに高く揚げられると後続艦は隊列を組み航行する。

「天 測」

陸地の見えない洋上においては艦船は太陽、月、星などを測り精密な計算を行ってその位置を求める。

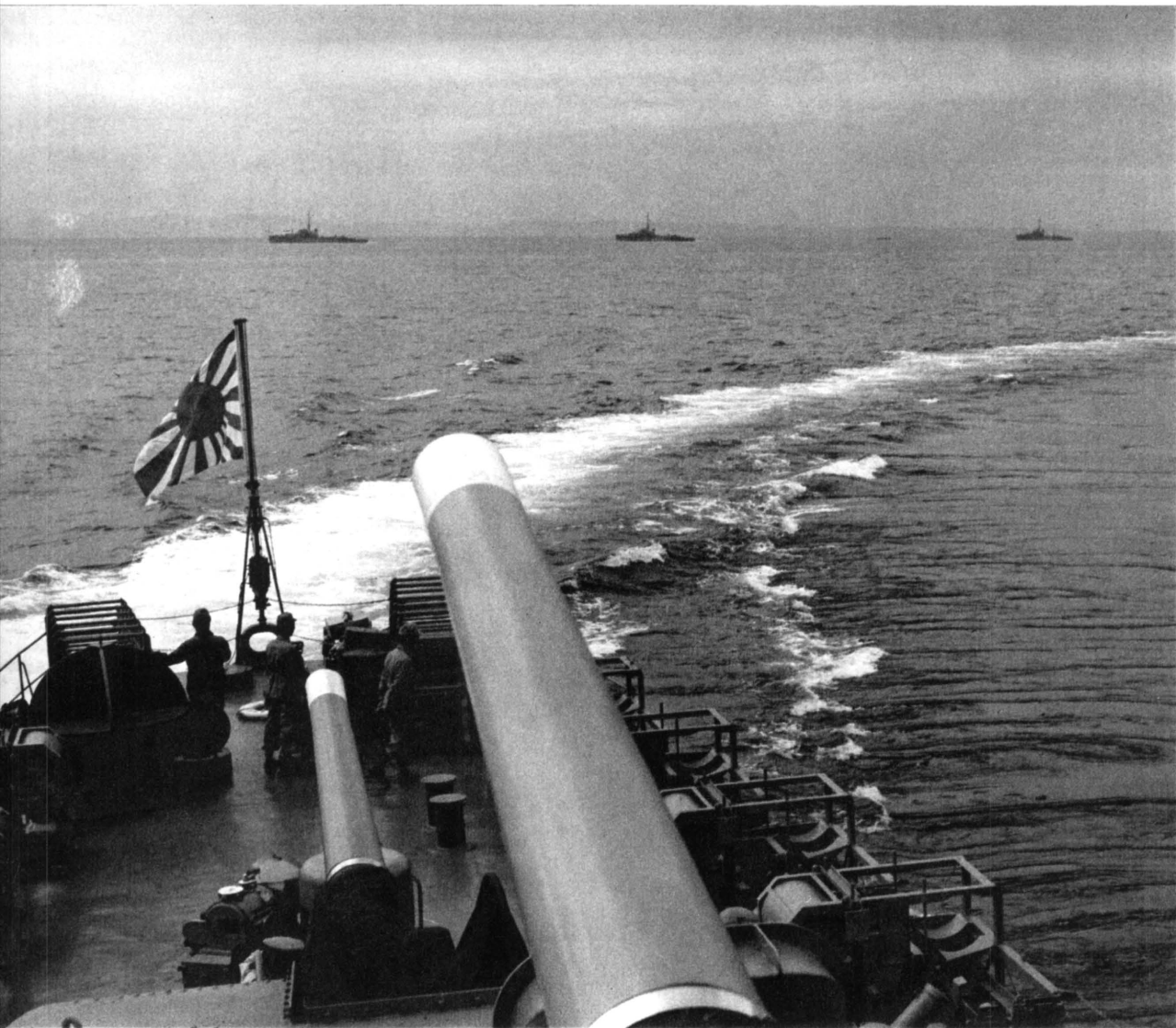




其 の 三

一 斉 回 頭

従陣を組んで航行中の護衛艦は司令の命令により戦術運動のひとつである一斉回頭を行っている。

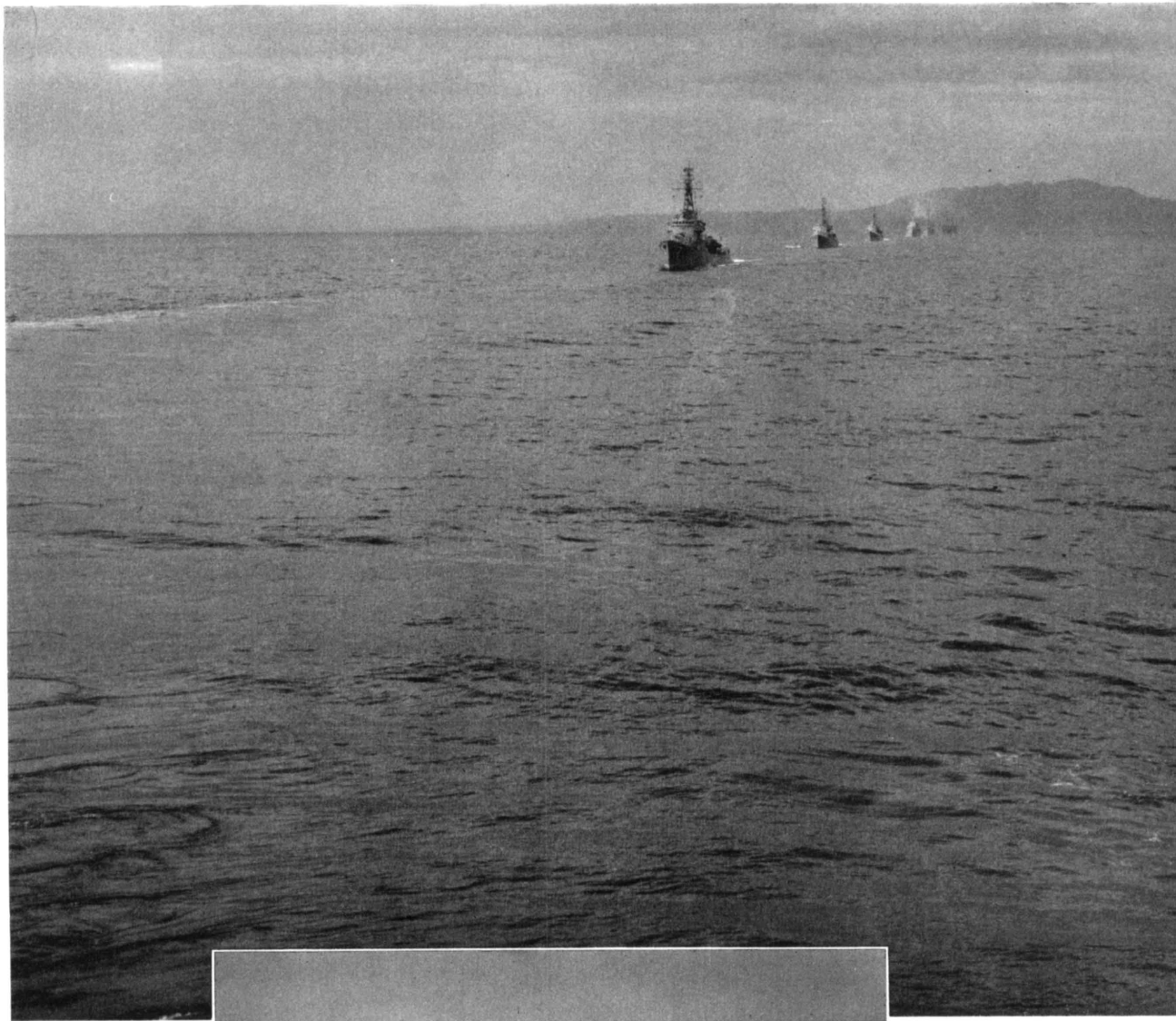


其 の 四

方 向 変 換

隊列を組み旗艦を先頭に白波を切って航行を続けていたのが先頭艦から順序に針路を左に変換する。

艦尾が描く航跡は美しい。





其 の 五

従陣列で仮泊地に向け航行中





PREPARE FOR ENTRY

碇泊地投錨

「錨入れ!!」旗で錨鎖の
節数を標示している。



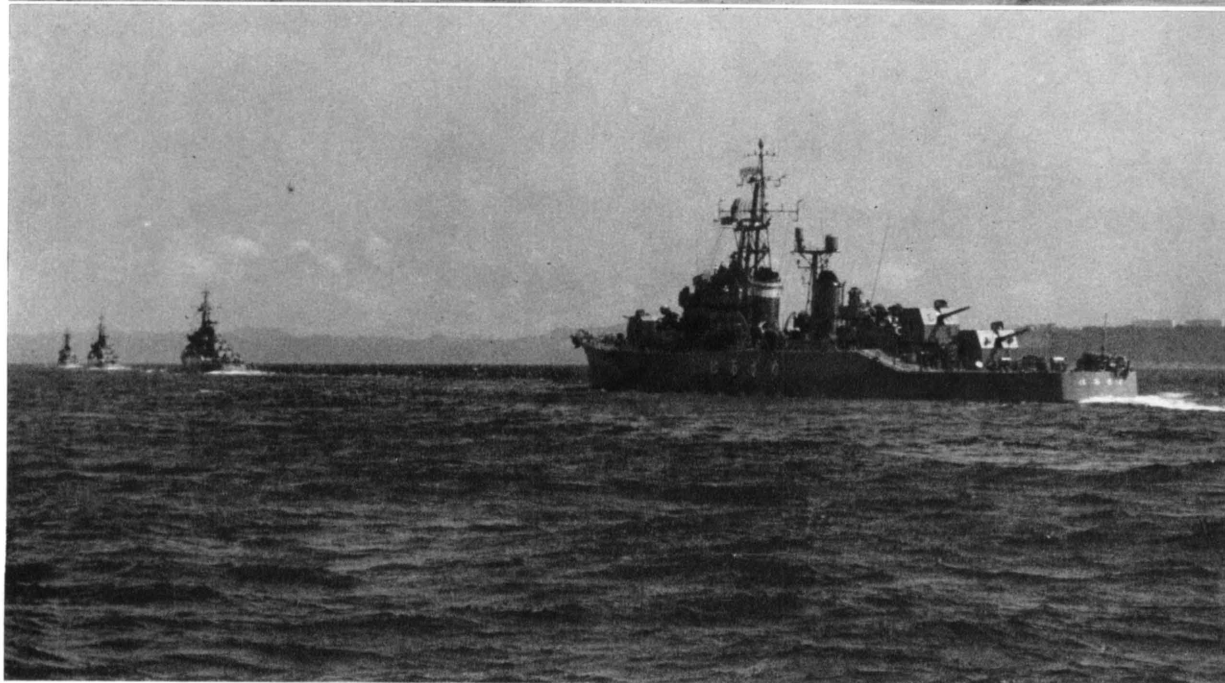
仮 泊 風 景

作業地に入港間もなく西の彼方に日は落ちた。沈む太陽にせかれて影絵のようにあわただしく富士が現われる。

寝ぐらを急ぐ鷗も二羽三羽、つるべ落しの秋の夕暮を満喫する間もなくあたりは墨一色に塗りつぶされ全く夜の帷りはおろされた。

今宵一夜は仮の宿





拔 錨 出 港

仮泊の一夜は乳色の霧がゆっくり流れて行く、静かな朝に迎えられ訓練海面へと向け
拔錨出港する。

GETTING UNDERWAY

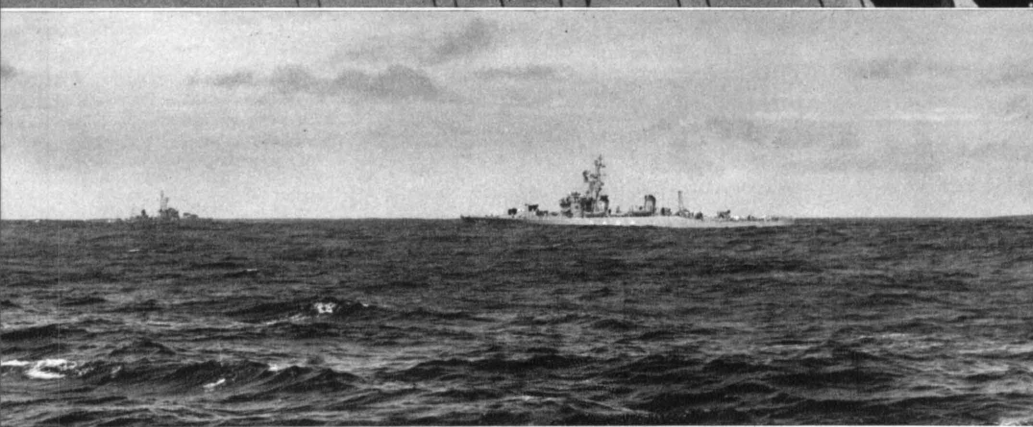
対潜戦闘訓練 其の一

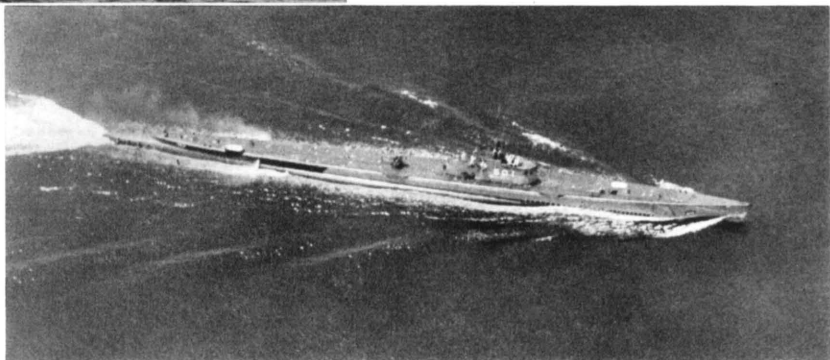
「教練対潜戦闘配置につけ」

戦闘旗がメイン、マストに翻り護衛

艦は訓練の準備体形につく。

ANTI-SUB ATTACK





其 の 二

訓練海面に急航の潜水艦

(上) くろしお (下) おやしお の雄姿

(潜水艦の基地は呉である)





其 の 三

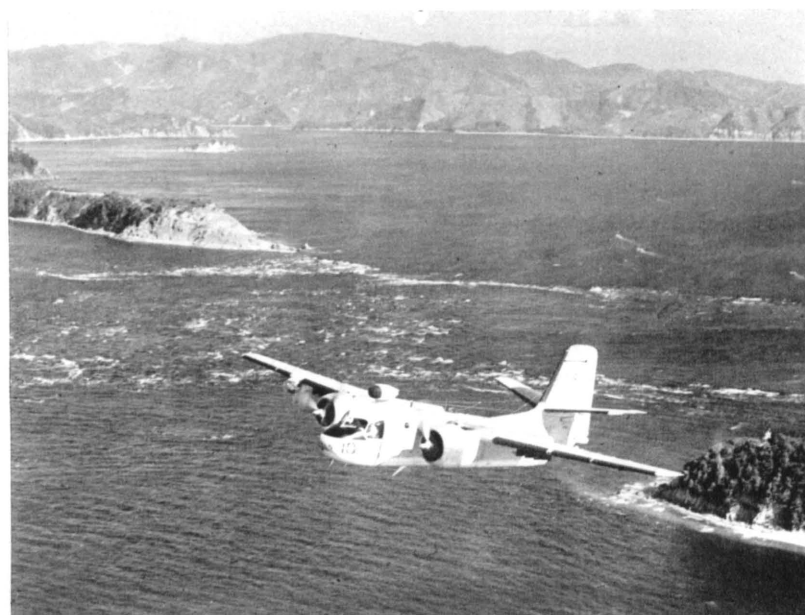
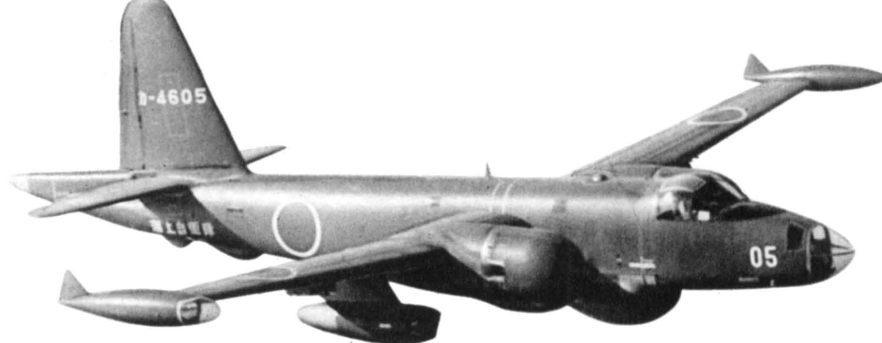
空水協同訓練に出動する
対潜航空機

(対潜航空機の基地は鹿
屋、徳島、八戸にある)

(上) P2V-7のジェ
ット、エンジン整備

(中) S2F機の出発直
前のエンジン、チェ
ック

(下) 雪をけたて、P2
V-7の滑走

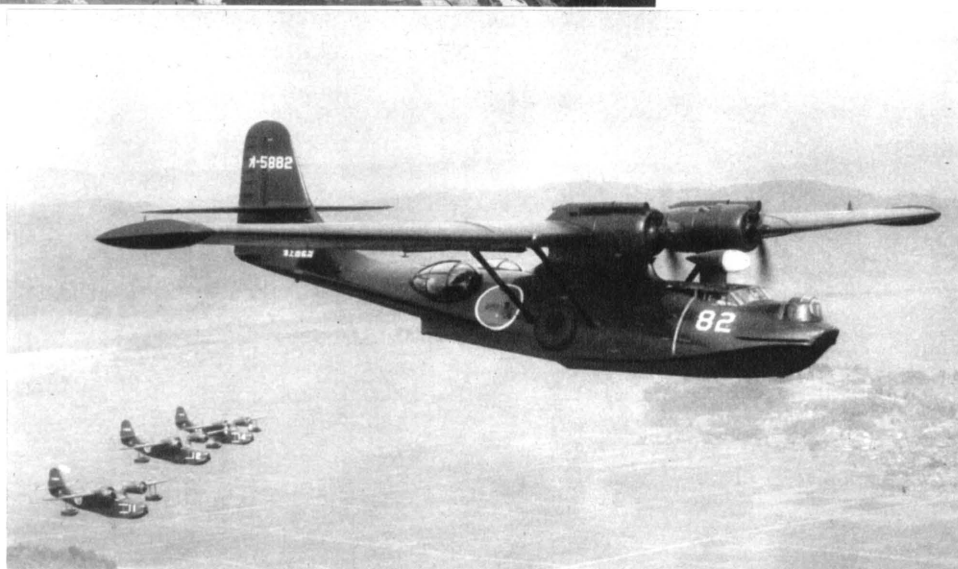


其 の 四

(上) P 2 V - 7 の雄姿

(中) P 2 V - 7 の編隊
(桜島) 上空

(下) 鳴海海峡附近を哨戒中
の S 2 F

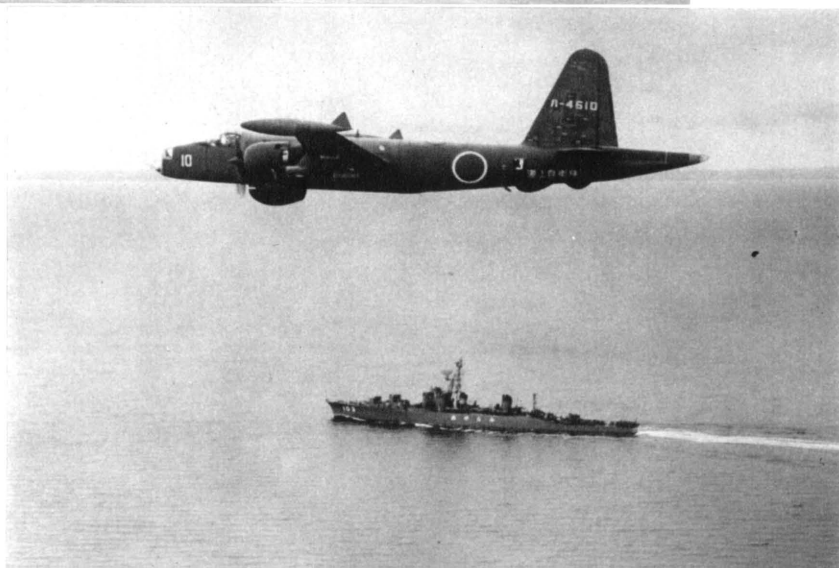


其 の 五

(上) 青森県三沢、八戸市附近を飛行中の
P2V-7

(中) PBY-6Aと後続する三機編
隊のJRF(何れも飛行艇)

(下) 水上艦艇と協同作戦中の
P2V-7



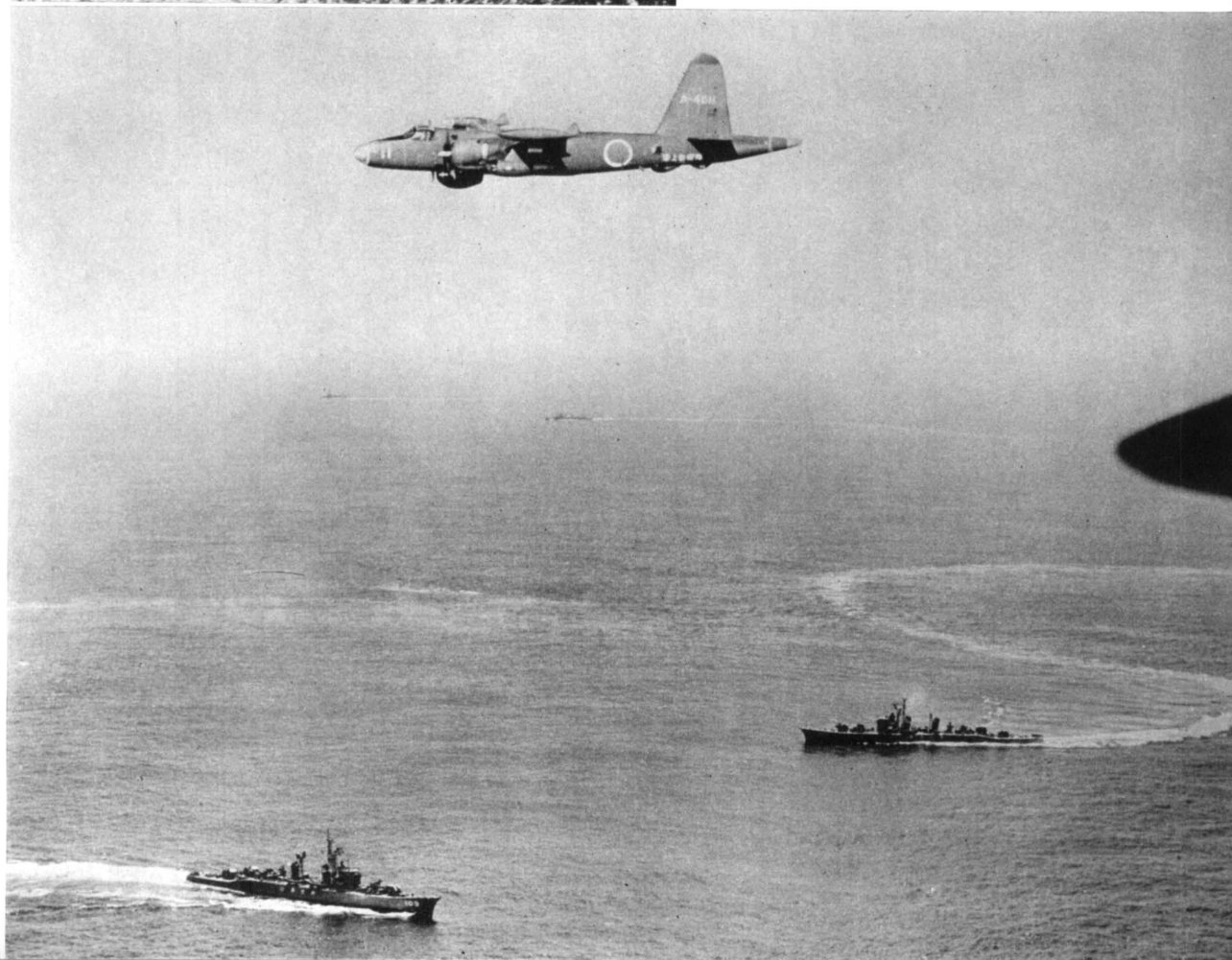


其 の 六

(上) (中) 哨戒中の S 2 F (トラッカー) 機

(下) 水上対潜艦艇との協同訓練中の

P 2 V - 7





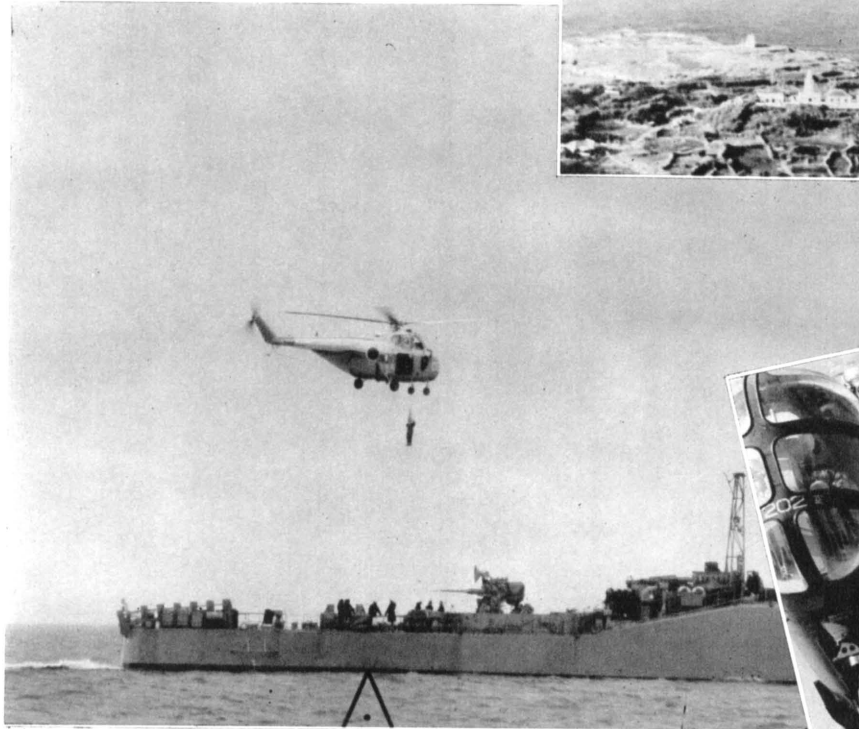
其 の 七

ヘリコプターの基地は房総
半島南端の館山と青森の大
湊を基地とする。

(上) HSS-1 の編隊

(下) BELL-47G のホバリング





其 の 八

上から

房総、洲の崎灯台上空のHSS-1

護衛艦から人を吊り上げるS-55

人名救助作業中のS-51

津軽海峡を機雷哨戒するS51

其の九

「深く静かに潜行せよ」の命にぐっと前のめりにダイブする。不気味なスクリュー音が外板を通じて耳に入ってくる「直撃されたら最后」死の恐怖の前の沈黙の一瞬とはこれをいうのであろう。「爆雷投下」の報告!!一瞬鋭利な刃物で

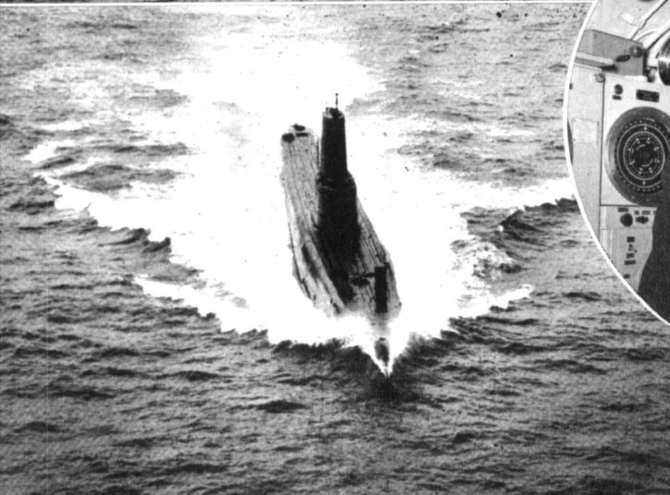
斬り落したような沈黙がさっと司令塔をおそう…二秒四秒ズマーン、ズマーンと震動がひびいて来る。更に深度を、300呎にする。

音源がしばらくと絶え二三分して次の攻撃艦は近づいて来る。

ズ、ズ、ン、ガ……ガと船殻がひしやげるような激しい衝動を受け照明燈が消える。

「各部異常ないか」艦長の声、真暗闇の中で、「発射管室異常なし」「前部居住区異常なし」船殻の各部からサンドパワーで報告が来る。

「管制艦故障間もなく復旧の見込」機関長の声がしたかと思う間もなく照明灯がともった、艦長は腕時計を見るや突然「浮上」と呼ぶ、音源はだんだん遠ざかるホイップアンテナを立て報告する。





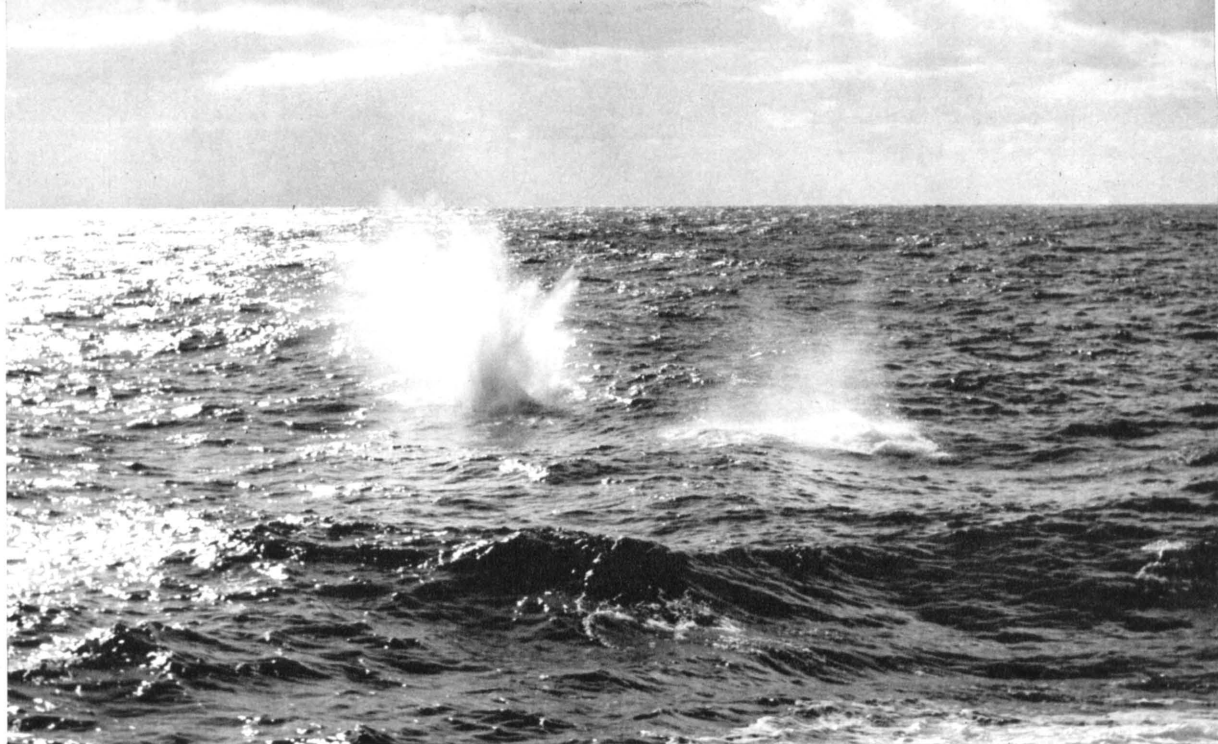
其 の 十

爆 雷 戦 (爆雷砲台)

左 30 度、2,000 ヤードに潜水艦を探知した
直ちに突撃爆雷戦を実施すると云う想定のもとに Y 砲による
投射準備が行われる「第二投射砲用意よし!!」



潜水艦の運動はスタック（投信機）
によつてコンタクト（探知）され方
位、距離が艦橋に報告される。



其 の 十 一

爆雷戦（発射と着水の瞬間）

「第一弾用意!! テッ!!」電鍵が压下される「バガアン!!」
 という発射音と共に爆雷は投射される
 数基の爆雷投射機は順次に爆雷発射が実施される。





其の十二

爆雷戦（爆雷投下軌条）

潜水艦に向首した護衛艦は攻撃速力で航走する、艦尾の爆雷投下軌条では投下準備が完了している。次の号令によつて油圧ハンドルが操作され爆雷が次々と転がり落ちていくのだ

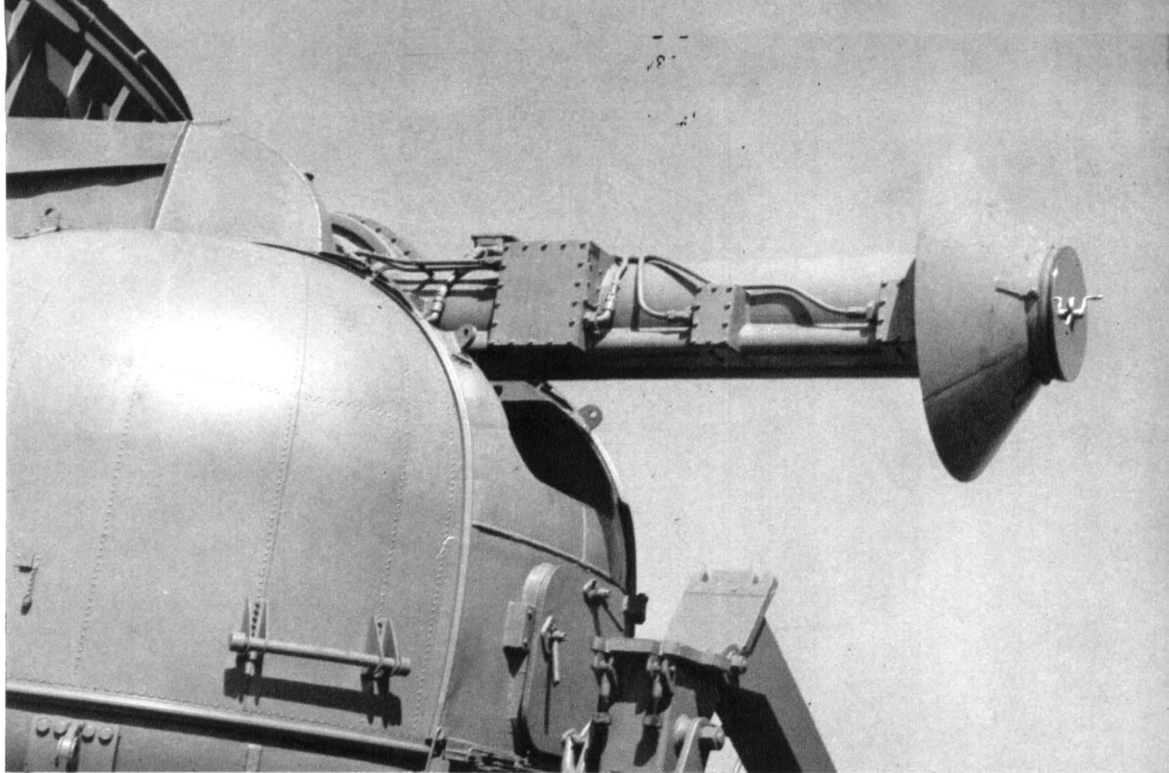


其 の 十 三

爆 雷 戦（爆発の瞬間）

爆雷投下後数秒海面に稲妻のようなものが走り、
艦底から爆発音が「ズーン」とつき上げてくる
攻撃を終った艦は僚艦に攻撃をさせるために舵を
とって離隔してゆく。





其 の 十 四

対潜用ロケットランチャーとその発射の瞬間
や、遠距離の潜水艦を攻撃する最新の前投兵器で
あって高度の性能を持っている。





其の十五

ヘッジホッグ砲台

呼び名のとおり針魚のように対潜弾を装填して数秒間のうちに全弾を発射できる装置であり「対潜戦闘ヘッジホッグ戦」の号令で砲台員は瞬時に装填を終り発射命令を待つ。

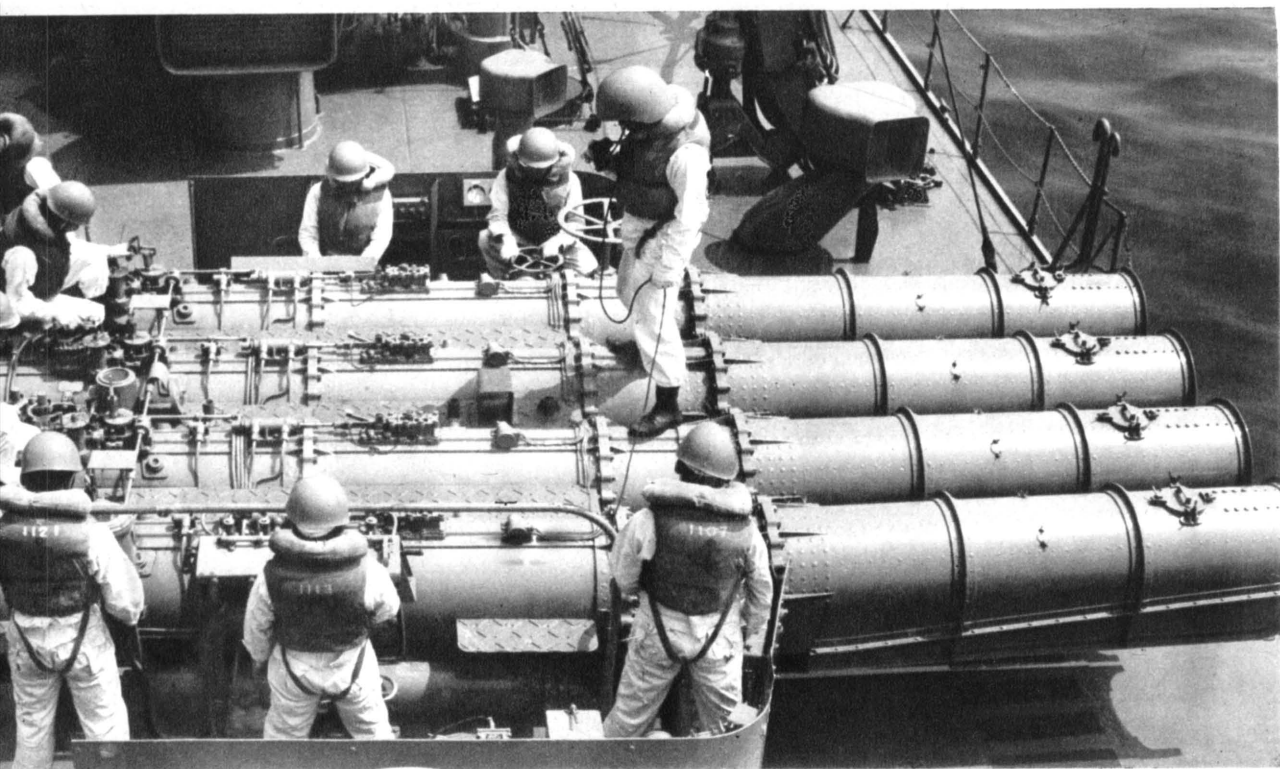


其の十六

飛翔中のベツチホッグと着水の瞬間

- (上)「投射時期近づく……用意……テツ!!」電鍵がひかれる「パン、パン、
「パン……」と弾は次々に飛び出し空高くパターンを形成しながら落下
してゆく。
- (下) 水中に落下したヘッジホッグ弾は一発でも命中すれば全弾誘爆して潜
水艦を葬る。



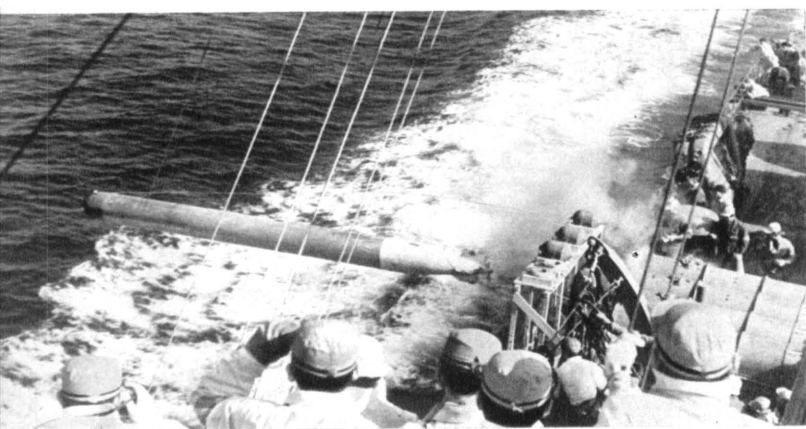


其の十七

魚雷戦

(上) 発射準備完了した魚雷発射管

(下) 「ドオッ!!」と長魚雷は発射された、すでに
スクリューは回転している。



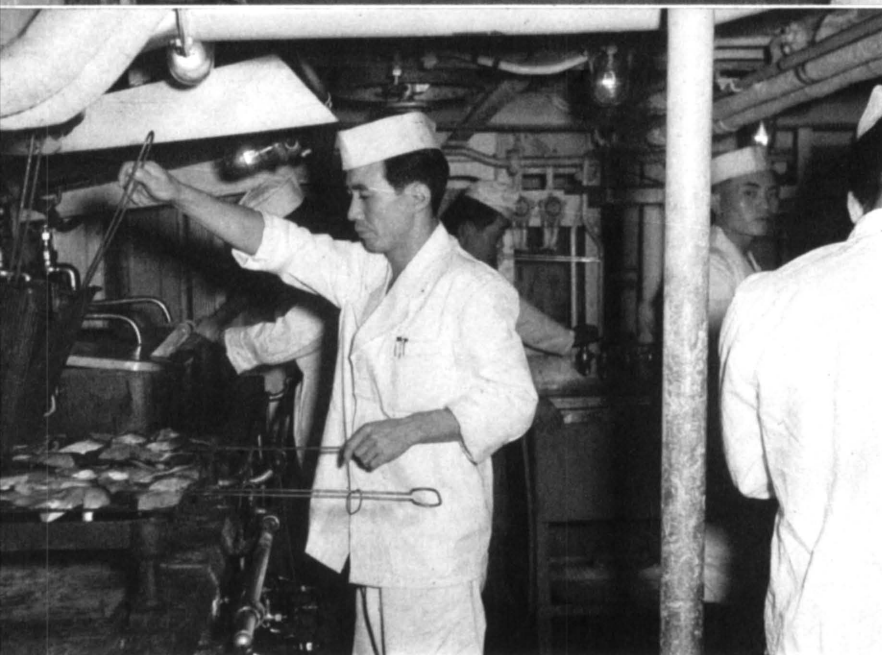
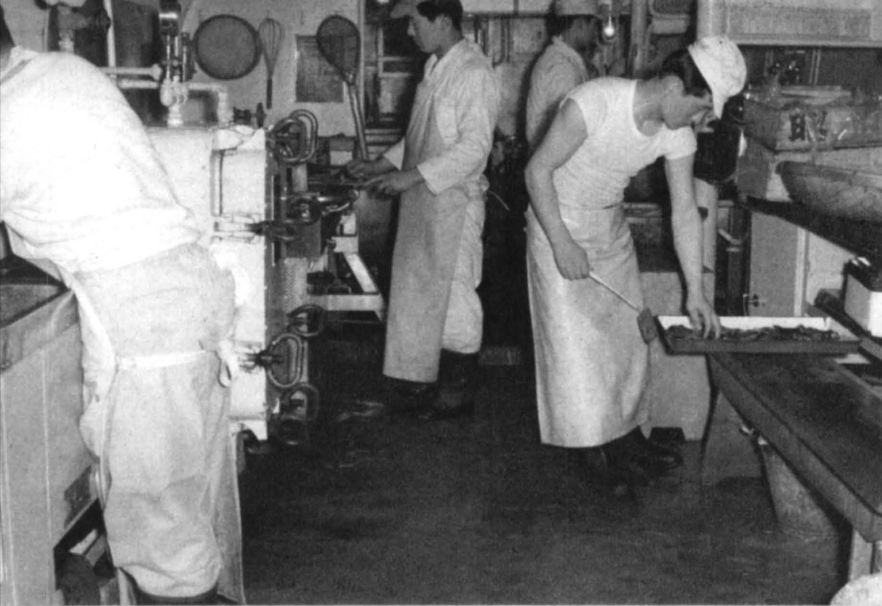


其の十八

(上) 魚雷投射機から落射された瞬間の短魚雷

(下) 水中に入った魚雷は潜水艦を追ってホーミングを始める。





調理室

(上・中)

大根の輪切からピフテキ……
と腕によりをかける板前修業。
豊富な栄養と味の良い献立に
調理員は一苦労。

(下)

「アーラ!! お行儀が悪い」

戦闘配置中は部署についたまゝ食事をするように「戦闘配食」が行われる。



ANTI-AIR FIRE



対空戦闘訓練 其の一

3吋50口径連装速射砲（ラビットファイヤー）

（上）「戦闘用意!!」砲員はヘルメットをかぶり救命胴衣を装着するなど服装を整える。

（下）水上の目標を追い艦の動揺に合わせて砲は方位盤と共に上下、左右、に動く……発射寸前の緊張した一瞬。





其 の 二

(上)「右砲戦!!」射撃海面を航走する護衛隊

(下) 戦闘準備終って艦内は台風の目に入った様な異様な静寂と緊迫感が溢れている。機関は馬力を上げ艦首の切る波の音が耳につく……砲雷長、射管員は射撃諸元を算出するために近代的な機器を駆使する。

〔艦橋上部の3吋及び5吋砲方位盤〕





其 の 三

発射寸前の砲台と方位盤

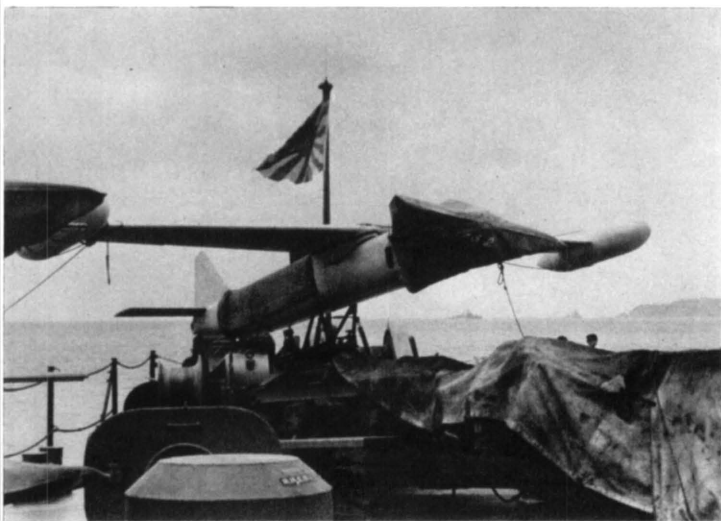
手前から5吋砲方位盤40耗機銃方位盤40耗56口径4連装機銃、
5吋38口径砲……これらが号令一下火をふき目標に命中する
のだ。

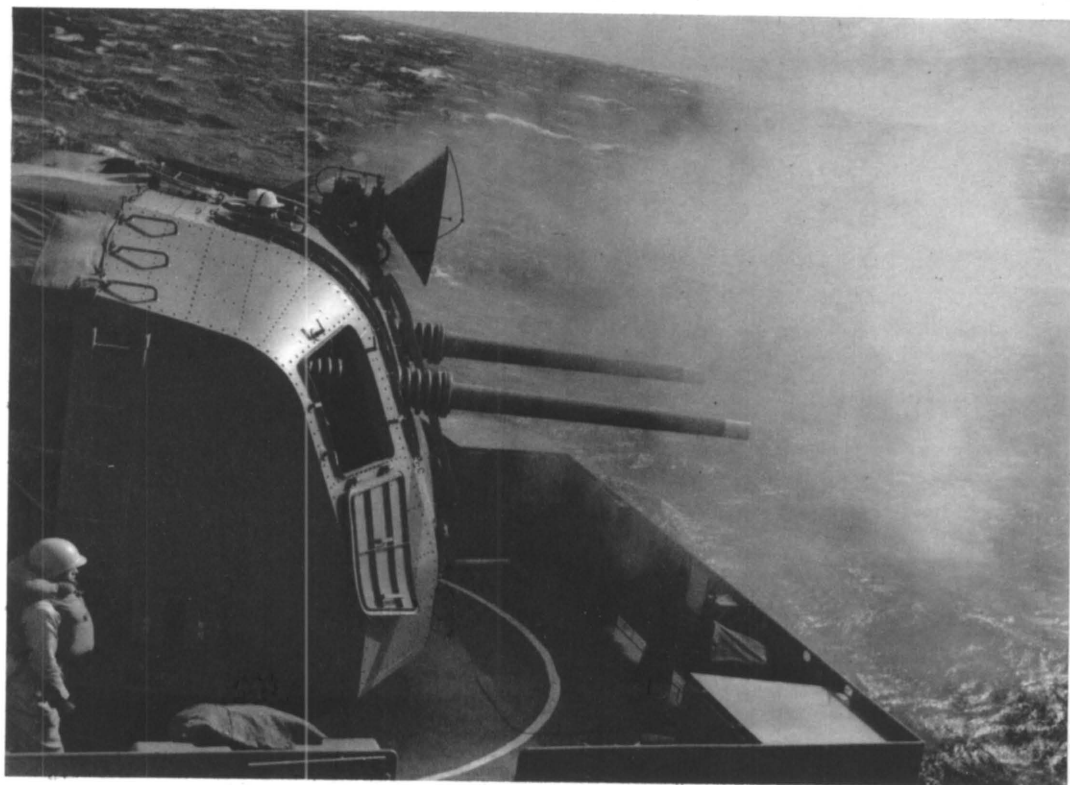


其 の 四

ターゲットブレイン（対空標的機）

（上）ドロン射出状況 （下）カタパルト上のドロン通称ドロンと呼ばれ、訓練海面で母艇からカタパルトで発射されUHF-FM方式の電波によりリモート、コントロールされながら飛行し射撃艦の目標となる。





其 の 五

3吋連装速射砲の発射

(上) 射撃開始!! 火をふく二番砲

(下) 速射砲は発射速度が速いので給弾も大変だ。

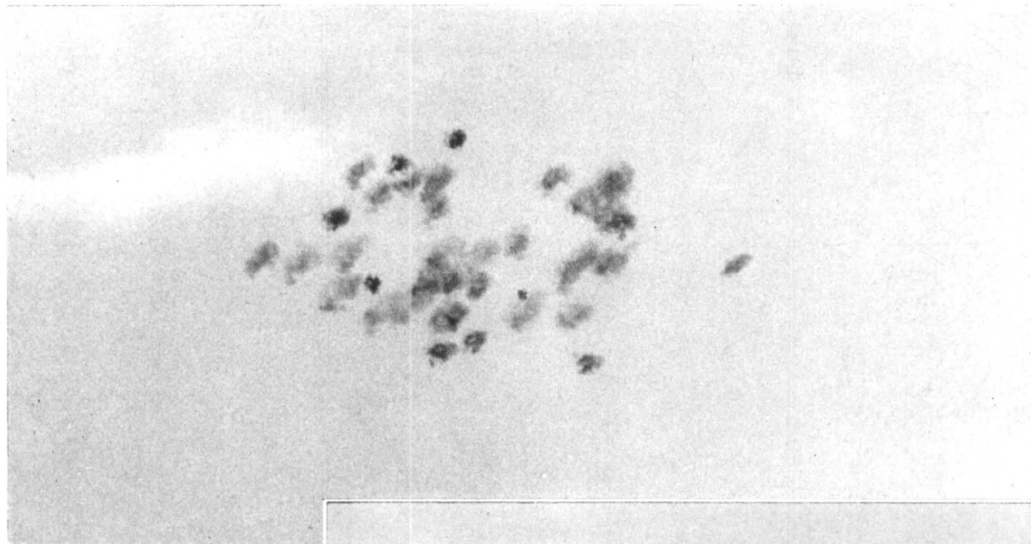




其 の 六

斗魂をみなぎらせて射撃する40耗4連装機銃…………

発射音の間にはじき出された打穀薬莢が金属音をた
ヤツキョウ
てる



其 の 七

(上) 大空に黒い花となつて炸裂する40耗連装機銃弾

(下) 射撃をする40耗連装機銃

対水上射撃 其の一

両面に続くは

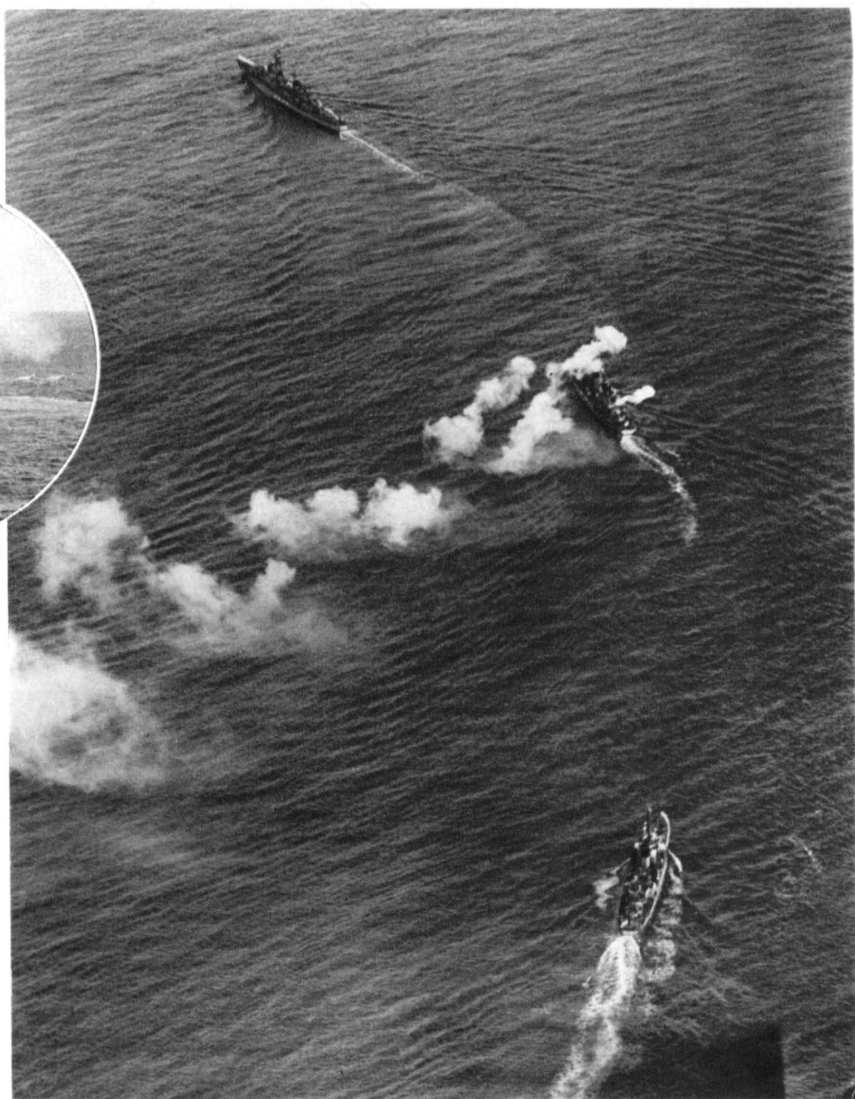
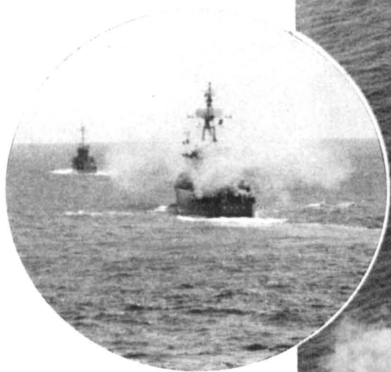
5 吋38 口径砲発射の瞬間

(下) 3 吋50 口径砲(スローファイヤー)

発射の瞬間







其 の 二

水上艦艇同志の砲戦を水上射撃という

男ならではの味えない勇壮な射撃もいまたけなわ、広い海面に砲声が響きわたる……。

一斉射撃中の護衛艦

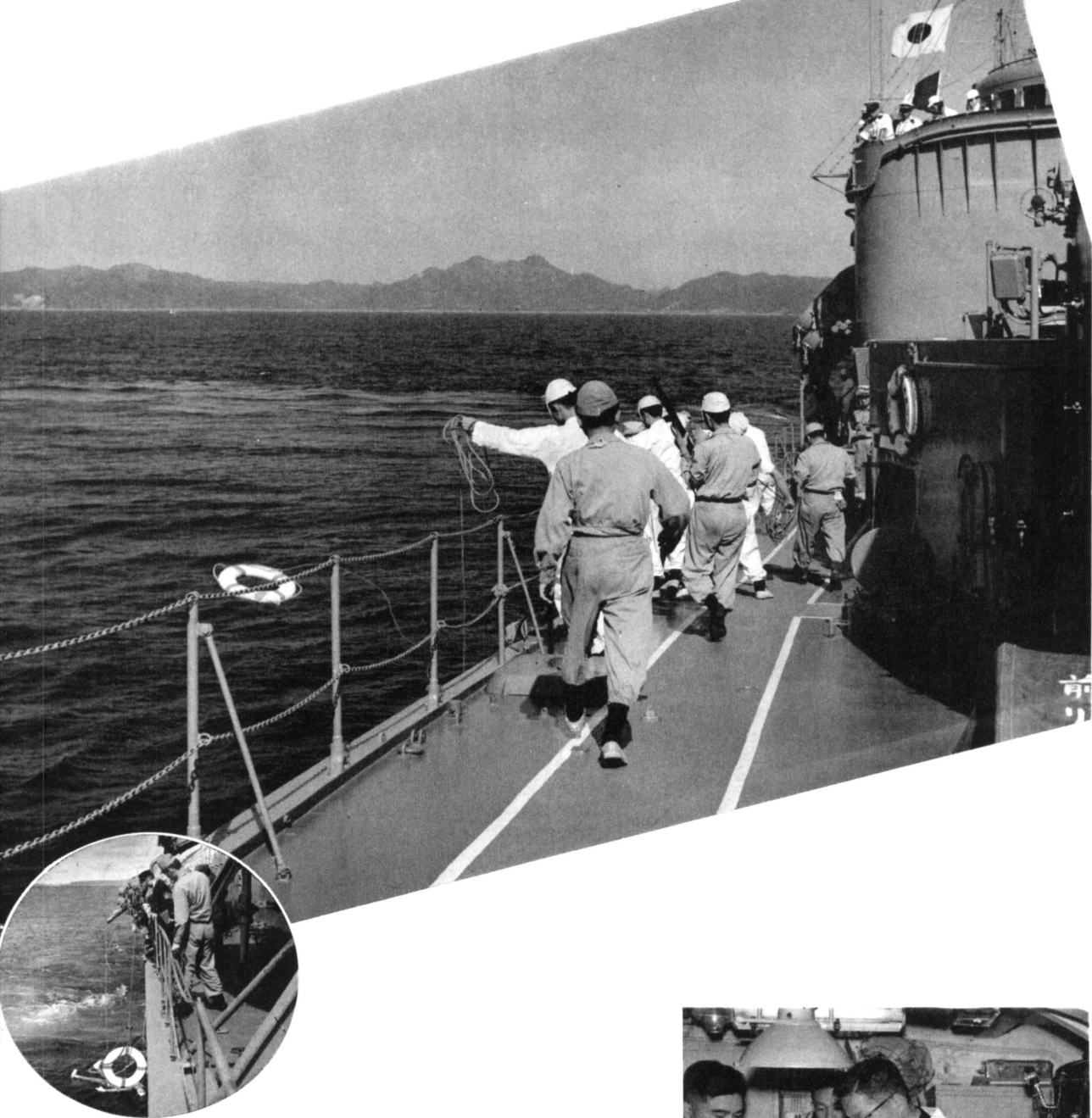


応急訓練（防火中の班員）

「火災!! 場所は缶室!!」

戦闘に被害はつきものだ、これを最少限
に喰い止め艦の戦闘能力を維持する重責
を負う応急班員の活躍





溺者救助訓練

「人が落ちた、右!!」時を移さず救命浮環が投げられ艦は面舵で急激に回頭し溺者救助部署が発動される……人命は何よりも大切だ。





傷 者 処 置

傷を受けた者に対しての応急処置の訓練で重傷患者は「タンカ」や同僚に背負われて戦闘治療室に運ばれ手当を受ける。





ハクライン展張訓練

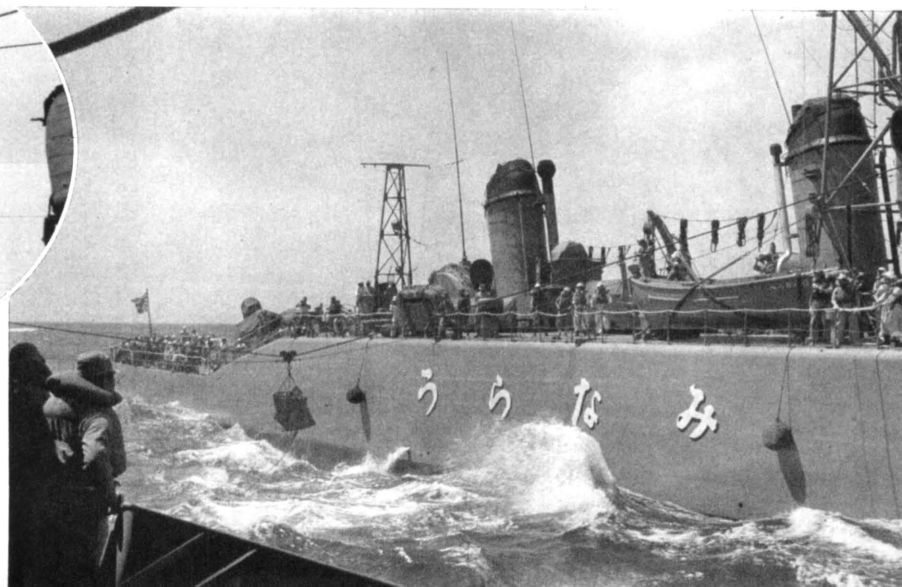
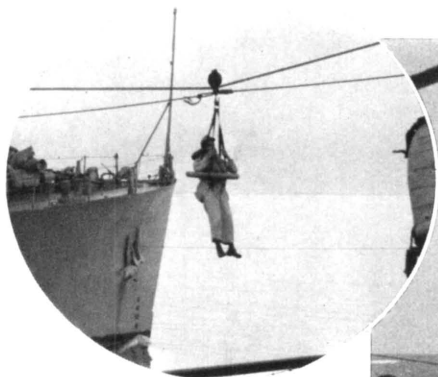
展張のために近接中の護衛艦

HIGH LINE



ハイライン展張訓練

洋上で艦から艦への文書の送達や人員又は急患を医療設備のある艦へ移送する等、必要に応じて行われるもので両艦が一定の速力で走りながら僚艦への舷側を打つ波頭を眼下に人は送られる網を渡しポースンチエア（人を乗せる台座）や袋を送受する方法である。







演習の幕を閉じる

両 頁

大阪・横須賀間の船団護衛、瀬戸内海を中心とする沿岸、水道の防備、伊豆七島方面を舞台とした水上戦闘などが六日間にわたって実施された。

参加部隊は自衛艦隊、第一掃海隊群群呉地方隊等艦艇約六十隻四万五千屯、八戸、徳島、鹿屋、館山の航空機約三十五機、人員八千二百名という大規模なもので最終日の十七日には三宅島附近の海上で青・赤両部隊の対抗演習が展開された。

統載艦（てるづき）より撮影



「荒天準備第一配備となせ」の号令が突然不気味にスピー
カーから各室にひびく、乗員は迅速に荒天航行の準備
にかゝる。

荒天航行 その一

荒天航行
第一配備となせ!!

HEAVY SEA NAVIGATION





其 の 二

太平洋の怒濤をけてって猛進する我が護衛艦

海上自衛隊行進歌

男と生れて、海をゆく 若い生命の血は燃える

備えゆるがめ旗じるし

おゝ選ばれた海上自衛隊

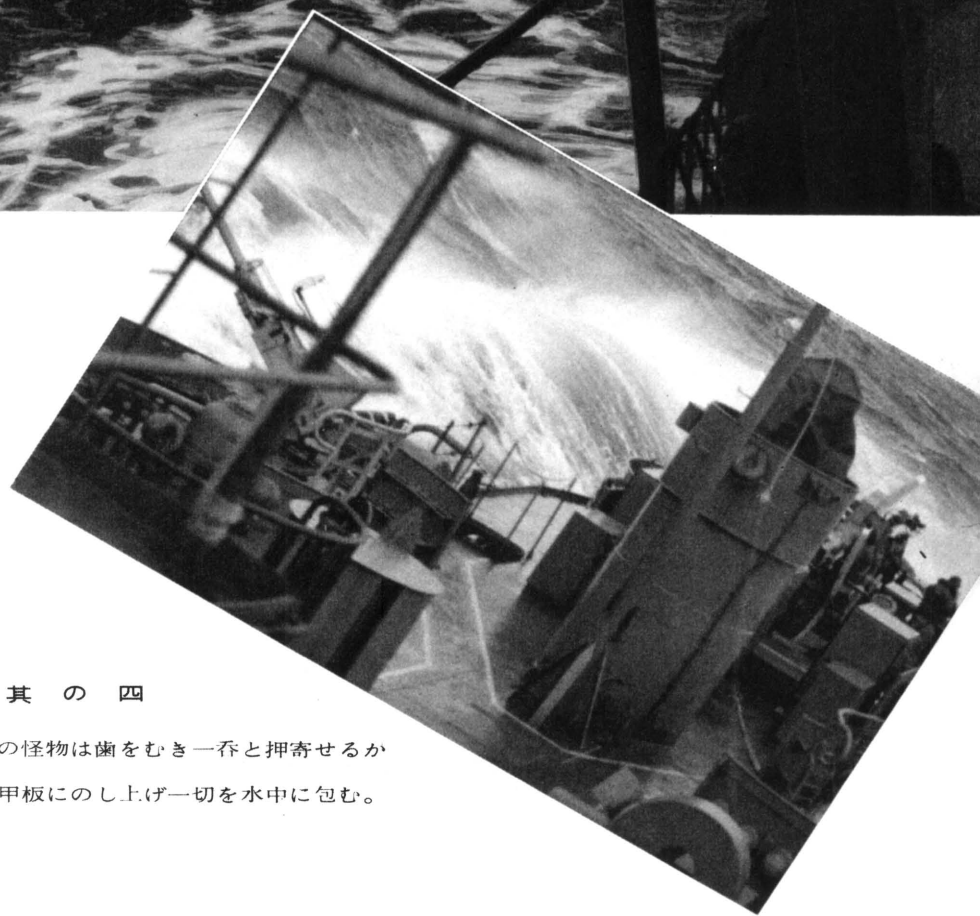
海を守るわれら



其 の 三

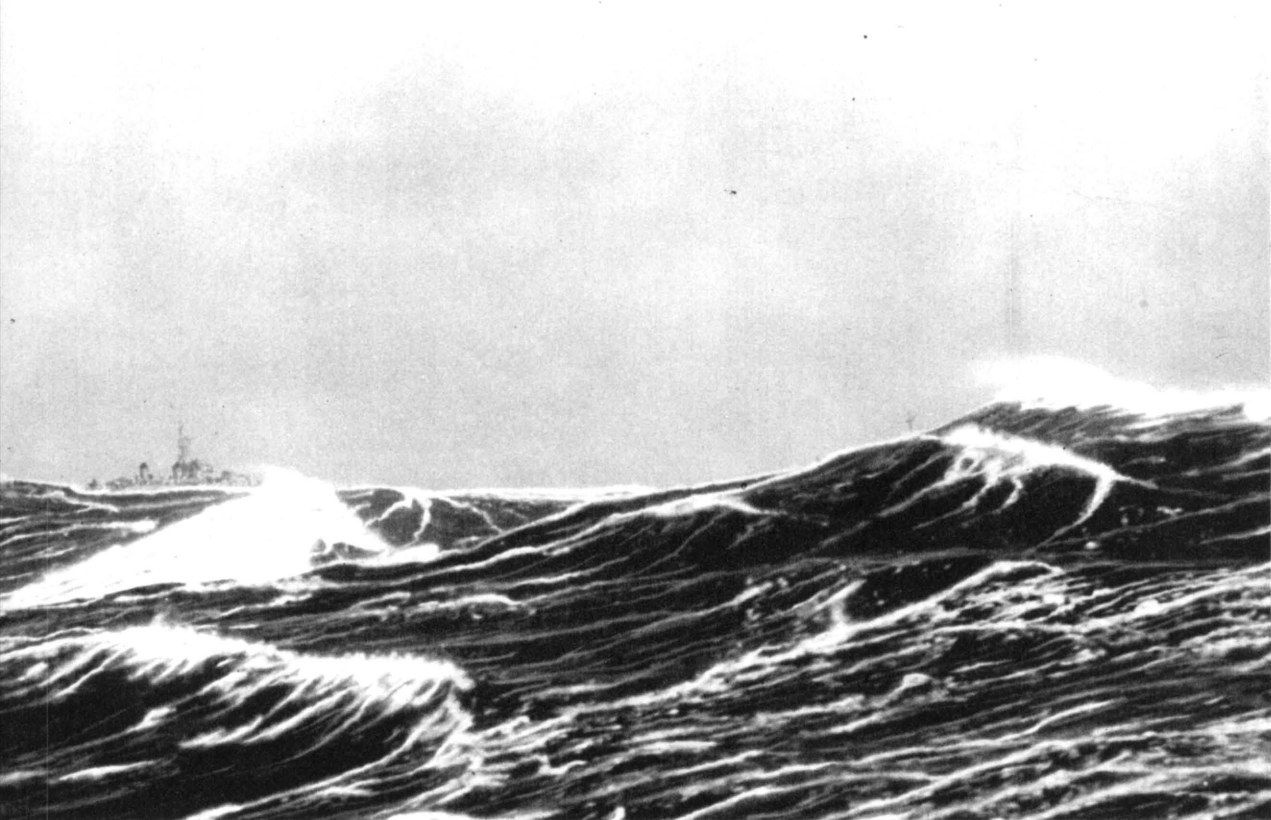
艦首の飛沫は艦橋を洗い、艦橋当直員は頭からしぶきをかぶりつゝ配置についている。

「常に鍛えた腕の見せどころ」



其 の 四

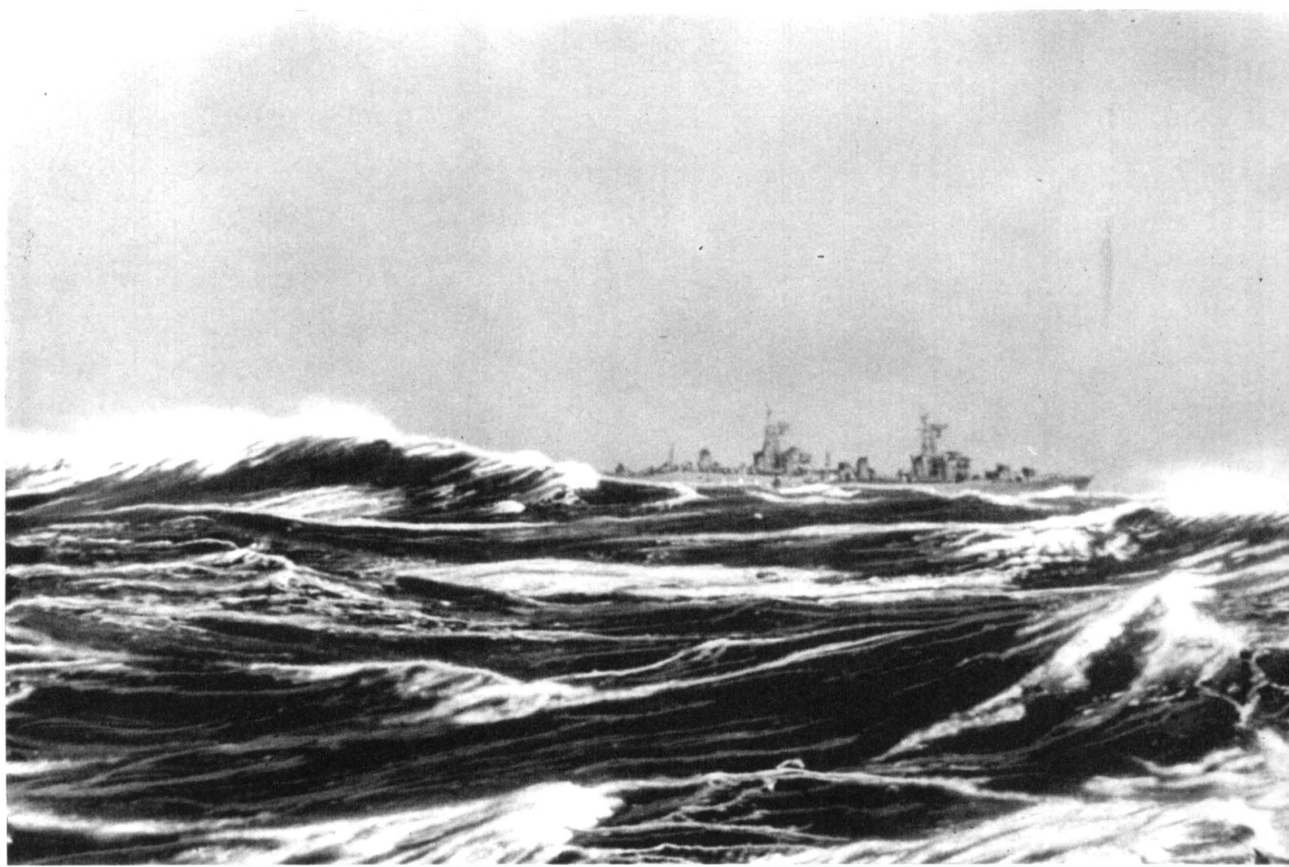
舷側を目がけて怒涛の怪物は齒をむき一呑と押寄せるかと思えば、たちまち甲板にのし上げ一切を水中に包む。



その五

静かなる海面も大自然の怒にふれ一瞬にして雲を呼び風を起し
波を誘い俄かに荒天激浪と化す。

常に天象、気象を学び航海運用術を練摩する海の強者は自信満
々敢斗精神に燃える……艦長や当直士官は重大なる責任を帯び
艦橋にあつて緊張の中に任務を全うする。



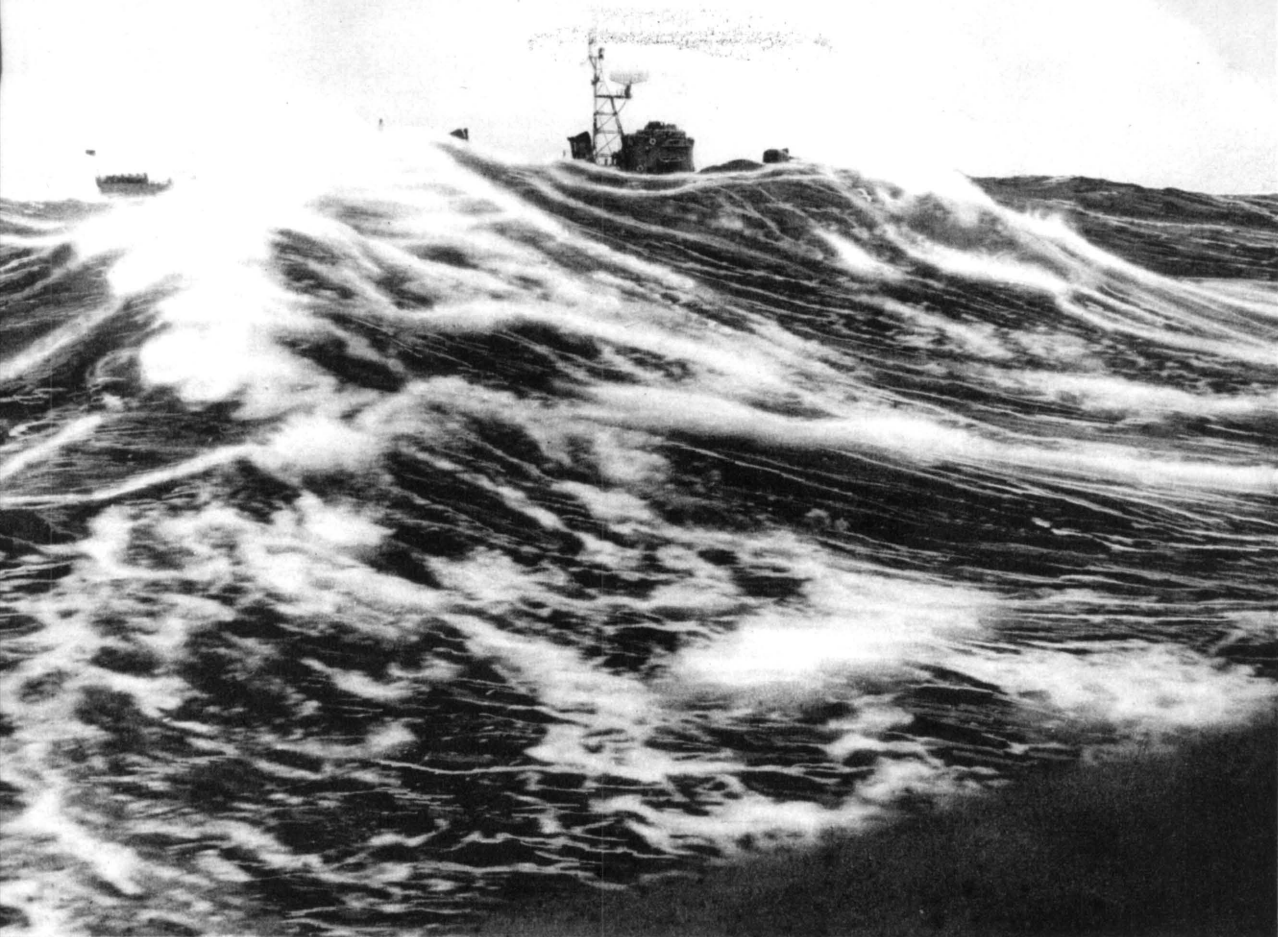
海上自衛隊行進歌 海を行く(2)

怒涛よ騒げ 雲も鳴れ 力くろがねたじろかず

常に鍛えしたくましく越える苦難の雨嵐

おゝ灼熱の海上自衛隊

海を守るわれら



其 の 六

「直候を変える五度右舵のところ」「九〇度」

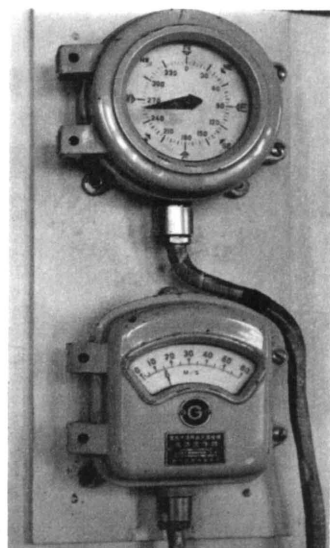
ヨ-ソロー ゴ ド オ セ カ ナ

「直候九〇度」「直候」艦橋からかすかにもれる

ヨ-ソロー

応答の聲に緊張がみなぎっている、荒天航行の妙を発揮して波濤に

立ちむかう護衛艦の雄々しさ。





其 の 七

「横傾斜三〇度」ローリング「ENE二十五米」東北東「波四」「うねり五」寄せては返す

激浪の谷間に艦型は全く姿を没し、浪に翻弄され動揺は激しい。

横傾斜三〇度と云えば、たゞ立つことさえ困難なのにこの中にあつて命綱を頼りに作業を続行する。



其 の 八

荒れ狂う怒涛は静まることを知らないものゝ

ようだ

大うねりは艦全体をおゝいつくすで見れば波

涛だけが一瞬を支配し一転すればマストのみ
が現われる。





其の九

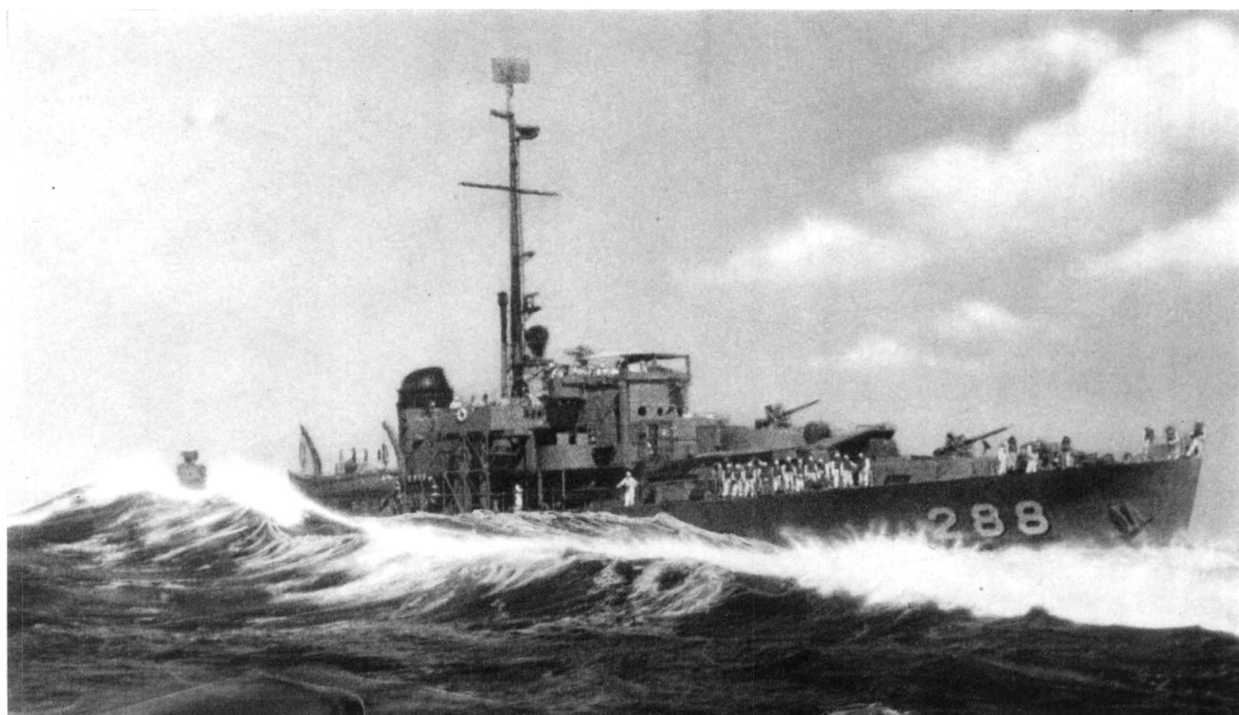
巨濤を巧みに突切って東に北に航行を
つづける我が護衛艦の勇姿。

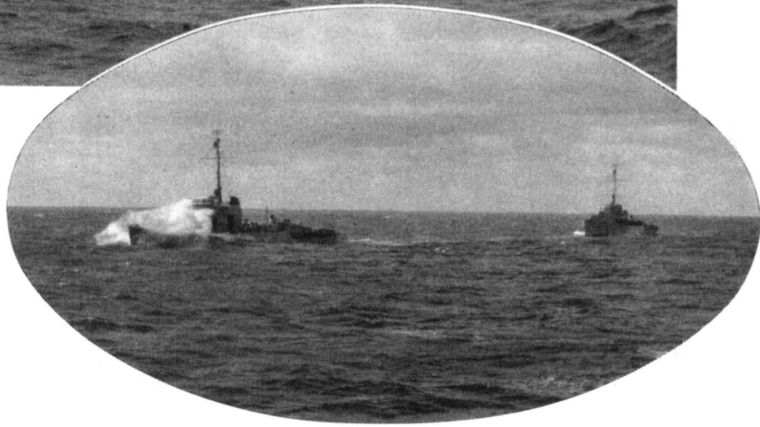
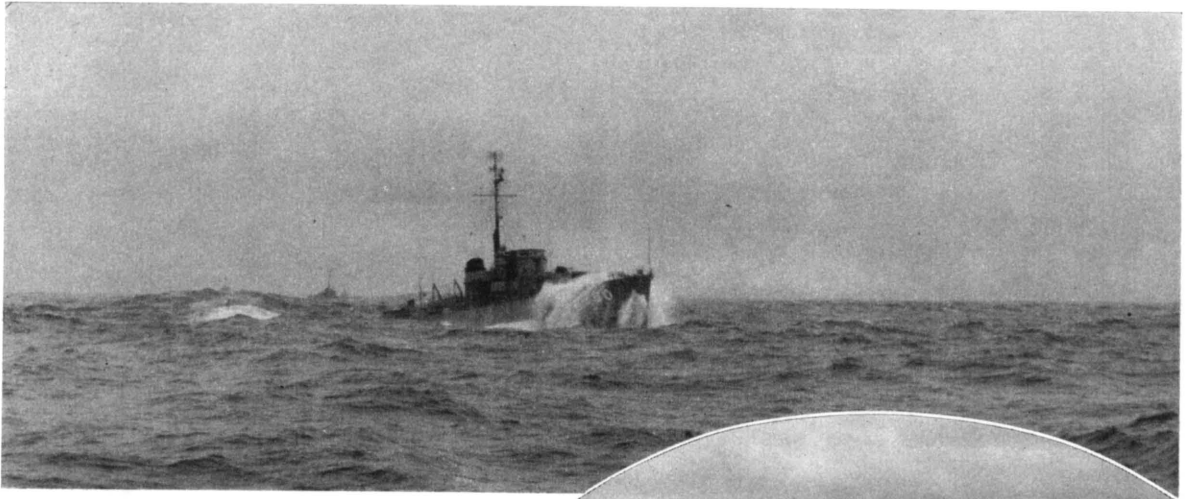




其の十

遥かな沖合から幾重にも折重なり膨れ上って来る波
は舷側に激突し、巻き返し、波と波とが噛みあつて
滝のように甲板を洗い白く散ってゆく





其 の 十 一

低気圧は去るもうねりは依然として残っている。

小雨を乳色にたれこめて視界をさえぎっている、いまだ激浪と斗い艦首を水中に深く突入しつゝ難航する。

其の十二

連続する風波に見る影もなく艦旗は破れた、
しかし、海の男の士気は益々旺盛氣力が体内
から盛りあがってくる。



夕焼雲に包まれた大自然の前に

空も海も艦も真赤に映える夕焼け、朝の怒涛も夕べの美観も海象の変化とはいえ、自然の筆舌につくし難い魅力である。この大自然の中に人間が如何に少さく無力であるか、その反面、大自然を征服する偉大な力を学ぶこと、数多い体験がシーマンに最も強い力であり、無形の財産でもあることを知る。

この瞬間こそ海国日本の守りとして海に生る喜びに心はおどる。

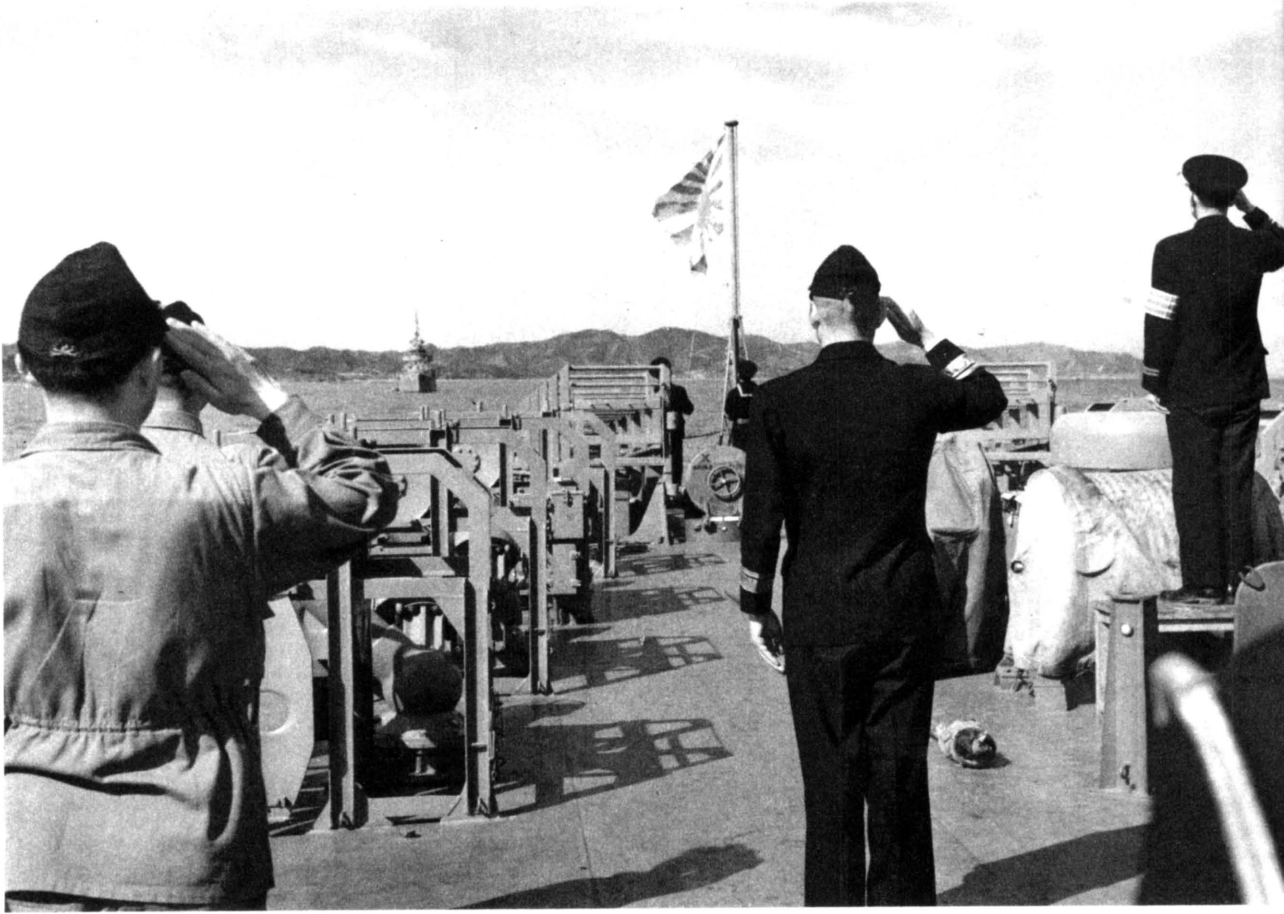




母港え入港

水平線上にうすく引いた灰色の
一線もやがては連立する山肌と
なつて姿をあらわし、折からの
夕日が緑に映えるころ「錨地ま
で五哩!!」「入港準備作業かゝれ」
の号令に乗員は勇躍配置につく





艦 旗 降 下

「十秒前!!」「時間!!」「降せ!!」停泊中は
日没に一秒もたがわず当直士官の号令で
ラッパの響きと共に降下される
五分前には司令、艦長を始め乗員一同は
整列して艦旗に向って敬礼する。
艦旗は明朝八時の掲揚まで静かに眠るの
だ

1



2



舷 門 当 直

停泊中の艦の玄関口を舷門と呼び、当副直士官

当直海曹、当番が二十四時間立直する

主な任務は艦の出入者の送迎、取次ぎ停泊中の
日課の下達、見張などである……(1)

(2) 舷門における面会人の受付

(3) 「上陸員整列」当直士官の上陸中の心得が
達せられる

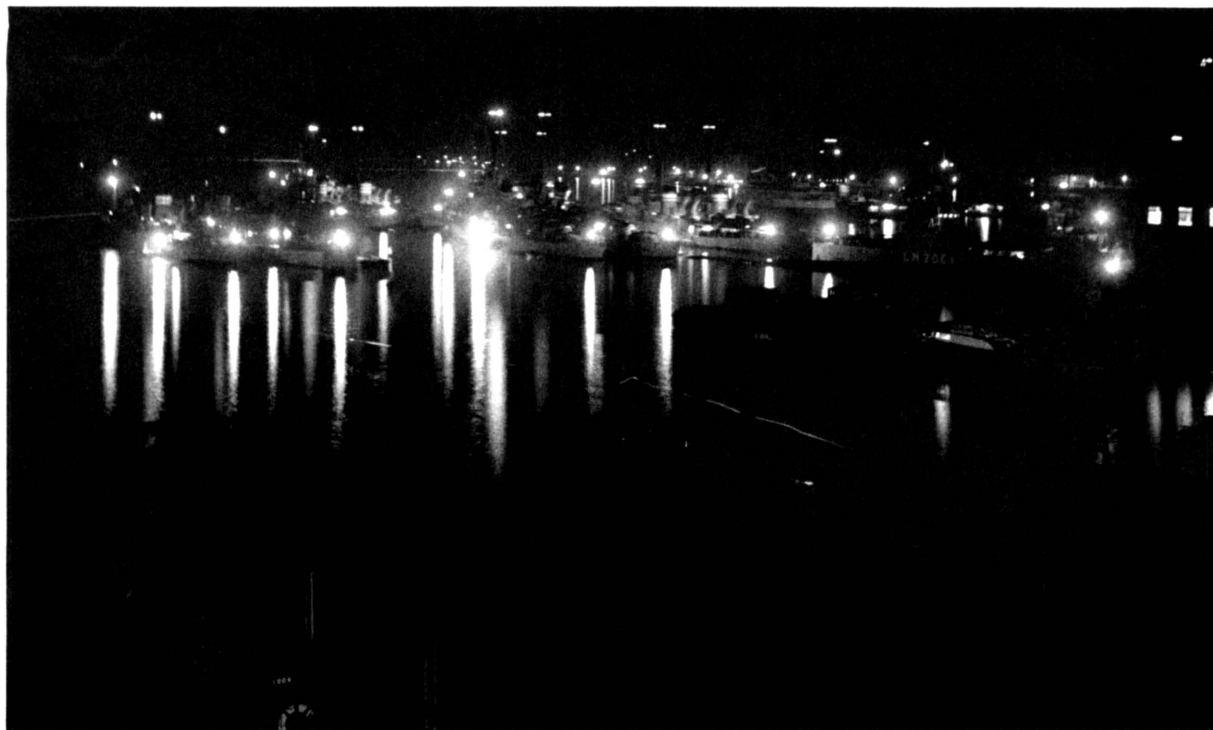
(4) 各艦の内火艇で賑わう上陸栈橋

3



4





5

夜の港

- (5) 夜霧がしっとりたちこめた港の夜、赤白の停泊灯が美しい海面に映えるなかを内火艇は水面に夜光虫の航跡を残して闇に消える
- (6) 二十時!! 巡検が始まる
- (7) 二十二時には消灯される……ベッドに入る乗員

7

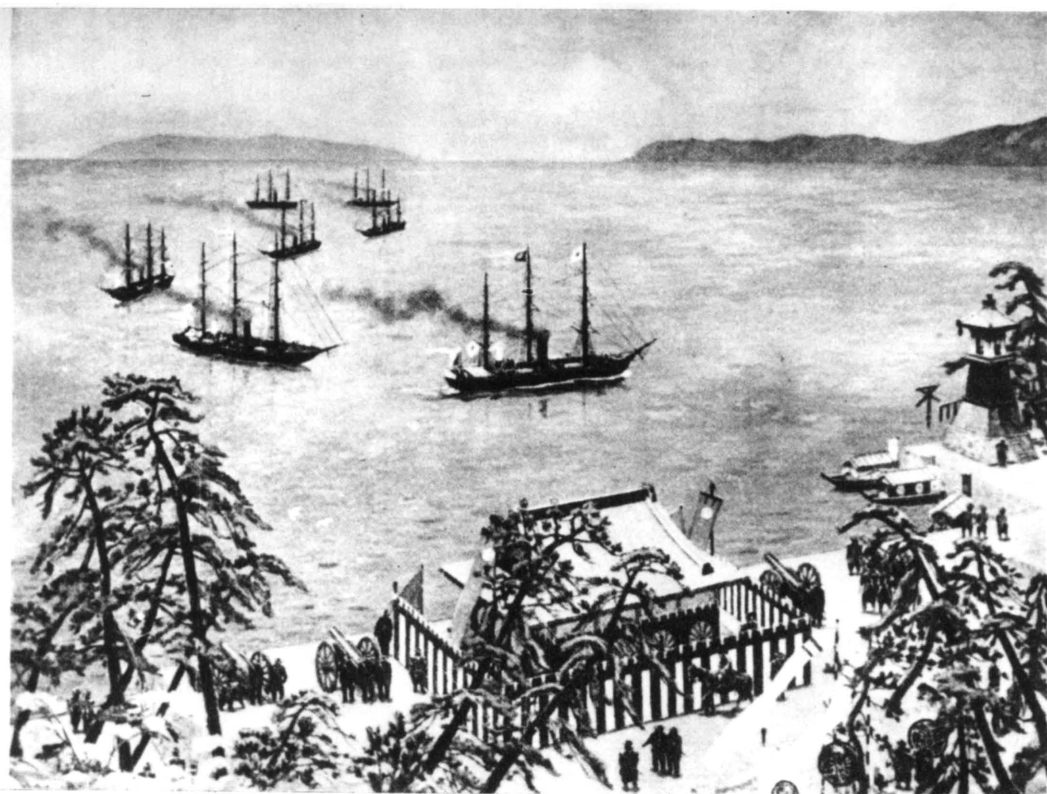


6



海軍館壁畫
天保山沖軍艦御親閱

明治元年



明治元年 天保山沖
海軍館壁畫
天保山沖軍艦御親閱
明治元年
中山洋行主人
昭和三年二月二日

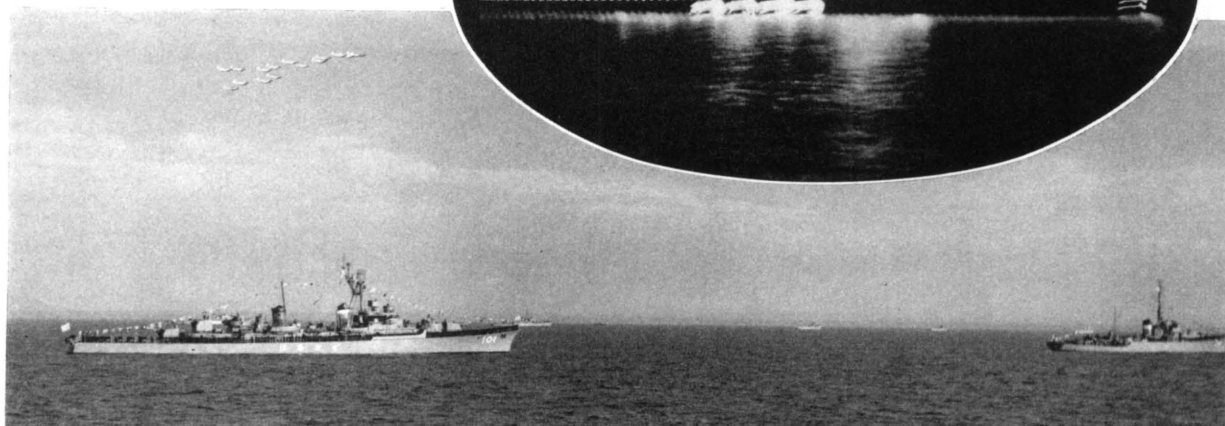
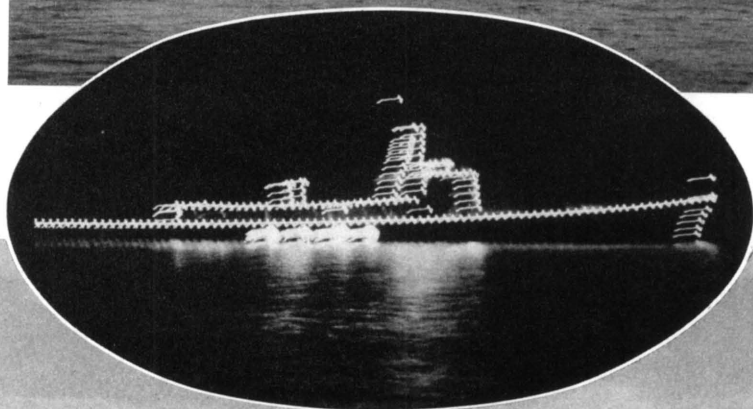
観艦式

威風堂々健やかに育つ海
上自衛隊の雄姿
羽田空港沖合で観閲官を
迎え数万の見学者の見守
る中に航空機も飛来して
盛大に行われた

A NAVAL REVIEW



電飾中の護衛艦





1



2

3

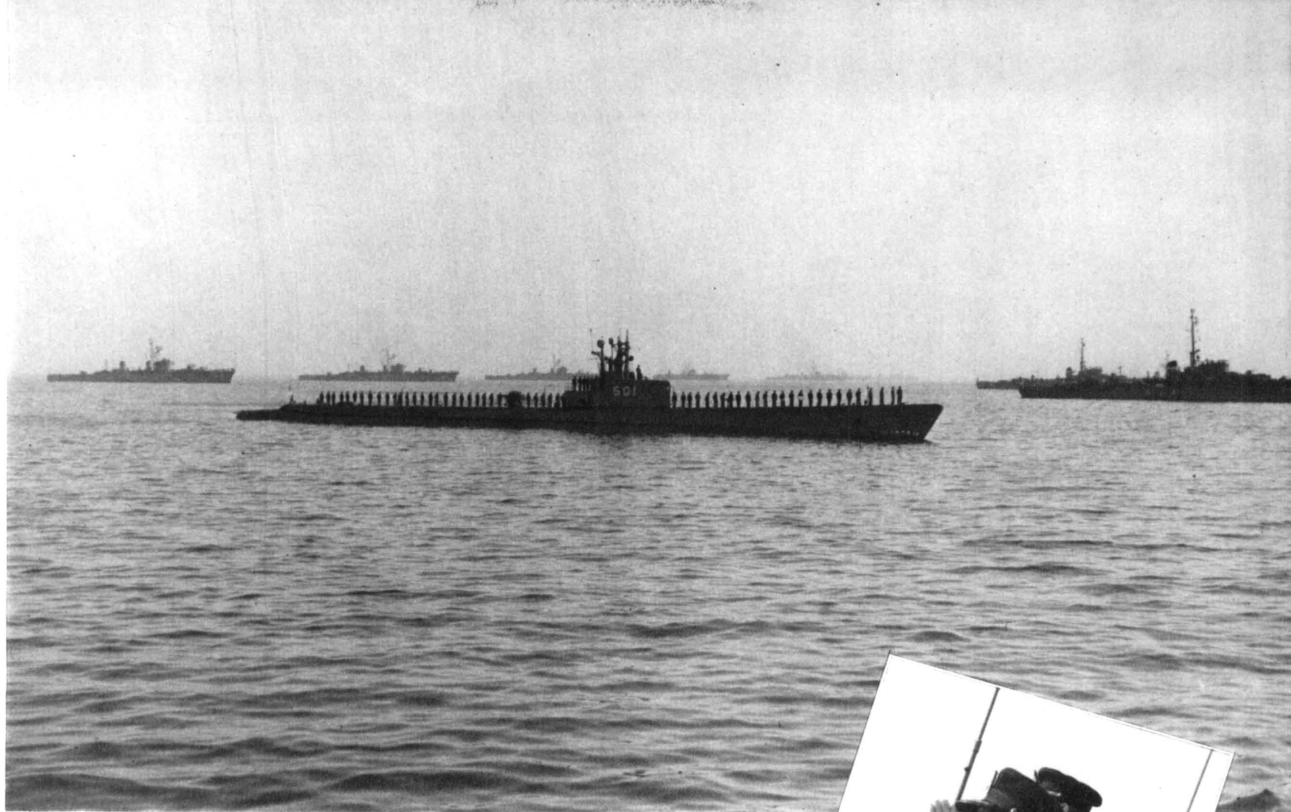


4

1. 栄誉礼（高官の公式訪問の場合行はれる儀式の一つ）庵原海上幕僚長を栄誉礼によって迎える中山自衛艦隊司令官

2. 3. 「あきづきを統載艦として神戸沖に並ぶ護衛艦

4. 艦隊司令官中山定義海将



検 閲 式

海上幕僚長恒列の自衛艦隊の検閲は二年毎に艦隊の任務行動に応じ得る態勢を明かにすると共に将来の訓練方式の改善及び艦艇の整備向上に資する事を目的として海上幕僚長が検閲官となつて行われる。

6. 海上幕僚長庵原貢海将

5. 7. 威風堂々とい並ぶ艦隊の雄姿



5

6

MILITARY PARADE



7



A BOAT MATCH (CONTEST)

1

短艇競技

隊員の士気の昂場を計る自衛艦隊の

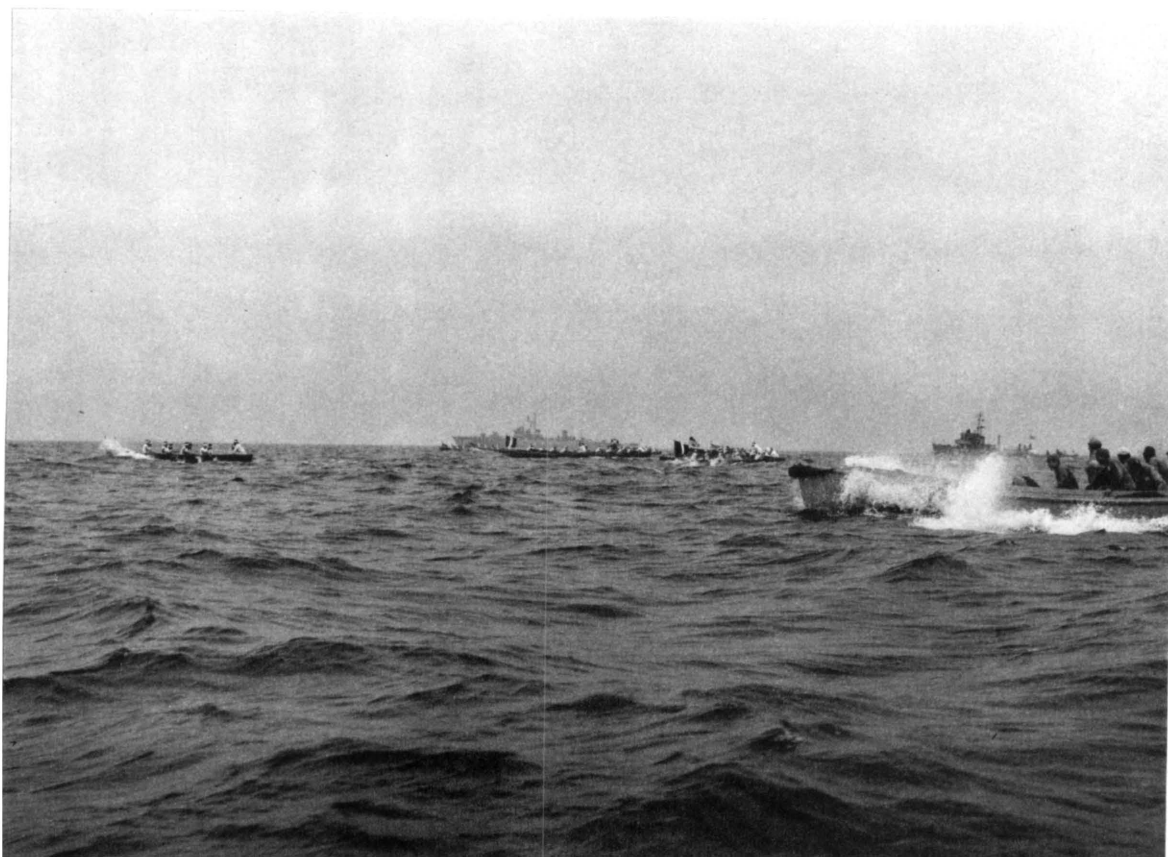
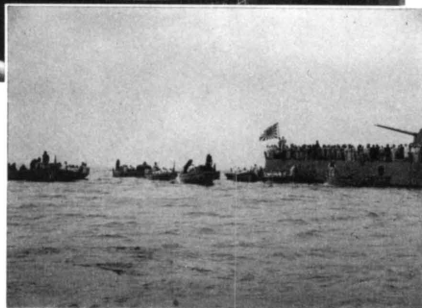
カッター競技

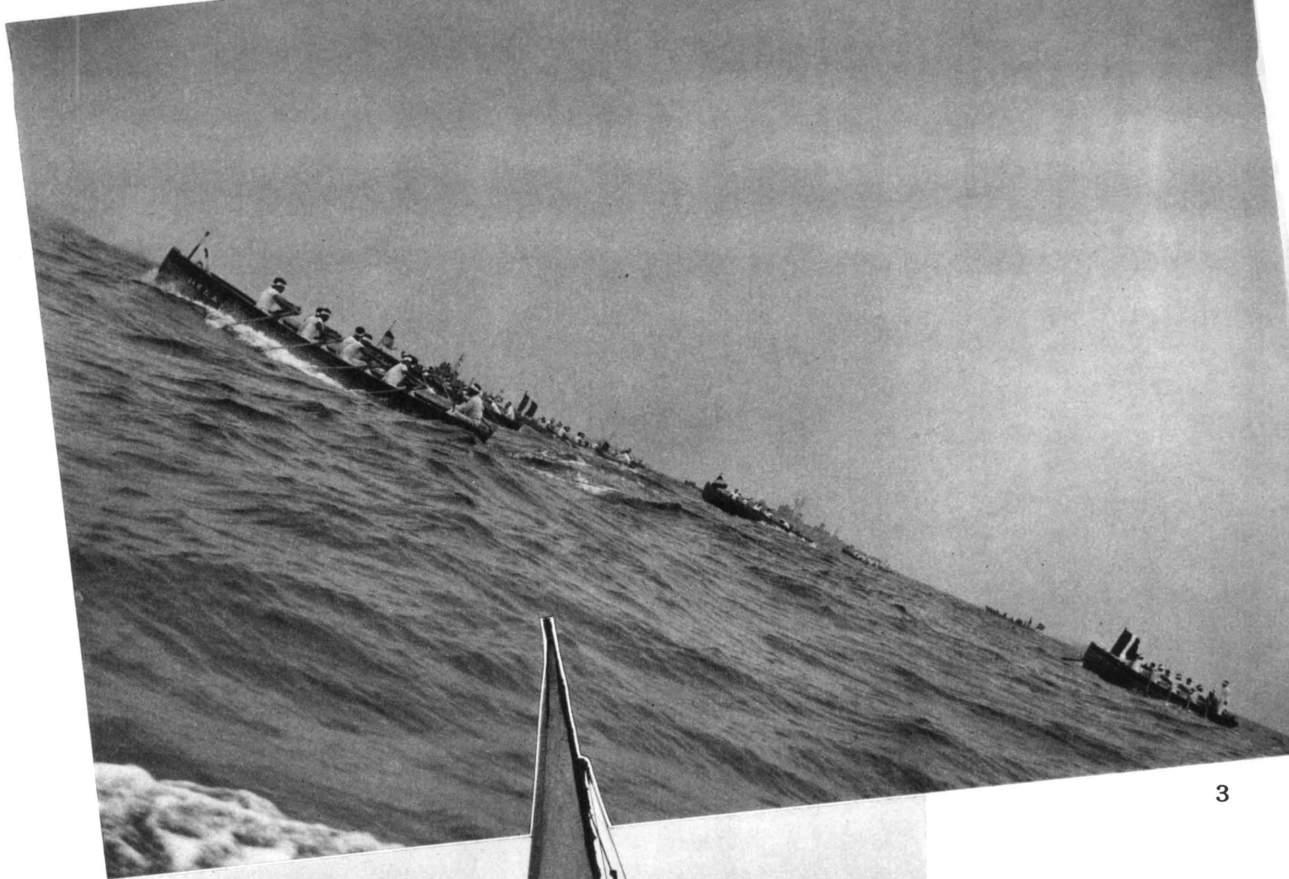
1. 競手に対する訓示

2. 3. シーマン、シップの必須の

教練艇指揮のもとにオールは力一杯

水をかく





3



カッターによる帆走訓練



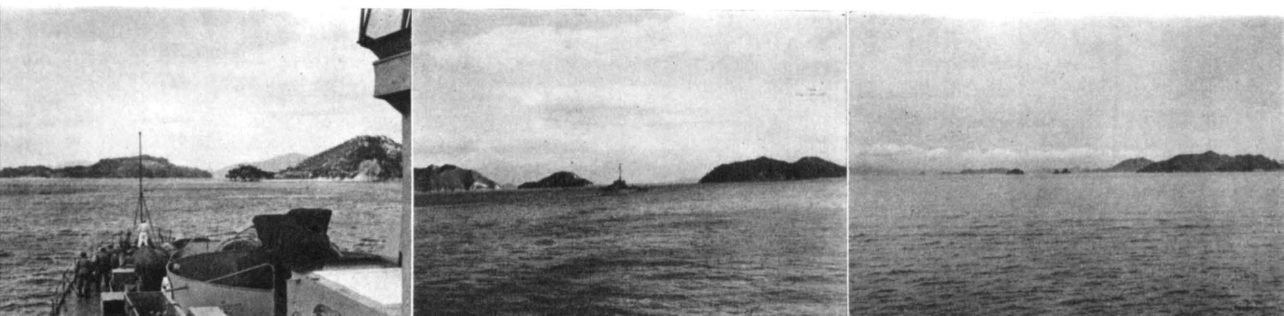
練習艦隊内地巡航 TRAINING SQUADRON CRUISE

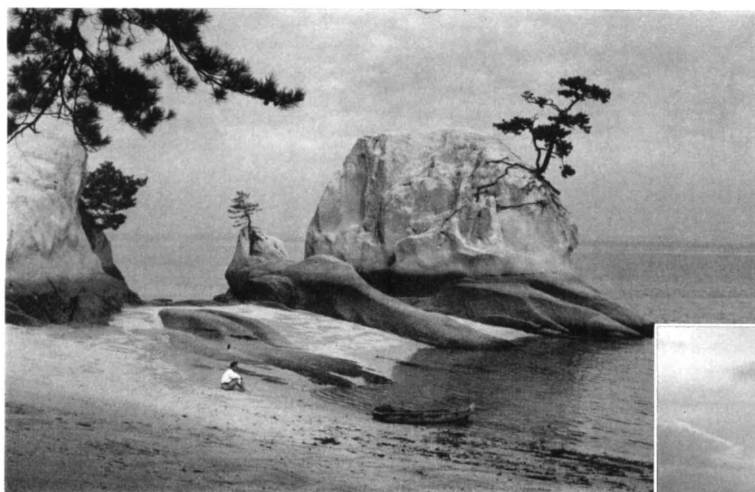
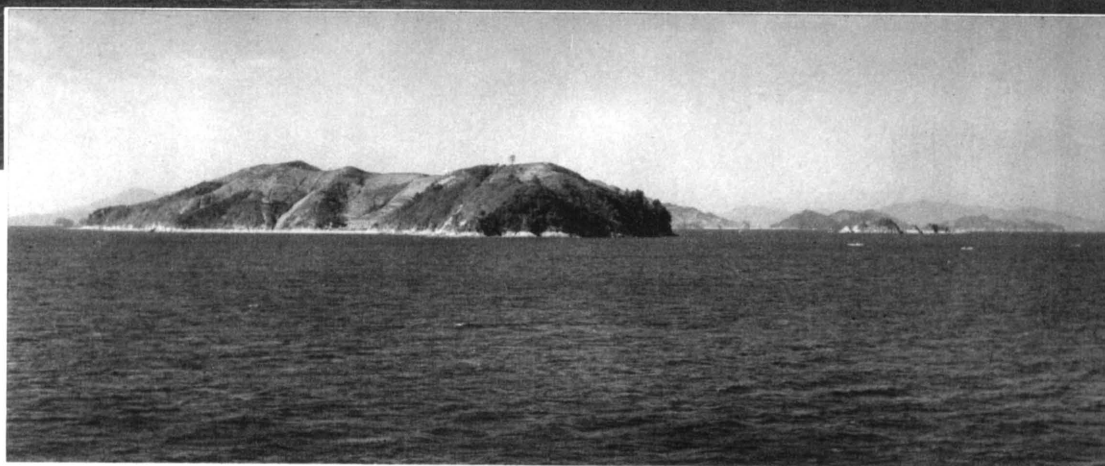
瀬戸内海の航行

阿波の徳島、鳴戸の瀬戸を左舷に見て、須磨、明石の瀬戸にかゝれば「淡路島通う千島の恋の辻占」と歌われた淡路島が手にとどくところに浮ぶ「二十四のひとみ」で有名な小豆島が灰色になつて視界から消えたと思う間もなく塩飽の瀬戸にさしかゝる、油を流した様な海面をすべってゆく艦に周囲の島々から磯の香りが潮風につて流れ点在する漁船、航路浮標に白い灯台、長く尾をひく気笛、さながらお伽の国に遊んでいる感にうたれる。

遠く古戦場屋島をのぞみ鵬飛び交う大小数百の島々は果てしない変化を描き奇岩、怪礁は紺碧の水に遊ぶ。

風光の美、源平盛衰、村上水軍発祥の瀬戸の内海を航行

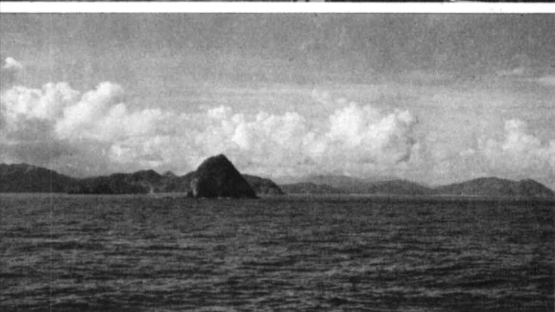




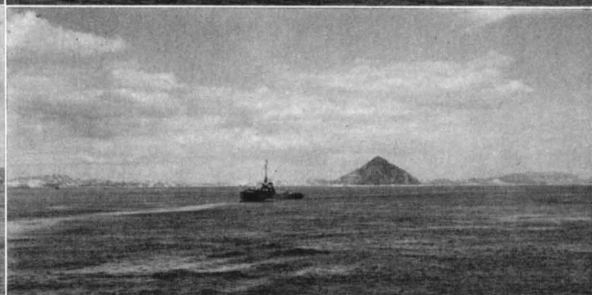
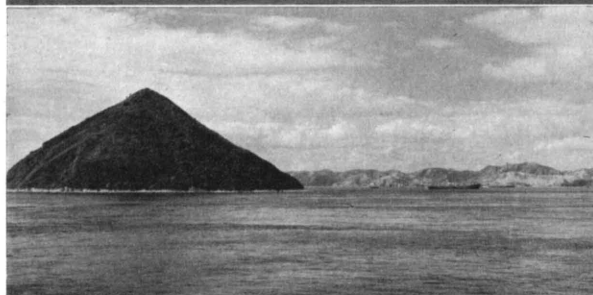
瀬戸内海点描

其の一





其 の 二





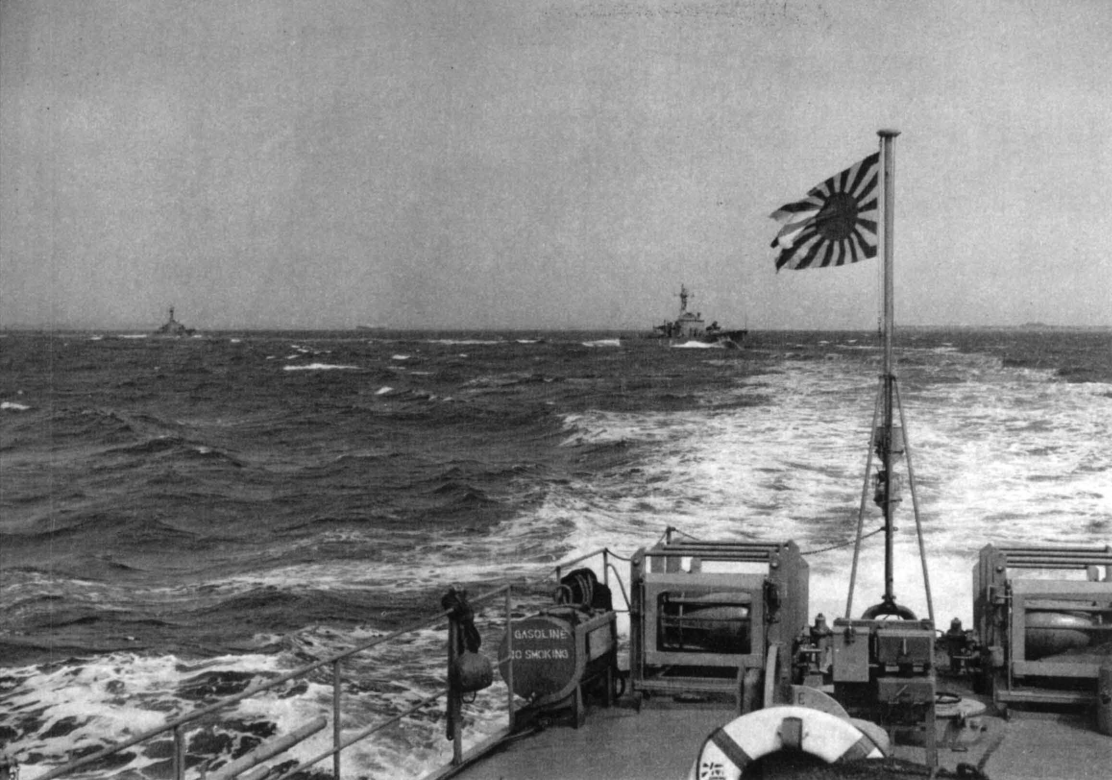
内地巡航

(上) 奄美大島、コニヤ入港、コニヤ投錨

(中) 津軽海峡、遠く北海道が水平線上に浮ぶ

(下) 右回すれば青森県恐山連峯、下北半島の最高峯釜
伏山を経て





駆 潜 隊 其 の 一

駆潜艇は港湾及び沿岸における対潜警戒捜索、攻撃並びに内
航船団の護衛等を行なう

わし艦長 丹羽 三 佐 寄 稿

(上) 編隊航行 (方向変換)

(下) 出港中の駆潜艇及び艦橋

SUB CHASER DIVISION

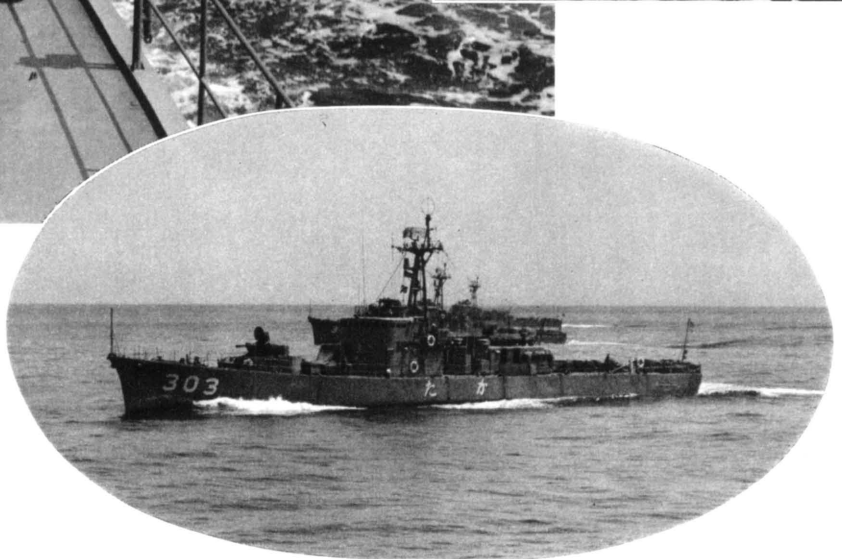
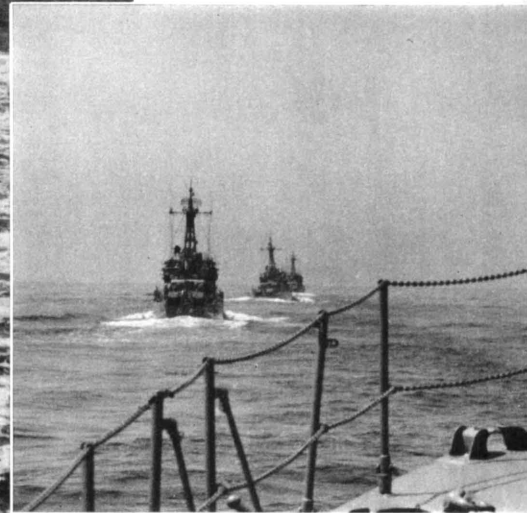
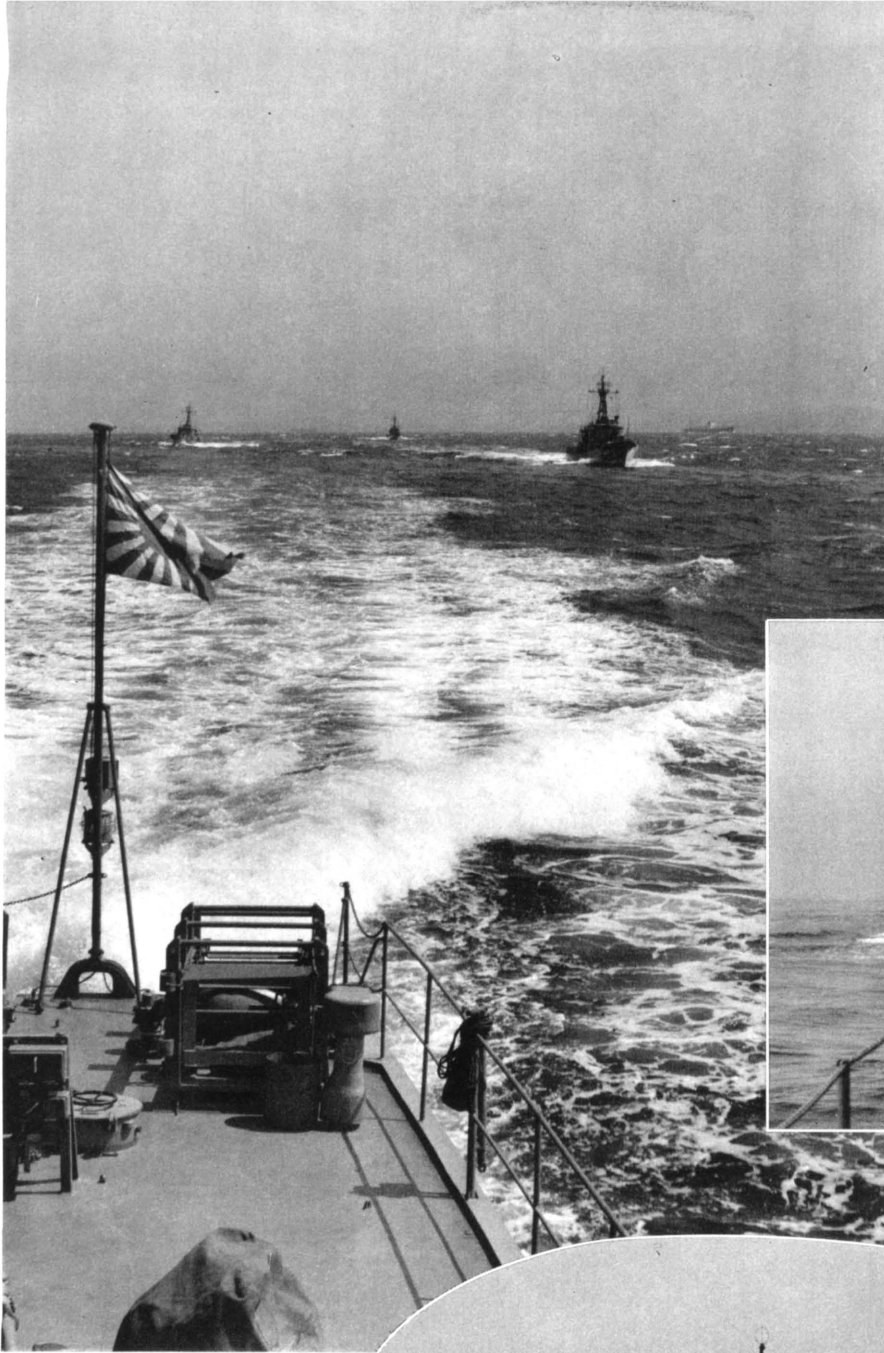


其 の 二

(上) 占位運動

(中) 殿艦から前続艇をみる

(下) 陣形運動





掃 海 隊

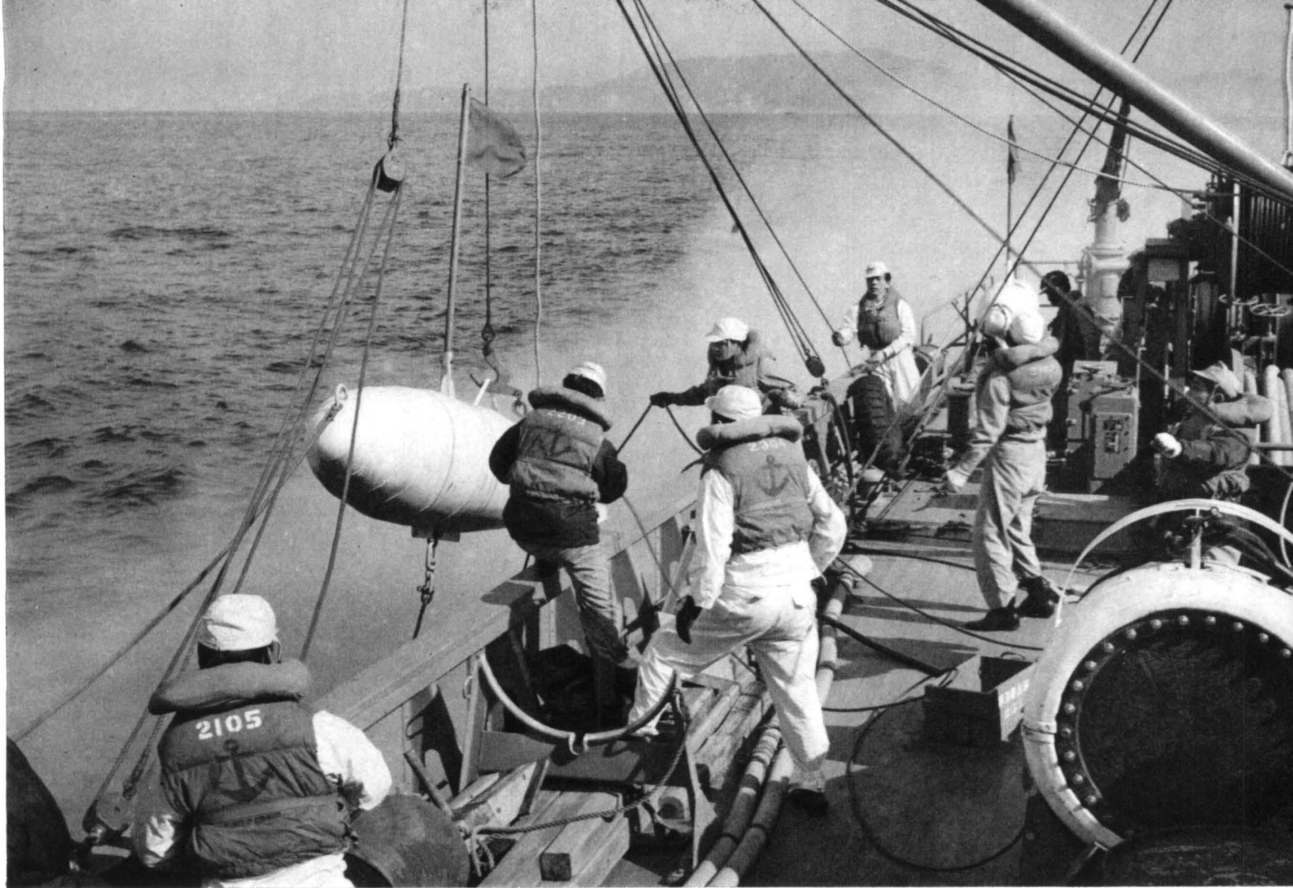
其 の 一

(上) 掃海海面附近で掃海準備隊
形制形中

(下) 掃海具投入 (音響掃海艇尾
曳航) (電線巻出サイズ5
浮標装着準備)

MINESWEEPER DIVISION

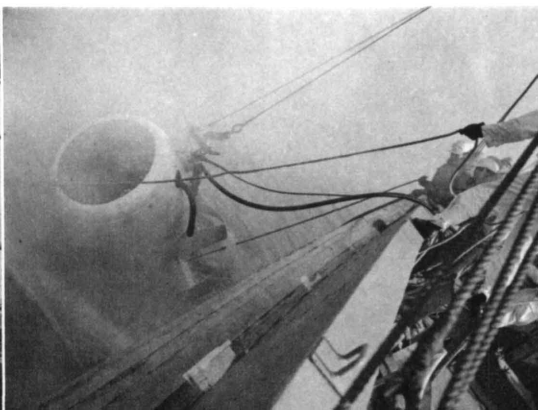
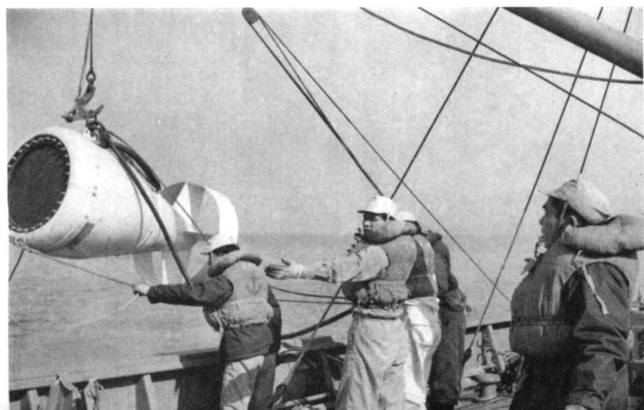


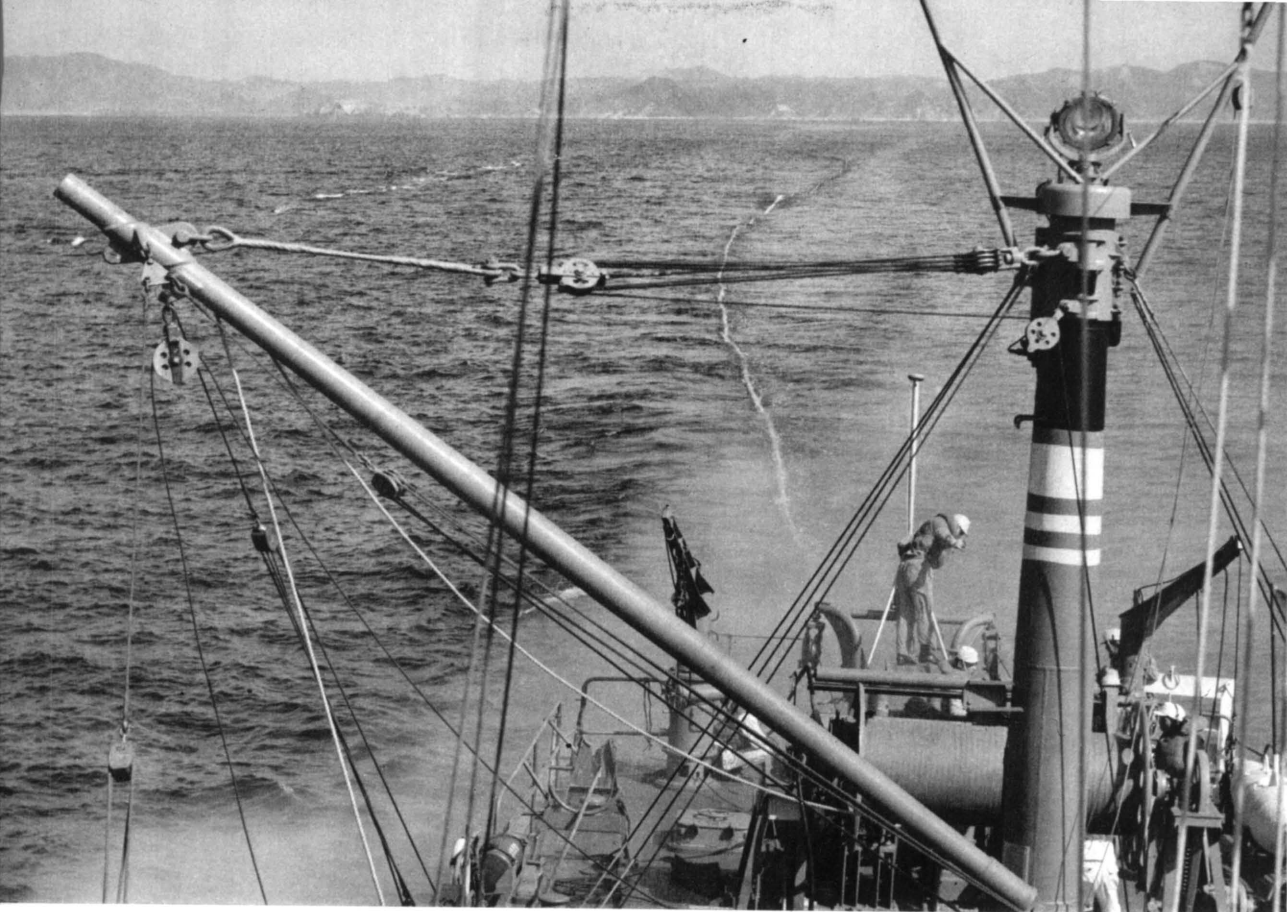


其 の 二

(上) 掃海具投入 (音響掃海サイズ4 浮標投入)

(下) 掃海具投入 (音響掃海ハンマーボックス投入)





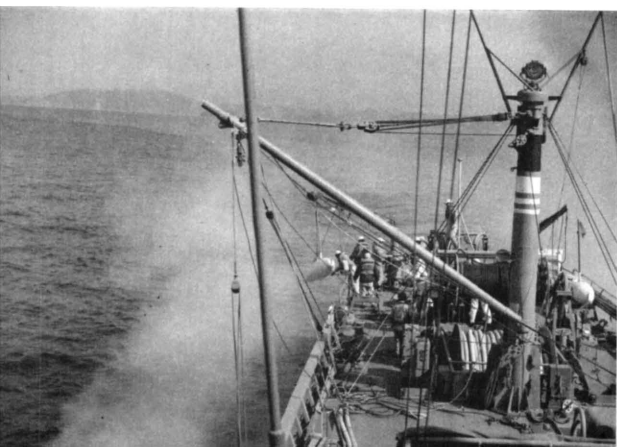
其 の 三

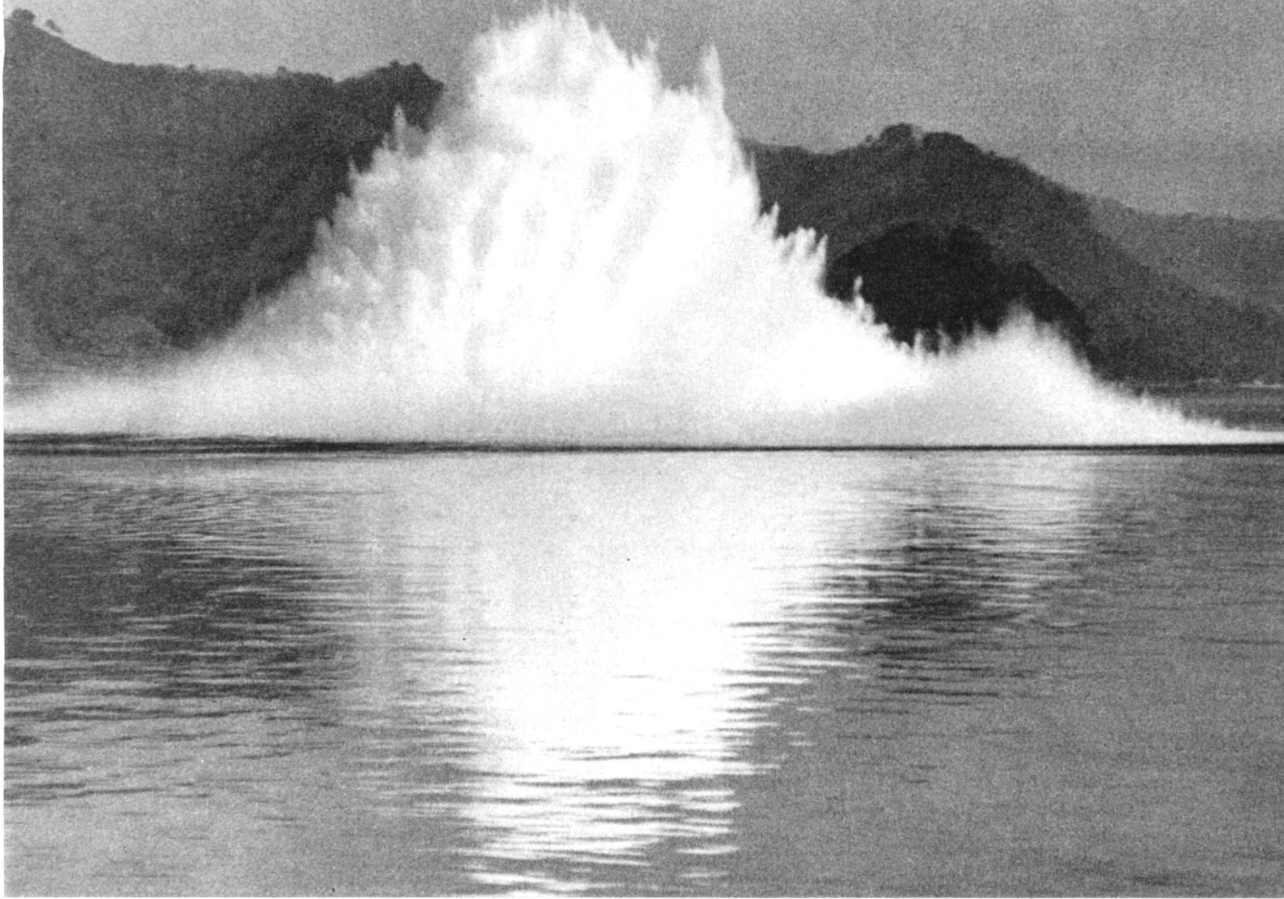
(上) 複合掃海（音響、磁気、偏奇、更航の状態）向って左は音響掃海具、白波がたっているのは電線及び浮標その末端にハンマーボックスがあつて音響（艦のスクリュー音）を発生して音響機雷を爆発させる。

中央の白く長く見えるのは磁気掃海電線で強力な電流を流し海中に磁場を作り磁気機雷を爆発させる

(下) 掃海具投入（音響サイズ4 浮標投入）

掃海具投入（音響サイズ5 浮標投入）





掃 海 隊

第二次世界大戦の落し子として、今なお我々に不安と恐怖を与えているものゝひとつは機雷である、これらの浮遊機雷や磁気音響、水圧等の沈底機雷の大部分は、日本沿岸や重要港湾の各所に敷設されたまゝであつて、一般船舶はそれに怯えつゝ不安な航海を続けている。

この危険や災害を未然に防がんとして海上自衛隊は発足と同時に掃海部隊を編成し海上保安庁から機雷掃海の難作業を受けついたのである。

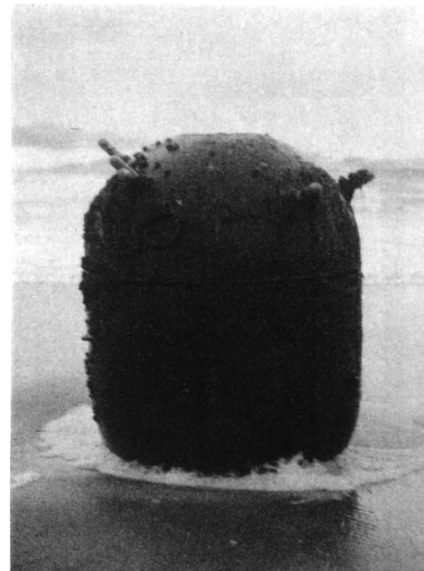
掃海隊は身の危険をも顧みずまっ先きに末掃海域に突入する舞台は広く北は酷寒の津軽海峡から風浪高き日本海沿岸に又炎熱身をやく九州の海にまで及ぶが、日夜を分たず機雷処分任に当り輝かしい成果を収めている。しかしこの陰には幾多の先駆者が戦に殉じ道を啓いたかを我々は忘れてはならない。

末処分の機雷は今なお日本周辺の海底に不気味な眠りを続けている我々掃海隊はこれらを探し求めて日夜任務に邁進しているのである。

西内武志隊 司令寄稿

其 の 四

機雷処分の爆発状況（右側の船と水中と比較するとその威力が判る

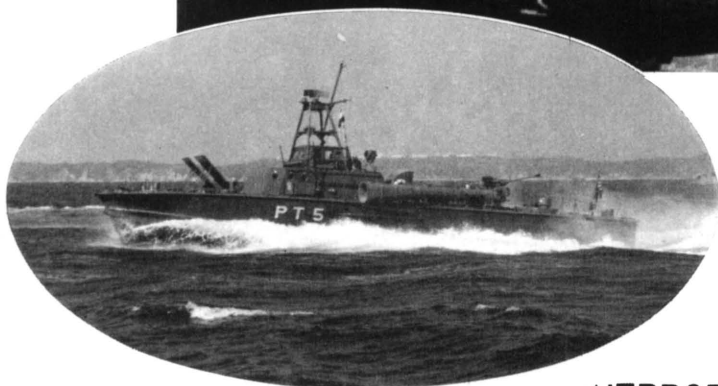


港湾防備隊（魚雷艇隊）

其の一

魚雷艇は大型対潜哨戒艇として、港湾の防備船団、出撃、進入時の護衛並びに哨戒を主任務とする。

月下を航行中の魚雷艇



HERBOR BASE OPERATION UNIT
TOPEDO BOAT DIVISION



其 の 二

(上) 方向変換中の魚雷艇

(中) 手旗信号中の信号員

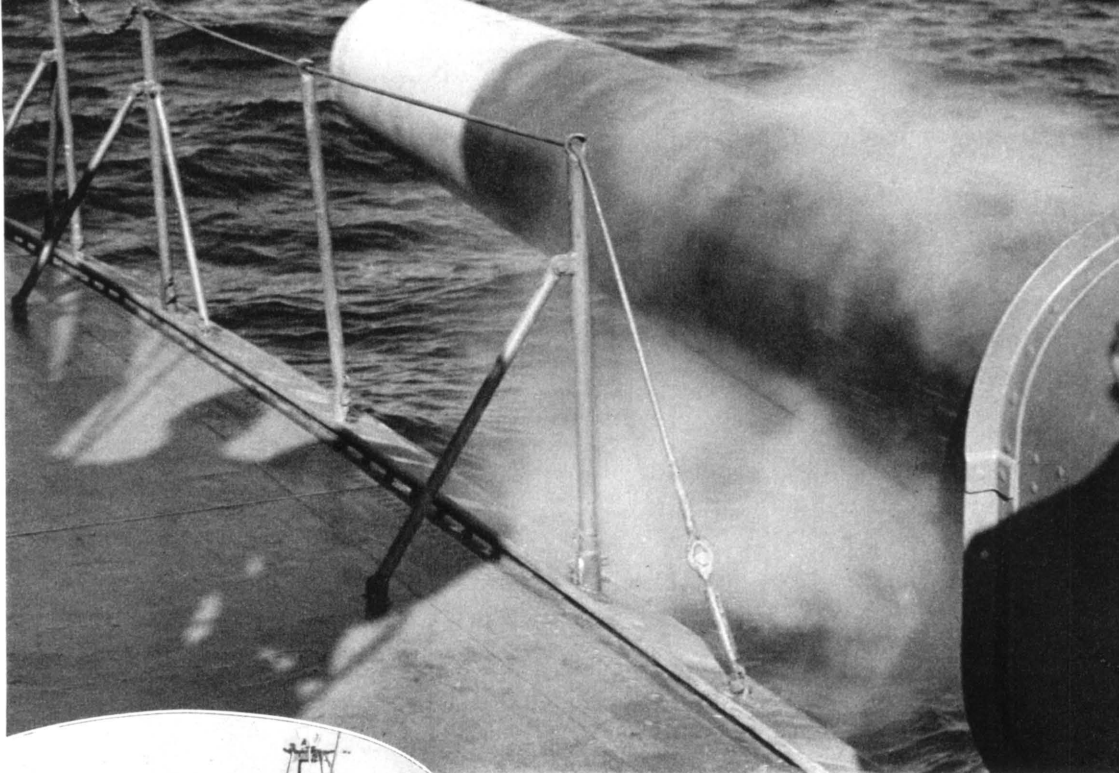
(下) 魚雷艇の艦橋



其 の 三

高速で編隊航行中の魚雷艇隊





其 の 四

対潜用長魚雷発射中の魚雷艇



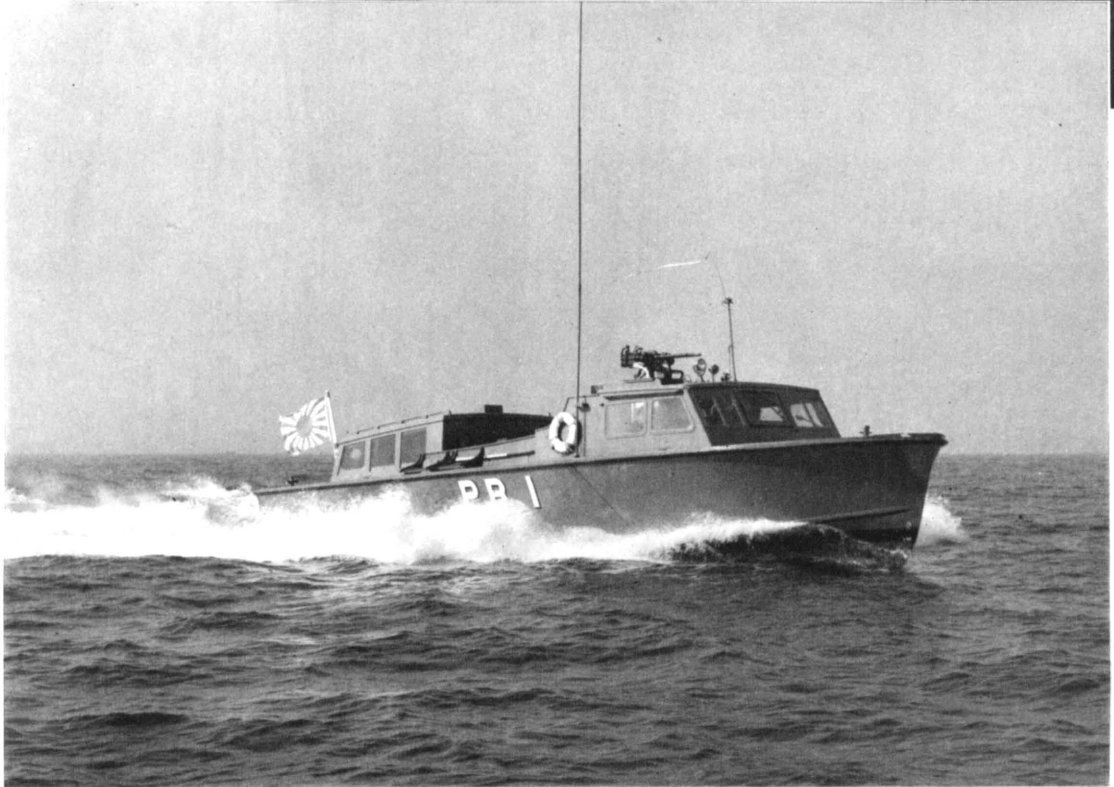


港 湾 防 備 隊

哨戒艇隊 其 の 一

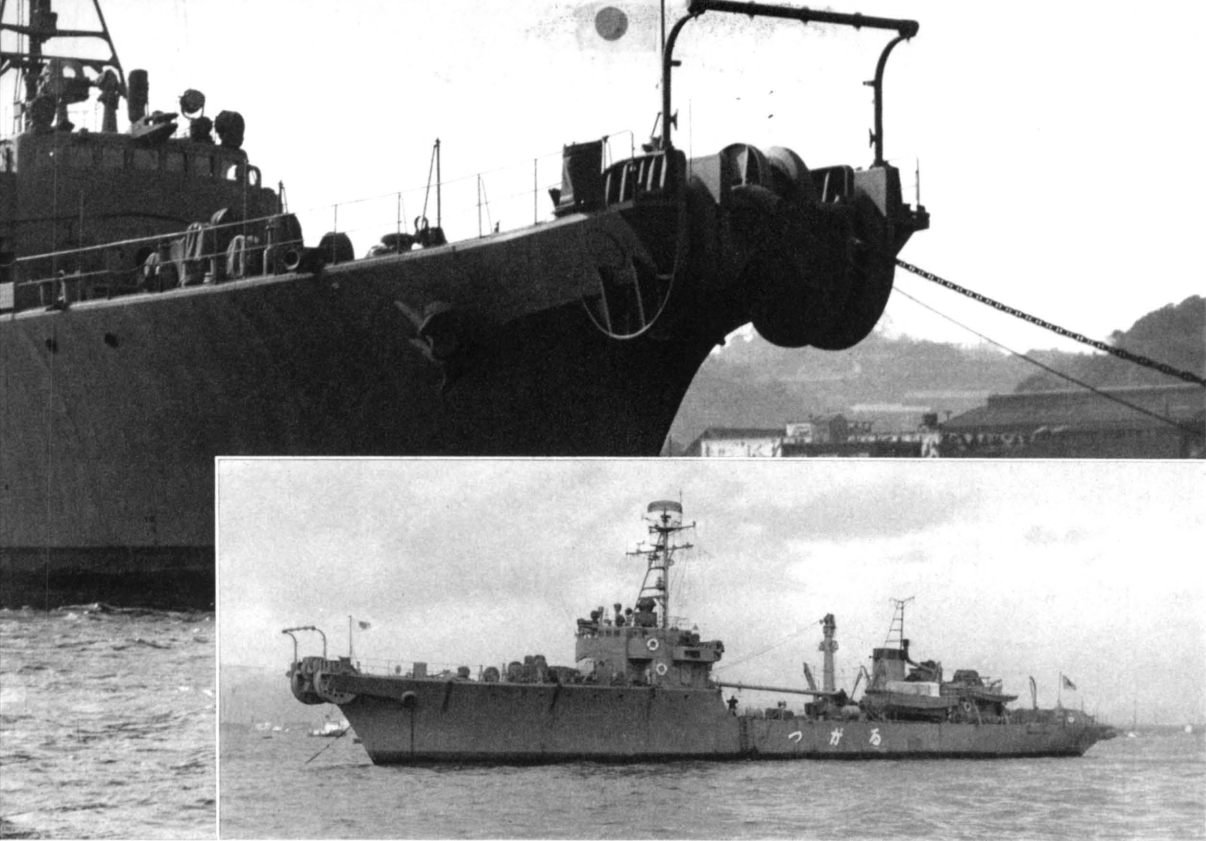
哨戒艇の主任務は港湾の哨戒防備
であり軽武装した小型艇である。

写真は哨戒艇隊の出港

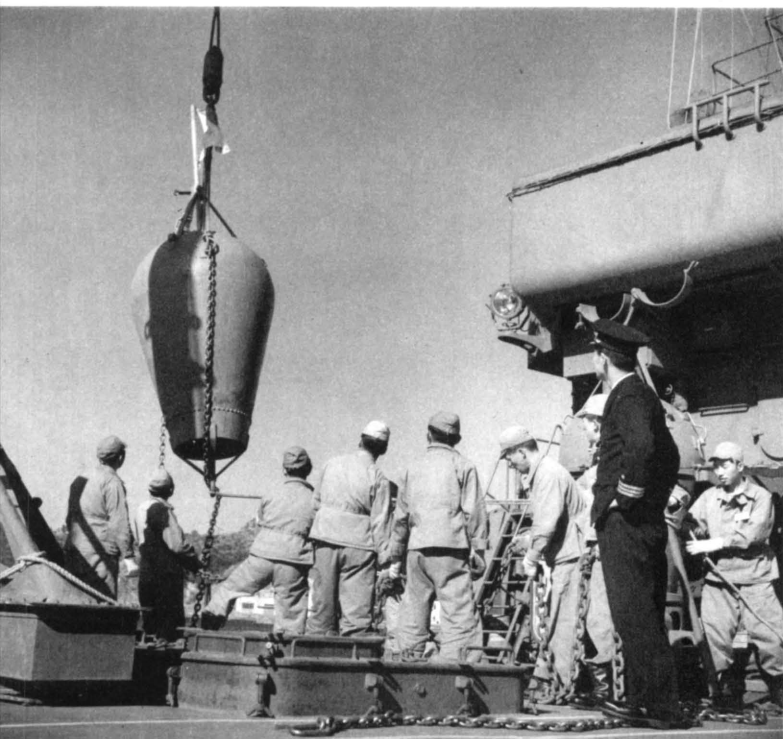


其 の 二

哨戒艇隊の編隊航行



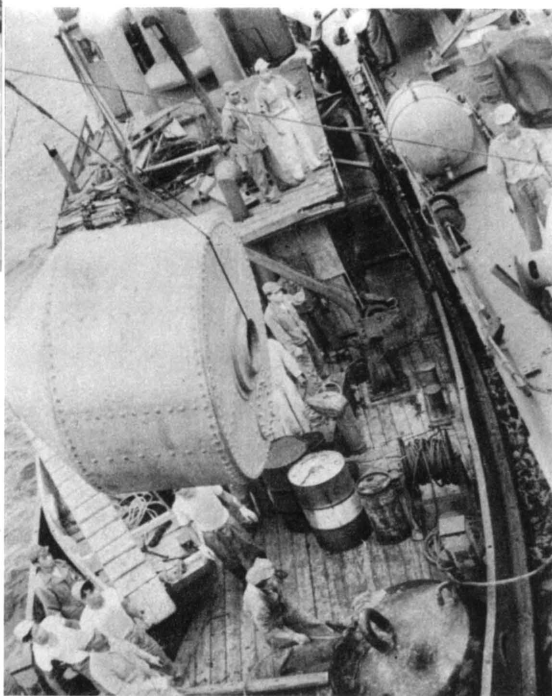
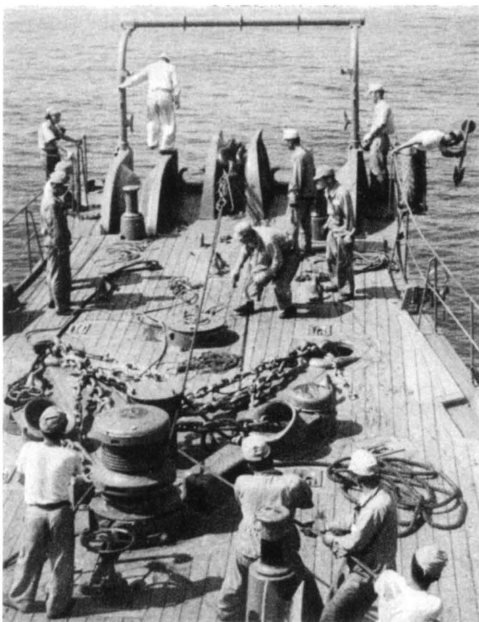
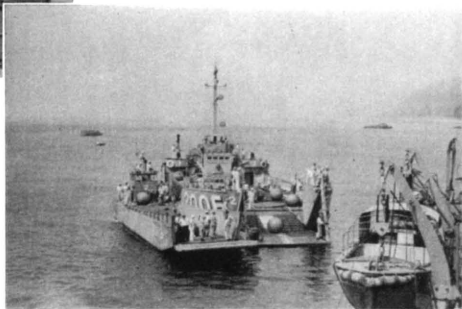
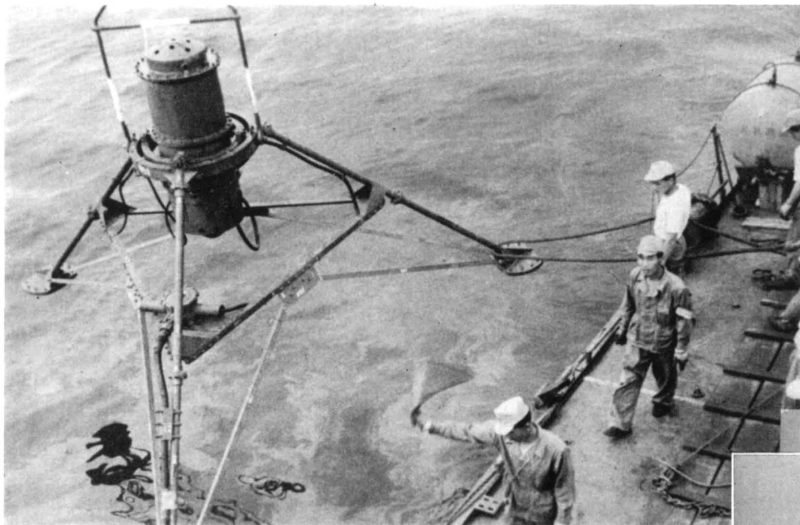
REPAIRING OR CABLE LAYING SHIP



敷設艦「つがる」

其の名の示すように水中固定防備敷設作業（水中探信儀等の敷設）を主任務とする一方海域の掃海（浮流機雷の処理等）を兼ね行うものであり他の自衛艦とくらべて極めて地味な任務が課せられている

四面海に囲まれている日本として港湾防禦の必要性は当然の事であって、本艦はヘラルド敷設（音波を出して海中にある危険物を探す装置）について完全な装置を持つほか機雷爆雷も搭載し3吋砲や機銃も備え世界にも比類なき優秀艦といえる。





潜水艦救難艦 其の一

国防に益々新威力加わる

戦前、戦後を通じて初めての艦種で潜水艦遭難事故に備えた救助を任務とする救難艦で、かねて三菱日本重工横浜造船所において建造中の所昭和三十六年三月十五日引渡し式も完了。

艦長斉藤三佐、副長吉海江三佐以下八十名により就役す。「写真を追って説明を加える」



AUXILIARY SEARCH AND RESCUE

(上) あらゆる情報を刻々とキャッチしつゝ

潜水艦遭難地域に急行する「ちはや」

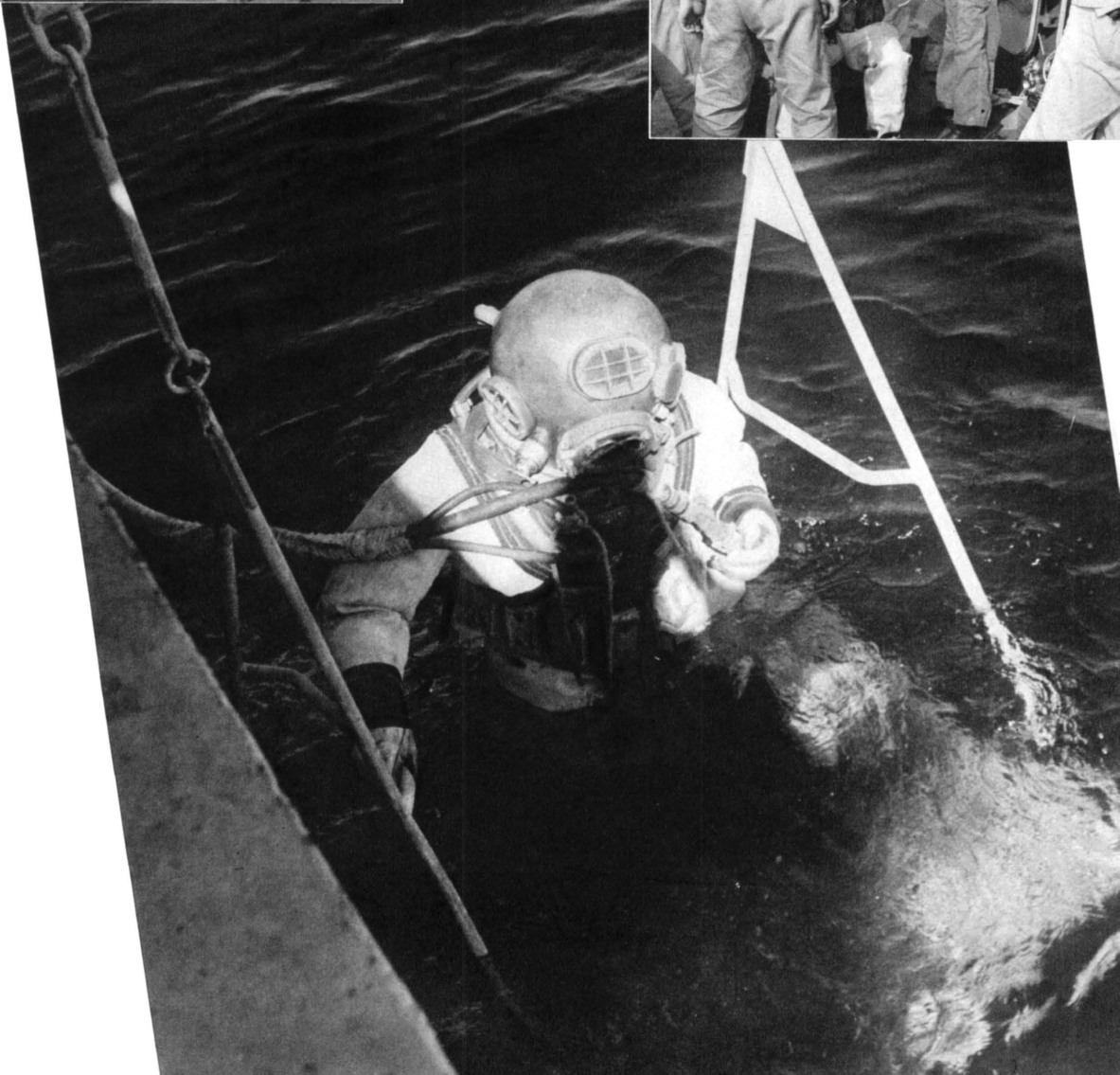
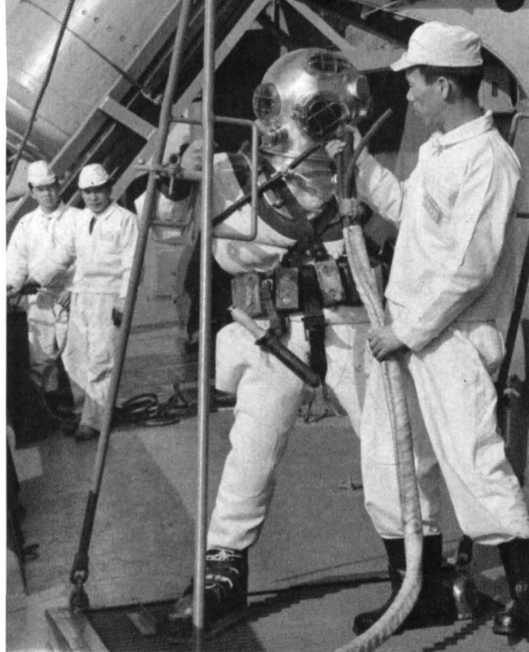
(中) (下) やがて艦橋から設備用意……

投錨……ガラ、ガラと次から次に四個

の錨を投入し遭難艦の直上に繋止する



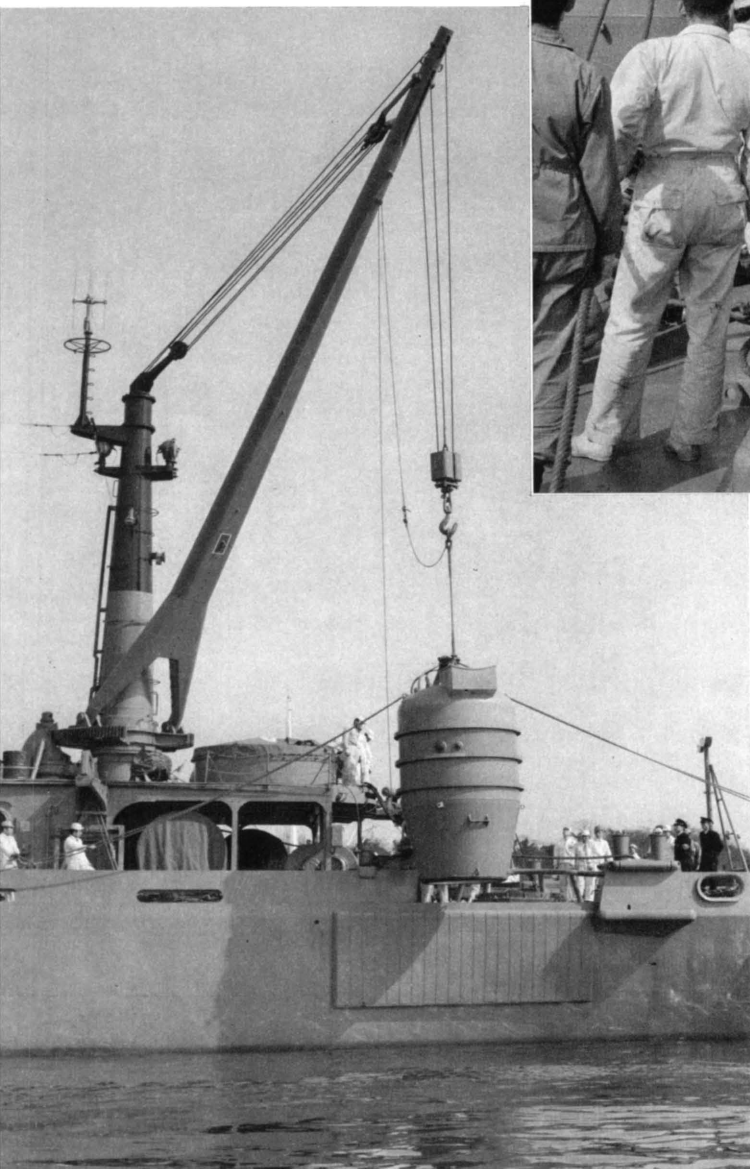
はやくも潜水具を装備して待機中の潜水員は、
ブク、ブクと気泡を水面に出しながら海底深く
潜水し、潜水艦の「ハッチ」附近の状況調査を
行う

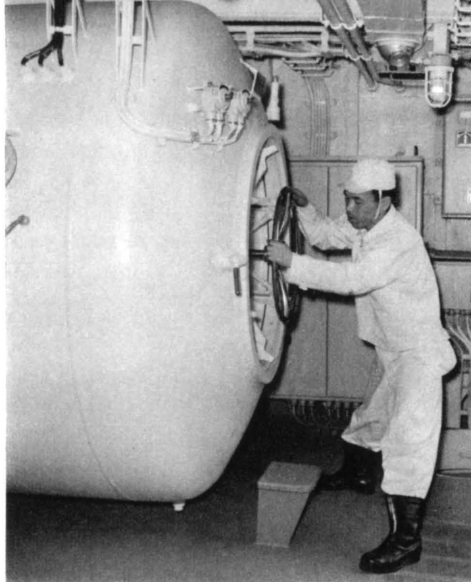


其 の 三

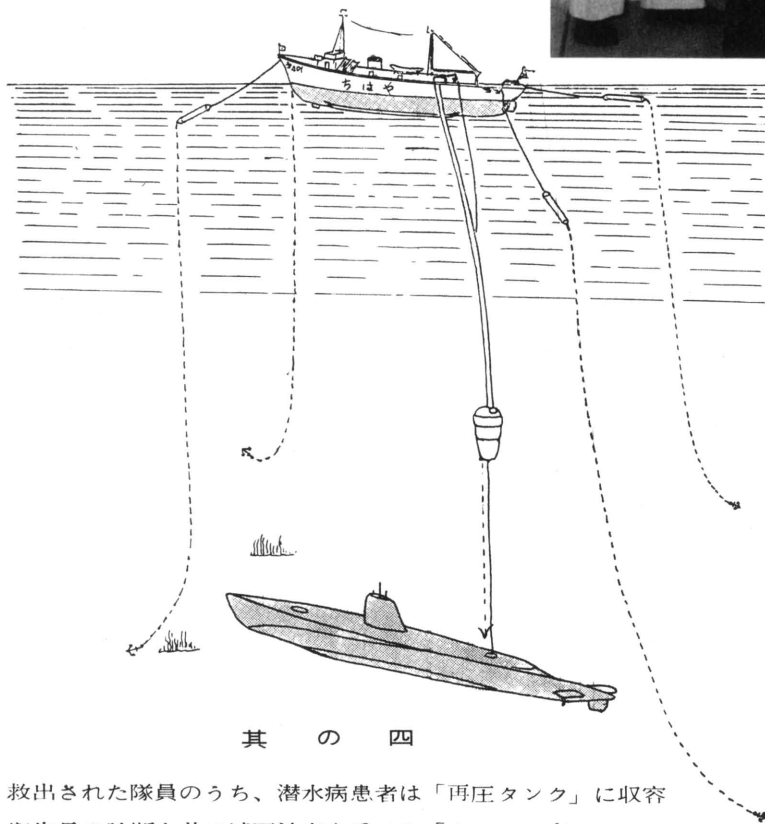
状況調査が終ると直ちに「レスキュー
チャンバー」（人員救出用の釣鐘型タ
ンク）は降下され緊張のみなぎる中に人
命救助作業が展開される。

次項の「図解参照」



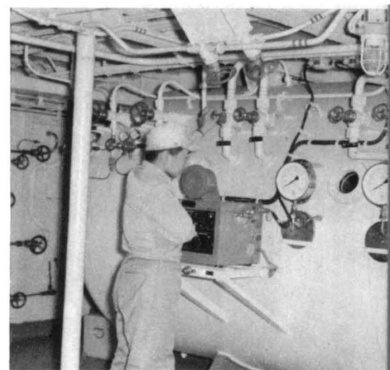


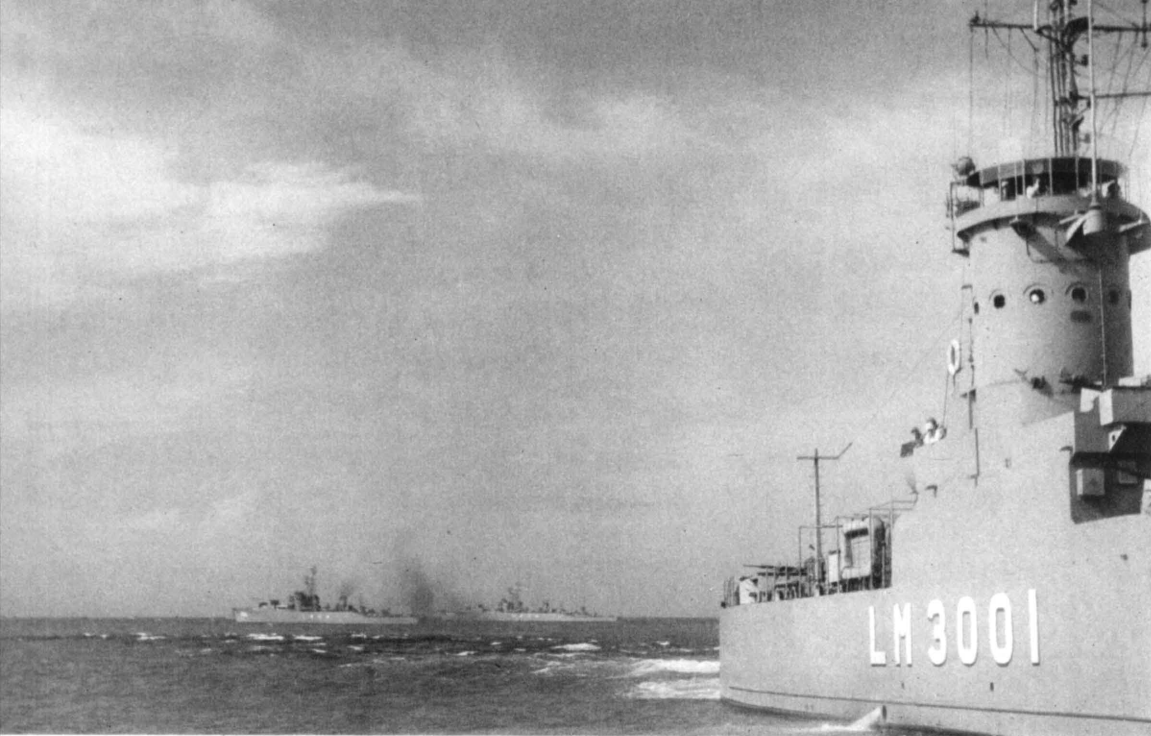
“作業中の本艦”



其の四

救出された隊員のうち、潜水病患者は「再圧タンク」に収容
衛生長の診断と共に減圧治療を受ける「タンク」内において
は患者の容態により酸素吸入等を施しつつ診療が行われるな
お患者の容態は「タンク」外からも透視観察し、絶えず深度
「気圧」の調節を行い逐次快復が保証される。





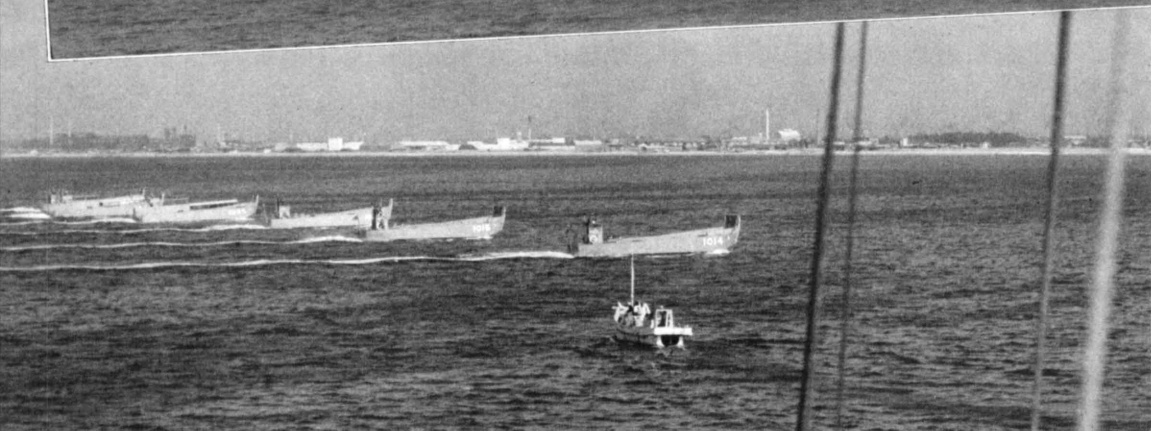
LANDING CRAFT DIVISION

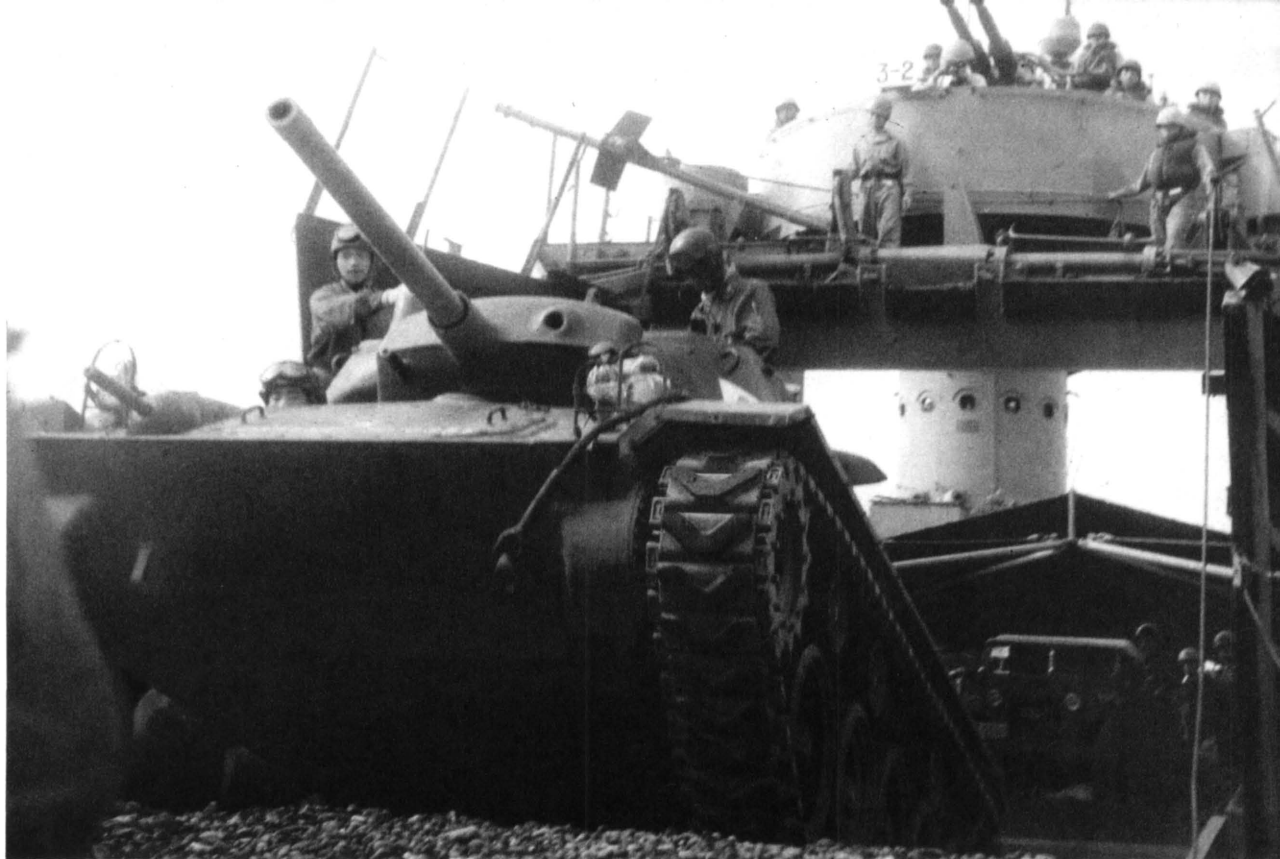
舟 艇 隊 其 の 一

舟艇隊の主任務は両用作戰において輸送艦船から上陸部隊、車輛、重火器等を揚陸させるにあるが災害等の發生に際しても災害地への人員救援物資等の海上輸送に重要な役割りを果たしている、近代戦に欠く事のできない兵力の機動性の發揮にその使命は大きい。

(上) 目的地に向って航行中

(中・下) 煙幕展張下に揚陸中の舟艇隊





其 の 二

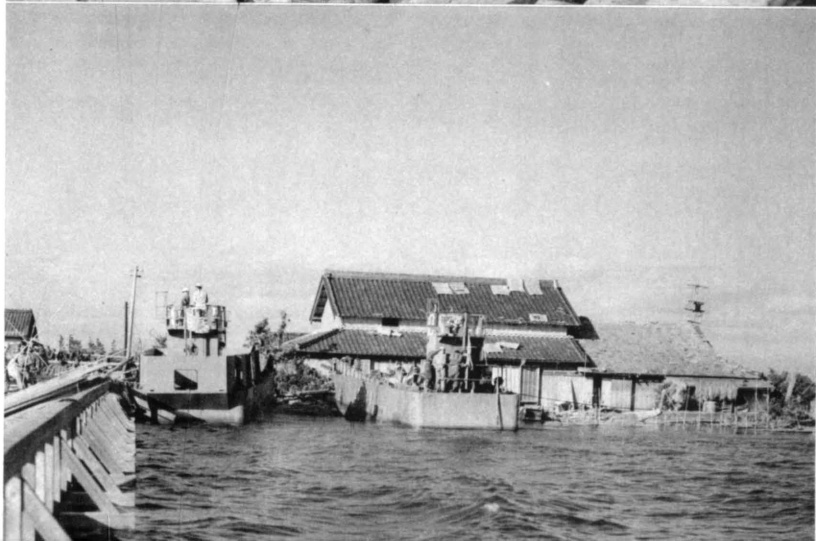
陸海、共同作戦揚陸中のスナップ



其 の 三

災 害 派 遣

伊勢湾台風による被害に逸早く
出動する舟艇隊の活躍





HIGH SPEED RESCUE BOAT



高速救命艇

主任務は洋上に遭難した航空機塔乗員の救助にあり、速力四十二ノットの高速度をもつて救出作業にあたる。



TRAINING SQUADRON CRUISE



遠洋航海

「ハワイ」点描と歓迎スナップ



遠 洋 航 海

昭和32年第二次世界大戦後初めての遠洋航海が実施された、回顧すれば旧帝国海軍練習隊が最後の海外渡航に出て以来実に18年振に幕はひらかれた1月15日肌寒い降雨の中に晴海埠頭は見送りの群集にうまる、別れを惜しむ隊員と家族の姿が、三々五々と見受けられる「出港用意」が艦内スピーカーから流れると家族は下艦する栈橋の実習員や乗員は一斉に乗艦する、軍艦マーチが高らかに鳴り響く!!「すぎ」が岸壁を離れた、「はるかぜ」「かや」「くす」も其れに続く、出港!!見送りの家族が一斉に手を振る!!祝遠洋航海と書かれた色とりどりの朝雲新聞社の「ノボリ」や風せんが空高くあげられている

栈橋には津島防衛庁長官を始め林統幕議長、杉山陸幕長、長沢海幕長、佐薙空幕長、防衛庁幹部は栄誉礼に迎えられ家族と共に練習隊群のハワイ遠航を祝した全乗員は甲板に整列し、帽ふれ!!で別れを惜しみつゝも、どの顔にも希望と決意で元気一っぱい音楽隊の奏する軍艦マーチもやがて「蛍の光」にかわり四艦は雨けむる東京湾に消えて行く、中山定義海将補を司令とする遠航部隊は大平洋の波濤を越えて遙々パールハーバー、ホノルル、ヒロ（ハワイ島）を訪門各地に於て盛大な大歓迎を受けた……広大無変の海洋における精神

的な試練と斗い艦船乗員の基礎的な勤務を体得し海外に見聞を広め親善使節の使命を果たし2月24日無事帰国した……かくして年毎に相次ぎ遠航は実施される
第二回昭和33年8月6日吉田英三海将を司令として、「はるかぜ」「あやなみ」「うらなみ」「きり」「かや」「すぎ」の六隻はミッドウエー、パールハーバー、シャトル、ブレマートン、バンクバー、エスカイマルト、サンフランシスコ、を訪門10月10日無事帰国

第三回昭和34年6月18日赤堀次郎海将補を司令として「いそなみ」「しきなみ」「けやき」「さくら」「くす」「かや」の六隻はミッドウエー、パールハーバー、マウイ、ヒロ、サンディゴ、ロスアンゼルス、サンフランシスコを訪門8月26日帰国

第四回昭和35年5月18日石黒進海将補を司令として、「ゆきかぜ」「いそなみ」「しきなみ」「うらなみ」「ゆうぐれ」の五隻はミッドウエー、パールハーバー、アストリア、ポートランド、サンフランシスコ、ホノルル、を訪門7月2日無事帰国

第五回昭和36年6月23日三上作夫海将補を司令とし、「あきづき」「あやなみ」「ありあけ」「ゆうぐれ」の四隻はミッドウエー、パールハーバー、サンディゴ、サンマニヨ、アカプルコ、ロスアンゼルスを訪門遠航の途についた帰国は9月1日の予定

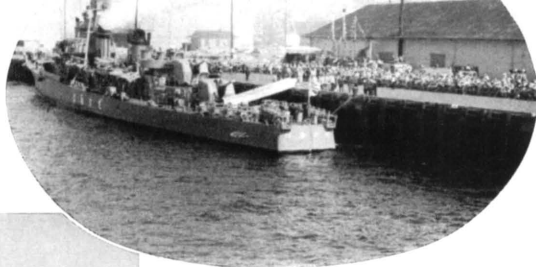
ハ ワ イ



遠洋航海

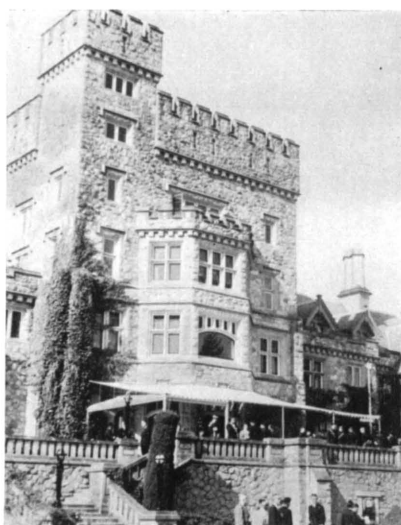
「シャトル」「ブレマートン」「バンクーバー」

点描と歓迎スナップ



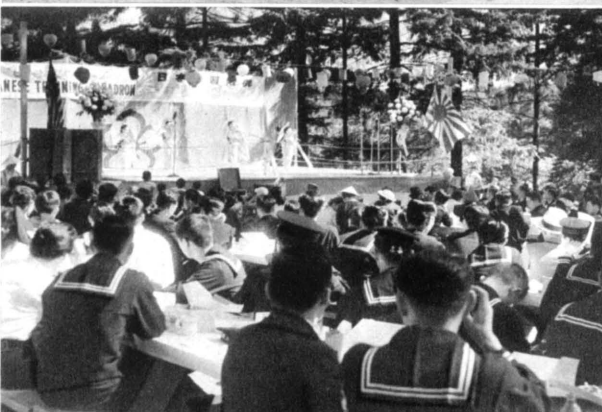
シャトル

ブレマートン



カナダ・バンクーバー







遠洋航海
サンフランシスコ点描



サンフランシスコ



ポ
ー
ト
ラ
ン
ド

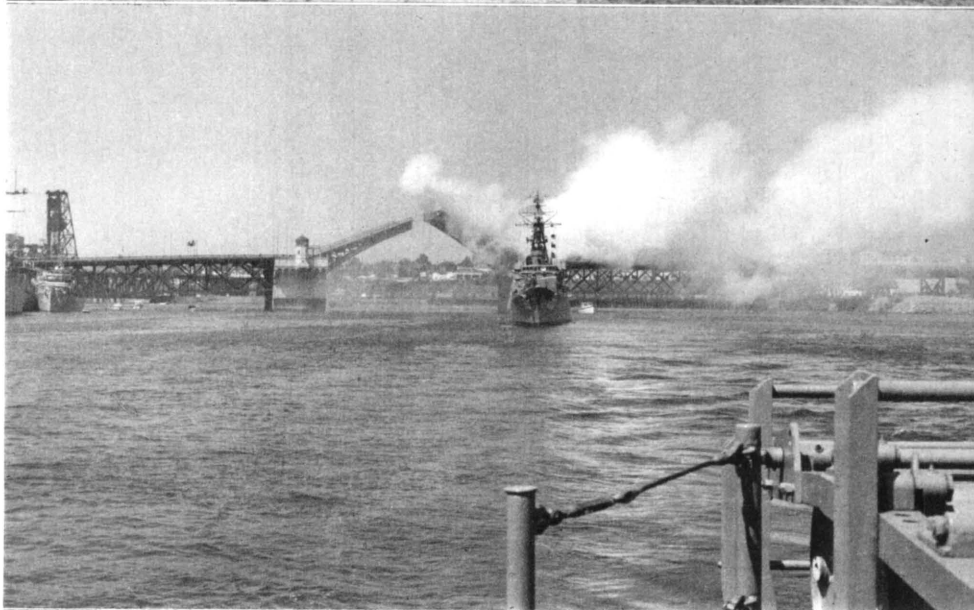
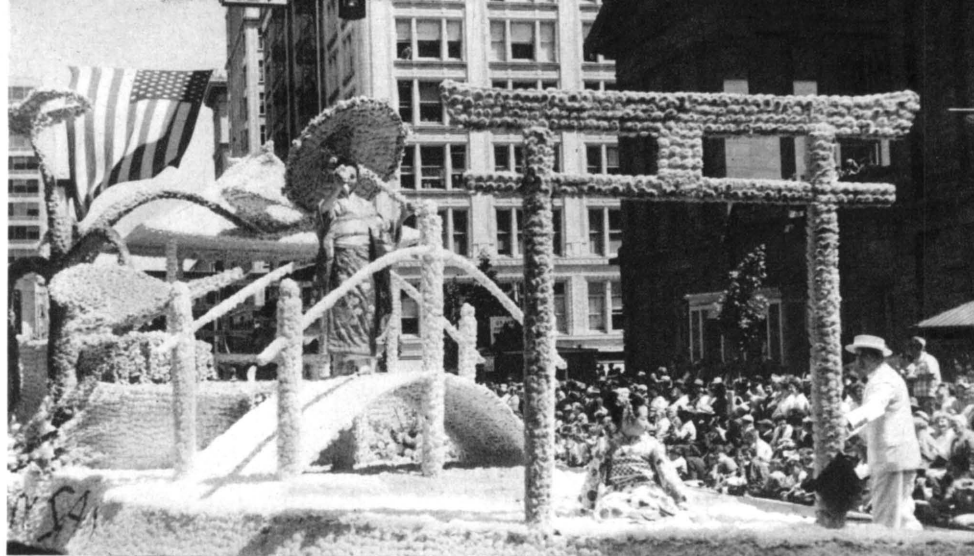
ロ
ー
ズ
パ
レ
ー
ド



遠 洋 航 海

ポ
ー
ト
ラ
ン
ド

(ロ
ー
ズ
・
パ
レ
ー
ド)
ス
ナ
ッ
プ





防衛友の会は昭和二十七年海上自衛隊発足と共に「みんなで築こう祖国の防衛」を標語に創立国防に深い理解と熱意をもった国民同志の集りでありまして防衛思想普及に関する事業の一切隊内の厚生福祉に協力する念願として今日を迎えました、今後共一層御支援をお願い致します。



スターもPRに一役

編 集 後 記

明治43年創立以来旧海軍より父子三代にわたり多大なる御引立を賜り徴力乍ら写真を以て海軍囑託として終戦を迎え一瞬にして其の生甲斐を失い、情熱のはけ口を求める術もなく、混迷の数年を経て昭和27年保安庁警備隊発足と共に再度皆様方と共に生きる喜びを与えられ明るい希望の中に皆様方がどの様に苦心を重ね幾多の難関を克服し創設の苦しみ建設への苦難がどのようなものであるかを知りこの光輝ある足跡を何かの形にして残し後世に伝えるこそ私の使命であるとの確信をもつて海上自衛隊史四年の歩のグラフ発刊等を実現し、なお又今回自衛隊発足十週年を迎えるに当り東奔西走して蒐集しました写真は実に数千枚に達し、どれもこれも捨て難く従て編集に美点を欠く点も多少ある事と存じますが紙数の都合もあり雑駁の結集となりましたが微意の存するところをお汲み取り下さいまして旧に培し御引立の程節に御願い申し上げます

防衛友の会理事長

高梨頼久

祝・海気集・発刊

海国日本は若人の手で

会則・会案内無料進呈

青少年自らの手で築きあげた海事愛好団体

- 昭和31年9月、学生6名で創立
- 現在の会員総数、男女4,000名
- 小学校から大学まで全国572校の学生・生徒
- 機関誌MARITIME-NATIONを月刊
- 訓練、見学、講演会等行事実施既に340回
- 5地方支部、18海洋部72グループ
- 選出委員による若人の自主運営

海の若人の会

本部長 藤原雅敏 最高顧問 富岡定俊
東京都豊島区池袋5丁目354番地
電話：(982) - 1310、振替口座：東京 83913



防衛庁

潜水艦救難艦“ちはや”昭和36.3竣工



三菱日本重工業株式会社
横濱造船所 建造

皆様のおすすめにより近日発売

艦艇航空機集の「改善」!! 一部あれば
永久に!!

艦艇航空機ポストカードのコレ
クション

五つの特徴

- (1) 年々新鋭の艦艇や航空機の増強にと
もない追加が簡単に出来る
- (2) コロタイプ印刷による美術の粋を集
めた最高級ポストカードに要目解説
付
- (3) 皆様の手によつて自由に挟込が出来
思い思いの趣味と記録を生ず
- (4) 而も150円の入会金で金属製リン
グ100枚綴りのアルバムが得られ1ヶ



月10円の会費で知らず知らず立派な
コレクションアルバムが完成して行
く

- (5) 郷里の通信用にも利用出来る
転勤されても当会から転勤先へ発送
します
御申込と同時に説明書を御送りいた
します

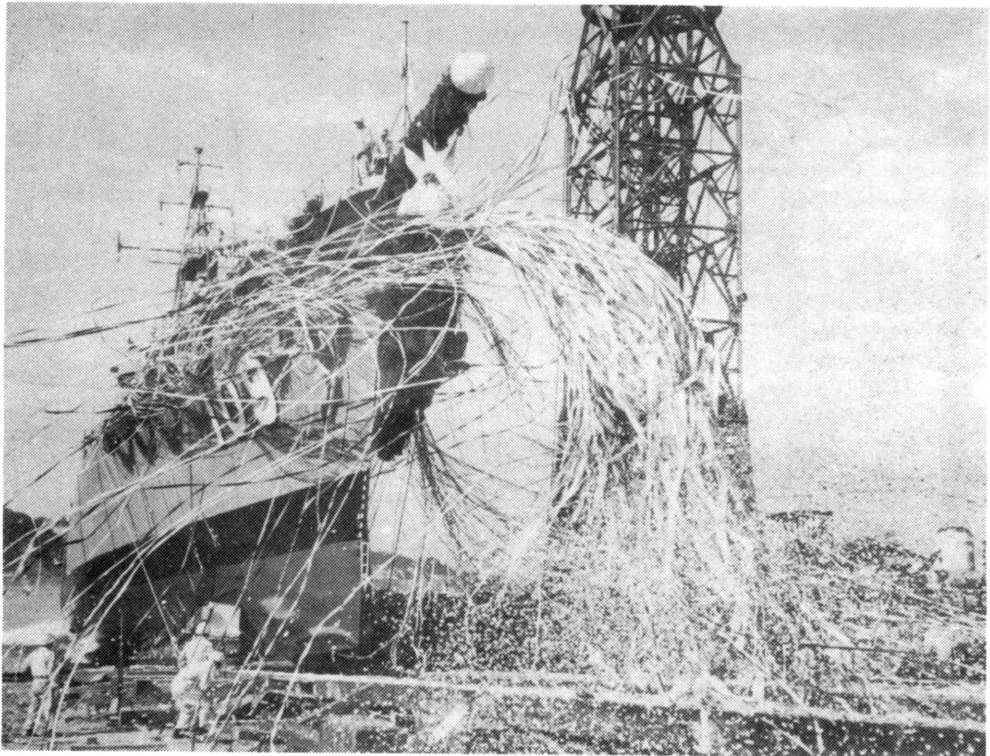
防衛友の会本部

祝 ・ 海 気 集 癸 刊

社 団 法 人 横 須 賀 水 交 会

社 団 法 人 横 須 賀 隊 友 会

会 長 能 勢 省 吾



浦 賀 船 渠 株 式 会 社
浦 賀 造 船 所

横須賀市浦賀町4丁目7番地
電話 代表 浦 賀 80・180 番
横須賀 2355〜7 番
S64. S. R15. 36. 2. 10,000

海 幕 消 修

発行日

昭和三十六年七月十八日

定 価

¥ 550

〔 禁 不 許 複 製 〕

発 行 所	防 衛 友 の 会 本 部 横 須 賀 市 安 浦 町 1 の 5 振 替 口 座 横 浜 4 2 9 6
撮 影 編 集	日 進 美 研 ス タ デ オ
後 援	水 交 会 ・ 隊 友 会 横 須 賀 支 部 東 京 海 の 若 人 の 会 本 部
印 刷 所	東 京 平 井 真 美 館 三 島

単独御注文の場合⇒御注文、御送金の際は最寄

郵便局窓口にて振替を御利用下さい。